

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

本章では、京都大学における教育と研究の場の歴史について述べる。本学キャンパスの中心は、吉田キャンパスと宇治キャンパスであり、吉田キャンパスは、本部、北部、西部、南部(旧教養部)、医学部、病院(東・西)・薬学部の6地区と、熊野地区、人文科学研究所地区、清風荘からなっている。

吉田・宇治キャンパスでは、ここ10年ほどの間に大きな変化が起こりつつある。すでに新しい理念を反映した建築として具体化しているものもあり、一方、創立以前にさかのぼる歴史的建築も修復・再生され、次の百年に向かって歩みだしている。京都大学の教官・職員・学生の生活空間は、幸いなことに、砂漠のようなコンクリートジャングルではなく、少なくなったとはいえ、教育と研究の足跡を伝える建築も点在している、多彩な景観をもつキャンパスなのである。豊かな自然と歴史と文化を志向する21世紀への見通しを明確にするためにも、ここで京都大学キャンパスと建築の百年にわたる歩みをふり返ってみる必要がある。

京都大学キャンパスと建築の歴史も、総説編の章別構成にみられるような変遷過程をもっているが、そこに建築的な視点も組み込んで、おおよそ次のように7期に分けて理解するのがわかりやすい。

- 第Ⅰ期……第三高等学校キャンパスの誕生
——明治20(1887)年～明治30(1897)年
- 第Ⅱ期……京都帝国大学キャンパスの創成
——明治30(1897)年～大正7(1918)年
- 第Ⅲ期……京都帝国大学キャンパスの拡大と充実
——大正8(1919)年～昭和4(1929)年
- 第Ⅳ期……京都帝国大学キャンパスの整備
——昭和5(1930)年～昭和21(1946)年
- 第Ⅴ期……京都大学キャンパスの全面的再開発
——昭和22(1947)年～昭和47(1972)年
- 第Ⅵ期……京都大学キャンパスの再編と保全
——昭和48(1973)年～昭和60(1985)年
- 第Ⅶ期……京都大学キャンパスの現在と未来
——昭和61(1986)年～平成9(1997)年

以下の節では、京都大学キャンパスと建築の歴史と文化を読み解くのに必要な、第三高等学校キャンパス形成以前の吉田とその周辺地域の歴史を含め、時期ごとに変遷過程をたどることにする。京都大学には歴史的建造物として保存されている建築があり、これらについては第9節においてやや詳細に説明する。

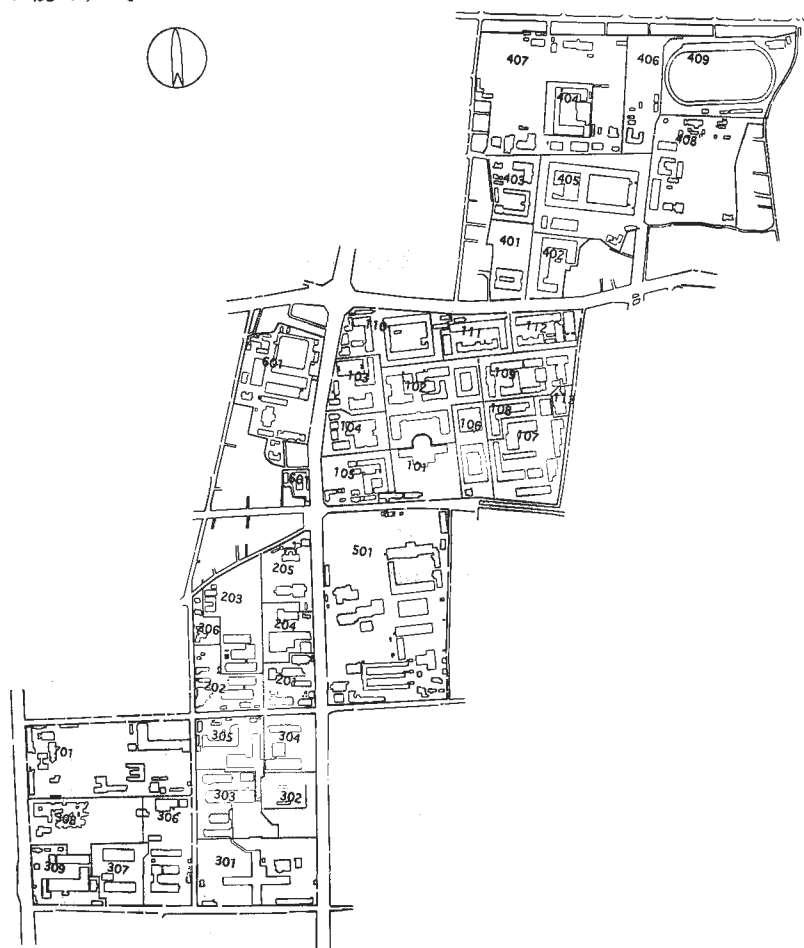


図 1-8-1 京都大学キャンパス地区区分図

第1節 京都大学キャンパス以前

——吉田と周辺地域の自然・歴史・文化

京都大学本部地区、特に時計台を目指すアプローチの大詰めは、東大路通りと東一条通り、そして白川道の交差点から東へ進むことになる。正面に朱塗りの鳥居と石灯籠、緑の松並木、吉田山、さらに大文字、如意ヶ嶽と、いかにも京都らしい景観を眺めながら左に折れ、明治26(1893)年に第三高等学校表門として建てられた正門に入る。

この正門前の道路は、東一条交差点の東南角の石碑が「吉田神社参道」と表示するようにもともと吉田神社の参道なのである。碑文が「京都帝国大学総長松井元興書」であるのは、アプローチ道路を共用する吉田神社と京都大学との歴史的なかわりを象徴しているようである。

日ごろ目にすることが多く、身近な存在である吉田山(古くは神楽岡)は、船岡山(古くは船岡)や双ヶ丘とともに平安京の建都に際して重大な意味を担っていた。平安京の北京極大路(一条大路)の東西延長上にある吉田山と双ヶ丘、また平安京朱雀大路の真北に位置する船岡の三山は、「平安京の北辺を守衛する形態」とっていた。この三山はまた、いわゆる大和三山(香久山・畝傍山・耳成山)と同じ歴史的・文化的意味をもつ「平安京三山」であったらしい。つまり吉田山は、平安京の地の「鎮め」の山であり、神仙思想にいうところの三神山の1つと考えられる。

この吉田山の東南の地に、国の重要文化財に指定されている吉田神社斎場所大元宮が建っている。八角円堂に草葺、入母屋造りの屋根をのせ、棟の中央に露盤宝珠をあげた、きわめてめずらしい姿をもち、江戸時代初期、慶長6(1601)年再建の建築である。また北方の地には春日社があり、江戸時代前

期、慶安元(1648)年修造の春日造り本殿4棟が並立している。吉田山は、自然と歴史と文化と宗教とが渾然一体となっているのである。

また、キャンパスの北に広大な伽藍を構える百万遍知恩寺も、すぐれた歴史環境である。よく整備された境内には本堂をはじめ多くの堂が整然と配置されており、そのうち本堂と釈迦堂は京都府の文化財に指定されている。

平成6(1994)年12月、タイのプーケットで開かれた世界遺産委員会において、「古都京都の文化財」が世界遺産条約(「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」)に基づく世界文化遺産として認められ、世界遺産リストに登録された。吉田キャンパスの近くでは、慈照寺(銀閣寺)と賀茂御祖神社(下鴨神社)が世界遺産リストに登録されている。

京都大学キャンパスのあるこの地域には、自然や歴史・文化遺産など、数多くの歴史文化資源が集積しているといつてよい。

第1項 原始・縄文・弥生・古墳時代

1. 京都盆地・神楽岡・吉田野・白河・鴨川

京都大学のある吉田は、京都盆地の中でも東端部に位置し、大文字山を中心とする如意ヶ嶽と、鴨川に挟まれている。京都盆地を囲む山々は、東の比叡山・如意ヶ嶽・東山、西の老ノ坂山脈、北の北山であるが、これらの山脈のうち最も高い愛宕山と比叡山は、盆地を形成する最古の岩石層が、常に地上に侵食されてできあがったもので、現在、京都盆地の中に浮かぶ船岡山・双ヶ丘・吉田山などの独立した丘陵も、同時代の岩石層からなり、度重なる地盤の変動により生じた。

約2,250~500万年前ころには、広範囲に及ぶ第一瀬戸内海が出現、その後、この内海は一度はなくなるが、地形の変化によって滋賀・京都・大阪を連ねる地域に新たな湖が作りだされた。これは約400万年前のことで、この湖はその後、約200~300万年にわたって存続する。約200万年前には、湖に海水が侵入し、これ以降しばらくは、内海と淡水湖の変化を繰り返してい

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

た。このころの京都盆地では、なだらかな山脈に囲まれた水域に、吉田山・船岡山・双ヶ丘といった独立丘陵が浮かぶ姿が想像されよう。今日のような京都盆地の形が出来上がったのは、さらに後、約80万年前に六甲変動が起ってからのことである。

六甲変動によって京都盆地は、地盤の激しい変動を起こし、京都は内陸盆地としての形をもつようになった。すなわち、京都盆地の周囲を囲む山脈と、その内部へのくり返し起こった海水の侵入・流出によって、盆地床のもととなる厚い堆積層がつくられたのである。盆地内、東・北・西の山脈付近では、鴨川・高野川・白川などの河川によって流入した土砂が堆積することによって、扇状地が形成された。特に京都大学の建つ吉田周辺は、高野川と白川に運ばれた、比叡山の風化した花崗岩が集積している。これに対して盆地の南西部は、河川や低湿地からなる沖積平野であった。

このようにつくられた京都盆地は、穏やかな気候、広い範囲に及ぶ河川、豊富な地下水など、自然条件に恵まれ、早くから人類の生活が始められ、継続されてきた。また、周囲の山脈を貫く断層に沿った陸路、瀬戸内海と京都を結ぶ淀川水系をはじめとする水路といった交通路は、平安京以降の京都における都市生活を支える重要な要素となっていた。

2. 集落と生活

縄文時代の京都盆地における人々の生活は、盆地周辺部、すなわち山地や、そこから流れる河川の扇状地上に営まれていた。なかでも北白川周辺は縄文時代を通して集落が営まれた場所として、かつての京都盆地での生活中心の1つであったことが明らかになっている。瓜生山と大文字山の間を流れる白川は、背後の山脈から花崗岩の砂礫を運び込んで扇状地をつくり出した。この扇状地、すなわち北白川からは、縄文時代を通じて多くの土器・石器類が発見され、人々の狩猟・漁猟・採集の生活を垣間みることができる。

京都盆地最古の押型文土器は北白川上終町で出土し、北白川に集中する遺跡群から発見された縄文時代前期の土器類は、近畿地方の縄文土器の年代を

判定する標式土器になっているほどである。これらの出土品で興味深いのは石錘である。この石錘は漁網の錘と推測され、北白川の人々が白川をはじめ鴨川・高野川などで漁獵を営む姿が想像される。

その後、人々はいったん北白川の地を離れたようであるが、弥生時代中期にいたって新たな生活が営まれた。上終町遺跡からは、明らかに火を用いたことを示す遺跡がみついている。この遺跡は、縦長の石を並べ立ててつくられた、直径80cmほどの炉跡で、その中には焼けた土砂・石とともに、炉内で用いていたと推測される土器が残されていた。さらに炉跡の周囲には柱穴と思われる小穴があり、住居の跡であったこともわかっている。

縄文時代も後期になると、生活の舞台はその北の一乗寺へと移っていくとともに、その生活の跡も希薄になっていく。もともと湖であった京都盆地は、平野部の多くが湿地帯で、狩猟・漁獵・採集を中心とする縄文時代の生活に必ずしも適してきたとは言い難い。吉田周辺における人々の生活の新たな展開は、稲作文化の到来を待たなければならない。

京都盆地で最も早く稲作が始まったのは、桂川流域であった。これは淀川にそって北上してきたのであった。一方、高野川や白川流域にできた平野部は、桂川流域と同じように、弥生時代前期から村落が営まれ、稲作が行われていたと推測される。京都大学理学部地区(左京区北白川追分町)をはじめ岡崎近辺(左京区岡崎御所ノ内町)からは、村落の存在を推測させるような弥生時代前期の土器片がみつかり、吉田山周辺からも弥生時代に属する石器が発見された。

北白川をはじめとする東山麓付近の村落は、琵琶湖西岸地域の集落との交流が考えられ、特に岡崎御所ノ内遺跡から出土した土器は、弥生時代前期に属するものであるが、東海地方の土器の特色と共通しているという。これは、京都盆地の東部が、近江を通じて東海地域と文化的につながっていたことを表している。

このように、弥生時代の京都盆地の文化は、1つには近江を経て東海地域へとつながる盆地東部の文化と、もう1つは、桂川流域にみられる、淀川を

通じて大阪湾へとつながる西部の文化の双方が混在していたのである。

古墳時代にいたると、吉田地区から南に遠望できる將軍塚をはじめ、その南に続く東山連峰には古墳群がつくられる。

第2項 古 代

1. 神 楽 岡

本部地区のすぐ東には、吉田神社が鎮座する神楽岡(吉田山)が控え、地区に四季の自然の変化を色濃く映し出している。

神楽岡(吉田山)は標高約100mの丘で、北の船岡山、西の双ヶ丘とともに、京都盆地の中に浮かび上がる3つの山の1つである。この岡が最初に文献史料にあらわれるのは、延暦13(794)年のことであり、桓武天皇が「康楽岡」で遊獵したという。また、嵯峨天皇の皇女潔姫が埋葬された場所は「賀楽岡白川」であったと記される。このように、古くは「康楽岡」とも「賀楽岡」とも書かれていたが、貞観8(866)年には、周辺での葬送を禁止する勅のうち「神楽岡」と記されている。「神楽岡」と記されるようになったのは、神々が神楽を奏した岡であったためという。江戸時代前期成立の『扶桑京華誌』には、神楽岡を天岩戸とする卜部家の説、東の日降坂を日輪降臨の地とする俗説があげられている。

神楽岡は、志賀越道から京都へ入る重要な入口であった。したがって動乱期には神楽岡はしばしば戦場となった。『太平記』は、建武3(1336)年1月、南北朝の抗争の中、足利尊氏と新田義貞との戦いでは、宇都宮、紀・清両党の足利軍勢がここに城を構えて戦ったことを伝える。観応2(1351)年にも、同じく南北朝の戦乱の舞台となり、南朝が足利義詮の軍勢を破った。また、織田信長もここに築城を構想し、柴田勝家に調査させたが、断念したという。

2. 古代の寺院と神社

京都盆地には、平安遷都以前からいくつもの寺院が建てられていた。右京区太秦の蜂岡寺(広隆寺)、左京区北白川の北白川廃寺、北区北野の北野廃寺などである。

北白川廃寺は、現在の北白川別当町から上終町に位置する。この遺跡からは、一辺約14m、瓦積みの塔基壇跡が発見された。また、その東には東西43m、南北23mもある、同じく瓦積みの基壇跡が、西南にも基壇の盛土跡がみられる。ここから出土した多くの古瓦は、この寺院の創建が白鳳時代にまでさかのぼること、さらに平安遷都以降も存続していたことを示している。興味深いのは、ここから発見された瓦に、平安宮あるいは京内で発見されたものと同じ形式のものがあり、朝廷との結び付きが推測される点である。

吉田神社が神楽岡の西に創建されたのは、貞観年間(859~877年)のことと伝える。現在、吉田神社は神楽岡の西麓、中腹あたりに位置しているが、これは応仁の乱で焼失した後のことである。最初は、吉田近衛町北部と吉田二本松町南部、すなわち京都大学総合人間学部(旧教養部)南部辺りに、その主要な社殿が建っていたと考えられている。

藤原北家の末裔、中納言山蔭は、藤原氏の氏神である春日社の四神を勧請した。このころ、社殿は南面する4棟からなり、その前には中門を開いていた。その外の玉垣に鳥居があり、さらにその外に大鳥居があった。大鳥居の外には、南の行事所屋とその北の北屋という2棟の南北棟の建物が建ち、内には東西棟の着到殿と、その南の同じく東西棟の五間屋が、さらに玉垣の内には南屋(舞殿)と直会殿が建っていた。

3. 山荘・邸宅・葬所

本部地区は古く平安時代から「吉田野」・「吉田村」と呼ばれ、公家の山荘が営まれた。高倉天皇の中宮であった建礼門院も一時期吉田に住んだらしい(『平家物語』)。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

藤原摂関家の祖ともいべき太政大臣藤原良房は、『大鏡』では白河の大臣、『今昔物語集』でも白河の太政大臣と呼ばれている。藤原良房が白河辺りに葬られた(『三代実録』)ためとする説、白河に別業をもっていたためとする説の2説があるが、ともかくも、白河が古くから藤原家の別業の地であり、また藤原家の墓があったことは確かである。藤原家累代の山荘である白河院は、都で第一の桜の名所として知られ、苑池の岸に多くの花をつけた木々が植えられていたという。

神楽岡には、潔姫が埋葬されたことに始まり、平安時代の終わりには後一条天皇と後冷泉天皇の中宮章子内親王が葬られた。後一条天皇は寛弘5(1008)年に、藤原道長の娘上東門院彰子を母として生まれた。長元9(1036)年4月17日に死去したのち、5月19日に神楽岡東の「浄土寺西原」で火葬された。遺骨は浄土寺に納められたが、あわせて上東門院によって神楽岡東に菩提樹院が建立・供養されている。

このほか、神楽岡の南、近衛坂付近の吉田神葬墓地も古くから葬場として知られていた。中古には石造りの三重塔があり、諸人の遺骨を埋葬する場所であったとされる。もともと吉田とその南の黒谷の間に、「火屋」と呼ばれる火葬場があり、寛文年間(1661~73年)に火葬を禁止し、「火屋」を黒谷の東南に移し、新たな墓地を開いたという。永祚元(989)年、摂政藤原兼家が吉田に1,000本の卒塔婆を立てたという記録があるが、これは神楽岡の南、初めに「火屋」と墓地があった場所であろう。

京都大学農学部前での京都市電の軌道工事の際、多くの石仏と五輪塔が出土したという。これらの五輪塔は、弘治(1555~58年)や、天正(1573~92年)の銘があったといい、これも吉田葬送所との関係が考えられる。

北白川は、古くから村上源氏の墓地ともなっていた。村上天皇の皇子具平親王の墓所に始まるといわれるが、さらに古く文徳天皇女御明子の白川陵もこの北白川の地に営まれていたと推測されている。

京都大学北部地区遺跡(左京区北白川追分町)において、やや後の時代のことであるが、鎌倉時代初期の火葬塚と推定される遺跡が発掘されている。

第3項 中 世

1. 白河の変容

吉田の南、白河の地は物寂しい場所であったが、藤原師実から累代の別業白河院を献上された白河天皇が、そこに奈良時代の東大寺に匹敵するほどの大伽藍、法勝寺の造営を始めたのをきっかけとして、尊勝寺、最勝寺、円勝寺、成勝寺、延勝寺と、いわゆる六勝寺が相次いで建立される。さらに白河は、格子状の大路小路からなる整然とした道路網が整備され、院政政権の本拠として市街化が大きく進行した。こうして白河の地域は、その様相・性格を一変することになる。

平安時代後期は、造寺造仏が流行したが、特に塔の建立が盛んな時代であった。とりわけ白河では、六勝寺以下、多くの寺院が建てられたこともあって、20基ほどの塔が林立していた。なかでも当時の人々を圧倒したのは、法勝寺の巨大な八角九重塔であったにちがいない。

今日では、白河に林立していた塔はすべて失われ、吉田山に江戸時代、寛永11(1634)年の金戒光明寺三重塔(国指定重要文化財)、文化3(1806)年の真正極楽寺三重塔(京都市指定文化財)が建つのみである。

2. 吉田神社

応仁2(1468)年7月4日、吉田神社は応仁の乱の戦火にかかり、創建以来、最大の被害を受けることになる。このとき、新長谷寺や浄蓮華院、吉田の在家まで焼かれた。その直後、吉田社では社領が侵食され、諸国に設けられた神領の多くを失い、神事を継続することすら困難な状態に陥った。存続の危機にあった吉田神社を復興したのが卜部(吉田)兼俱であった。

吉田神社が現在地に移ったのは、応仁の乱が終わってまもない文明年中(1469~87年)のことである。まず文明12(1480)年の元旦には神楽岡東南の現在地に斎場所が移っており、文明16(1484)年には大元宮が完成している。現

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

在の建築は慶長6(1601)年の再建で、八角円堂に草葺の入母屋造りの屋根をのせた、きわめてめずらしい姿をしており、国の重要文化財に指定されている。ちなみに大元宮は、日本全国の天神地祇八百万神を合わせ祀り、広く人々の崇敬を集めている。

次いで本社をはじめとする社殿が、神楽岡(吉田山)西麓の中腹、現在地に復興される。文明19(1487)年の奈良春日大社の式年遷宮に際して、社殿4棟のうち若宮と大宮の2棟を吉田神社に移すことになったが、しかし長享3(1489)年には神体は斎場所に祀られ、いまだ本社は造営されていなかったという。明応2(1493)年には仮殿がつくられていたから、このころようやく社殿が整えられてきたのであろう。

江戸時代においては、吉田社といえば、斎場所大元宮のことであり、一方、春日造り社殿のある一郭は「春日社」と呼びならわしていた。大元宮と吉田社からなるこのような社殿の構成を反映して、参詣のための道も2筋ある。大元宮に通じる南参道と、春日社にいたる「吉田神社参道」、すなわち表参道である。

洛中洛外図屏風のうちでも最古とされ、成立が16世紀前半と考えられる国立歴史民俗博物館所蔵洛中洛外図屏風甲本(町田家旧蔵本)には、このころ「春日の馬場」と呼ばれた表参道が描かれている。神木である松のみごとな並木は、現在の景観の原形ということができよう。

吉田神社とその周辺の様子も描き込まれている。神楽岡のうっそうと茂った木立の中に朱塗りの鳥居、その向こうに入母屋造り、檜皮葺、千木をのせた社殿がみえる。参道の南には、吉田の村が描かれ、要害の土堀で嚴重に囲まれた一郭に、草葺の民家が立ち並んでいる。

こうして15世紀末から16世紀前半にかけて、現在の吉田神社とその周辺の原形ともいえるべき景観ができあがっていた。

第4項 近 世

近世におけるこの地域の変化を、当時広く刊行された地図によって簡単にたどってみよう。承応2(1653)年に刊行された「新改洛陽并洛外之図」は、京都図の流れの中で、洛中を取り囲む御土居を描き込んでいないものの、初めて洛外の諸景観に地理的な位置を与えた図である。鴨東の地域については、田中・吉田・黒谷・聖護院などの村々の位置や、吉田神社・熊野社・金戒光明寺などを示し、それらと洛中を結ぶ道を描き込んでいる。すなわち高野川と賀茂川の合流付近から東へ白川村にいたる道、荒神口から東北に白川村へといったる道(白川道)、荒神口から東へ吉田村を経て黒谷へといったる道などが描かれている。

江戸時代の吉田の地域に大きな影響を及ぼした出来事として、まず百万遍が当地に移転してきたことがあげられよう。

1. 百万遍知恩寺の移転

浄土宗、4カ本山の1つ、俗に百万遍の名で知られている知恩寺が現在地に移転したのは、江戸時代の前期、寛文2(1662)年のことである。古くは上京の一条小川の地にあったが、ここは上京でも一二を争う繁華街であり、庶民信仰を集める寺院街でもあった。戦国時代の京都を訪れた南蛮人ルイス・フロイスは、百万遍について、「全市で最も参詣人の多い百万遍という阿弥陀の寺があった。全市中最も通行多き所にして、ここでは終日、ことに夕刻になって、かの職人たちが店を閉じ、仕事から解放されると、おびただしい群集が殺到して喜捨をしたり、大声でその偶像に祈ったりした」と述べている。

豊臣秀吉の京都改造事業のあおりをうけて、百万遍は土御門京極(寺町荒神口北)に移転を命じられ、伽藍を営んだが、寛文元(1661)年の大火に類焼し、その翌年、現在地に移り、延宝7(1679)年には復興を遂げた。境内に

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

は、宝暦6(1756)年に竣工した御影堂はじめ、釈迦堂や阿弥陀堂、表門などの諸建築が立ち並び、良好な歴史的環境を形づくっている(御影堂と釈迦堂は京都府指定文化財)。

2. 吉田神社と吉田村、白川道

吉田神社へ参詣する人の往来が多かったのは、吉田村の中心道路でもある南参道であった。『拾遺都名所図会』(天明7<1787>年)では、南参道の景観を大きく取り上げ、西端にある門と枳形、広い道に沿って並ぶ社家、大元宮や春日社の景観をリアルに描いている。

京都大学附属図書館が所蔵する洛中洛外絵図(天明6<1786>年)は、京大工頭中井家が作成した、当時としては正確な絵地図である。それによると、春日の馬場の南に接して、もう1筋の道が描かれている。新しい参道が整備さ



図1-8-2 洛中洛外絵図にみる吉田周辺

れたらしく、このため「北の馬場」、「南の馬場」と区別されるようになった。南の馬場の東端にみえる鳥居は、今の二の鳥居に当たるものであろう。なお、南参道に鳥居が描かれていないのは、参詣路としても日常生活の上でも大きな意味をもったことからすると不可思議に思える。

第5項 幕末・維新时期

1. 幕末・維新时期の吉田村周辺

嘉永6(1853)年のペリーの来航以来、京都の朝廷の動きは全国から注目され、そのため幕命による彦根藩井伊直弼の京屋敷建設に始まり、各藩が置いていた京屋敷は、次々と増築、拡大されることになった。それまでの京屋敷は、禁裏御所のある京都における儀礼祭典のための連絡所として、また伝統文化の香りのただよう物品を購入するなどの機能をもち、町中に埋没された形で設けられていたが、この時期から大きく様変わりし、市民はもちろん幕府でも立ち入ることのできない政治活動の拠点、治外法権的な場所となった。

慶応4(1868)年春に再板された、「改正京町御絵図細見大成洛中洛外町々小名全」は、明治と改元される7カ月前に刊行されたもので、洛中が拡大され、詳細に描かれている。

村々や寺社、往還道の描写は、ほとんど変わらないが、前代と大きく異なるのは、百万遍の南と北にそれぞれ尾張藩と土佐藩の屋敷が出現していることである。また、聖護院村の辺りには彦根屋敷をはじめ、会津藩屋敷、越前屋敷、薩州屋敷、加州屋敷、阿州屋敷などが並んでいる。

尾張藩屋敷の敷地は、のちに第三高等学校が敷地を引き継ぐことになるのであるが、新たに建設されたこの尾張藩屋敷によって、荒神橋から白川村へと斜めに走る古くからの白川道が遮断されてしまったことがわかる。

会津藩の屋敷は、松平容保が軍事総裁職兼京都守護職代行であったころの文久4(1864)年2月24日に、鴨川の東、聖護院村の地に3万7,000坪を副邸

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

地として定められた。練兵場として使用し、同4月7日、守護職に復帰した後、会津屋敷となった。なお明治5(1872)年に牧畜場となり、その後、京都織物会社が建設され、曲折を経て京都大学の敷地となった。

これらの藩邸の出現は幕末期から明治期へといった変化、また地域の特徴が大きく変わりつつあることを示すものである。

2. 尾張藩屋敷と吉田神社

さて、吉田神社の北の馬場と南の馬場が1つの道になり、しかも「表」の参道と位置付けられるようになる変化は、いつ、どうして起こったのであろうか。その背景には、幕末の京都が久しぶりに政治権力闘争の場となったことがあった。

文久3(1863)年春3月にはおよそ200年ぶりに将軍の上洛が行われ、8月には公武合体派のクーデターにより尊攘派が追放され、そして翌元治元(1864)年7月には蛤御門の変、そして「鉄砲焼き」と呼ばれた大火災が勃発した。幸か不幸か、京都は再び政治都市になったのである。

政治抗争の中で土佐藩、長州藩、薩摩藩に伍してしだいに頭角を現してきたのが、御三家の1つ、徳川慶勝の尾張藩であった。元治元年、尾張藩は以前からあった下京天神山町の屋敷とは別に、新たに百万遍知恩寺の南に広大な屋敷を構えた。これが元治元年の「大成京細見絵図」にみえる「尾州殿ヤシキ」であり、この屋敷地が第三高等学校をへて、京都帝国大学、そして京都大学の本部地区敷地として引き継がれたのである。

当時の状況を記した「吉田御屋敷惣図」によると、敷地は南北に長い矩形であり、敷地の四周には内側に「土居」と「矢来」をめぐらし、外側に「カラ堀」を掘っている。南辺の門は、大きく口を開け、西よりの南御門を正門とし、東よりに通用門を配している。北辺中央、東辺中央、西辺中央に脇門を開ける。東門の辺りから、水路が西へと流れ、西辺近くの長屋の手前で南に折れ、敷地南西隅へといったっている。

敷地の中央南よりに屋敷、それを取り囲むように東、西、北に多数の長屋

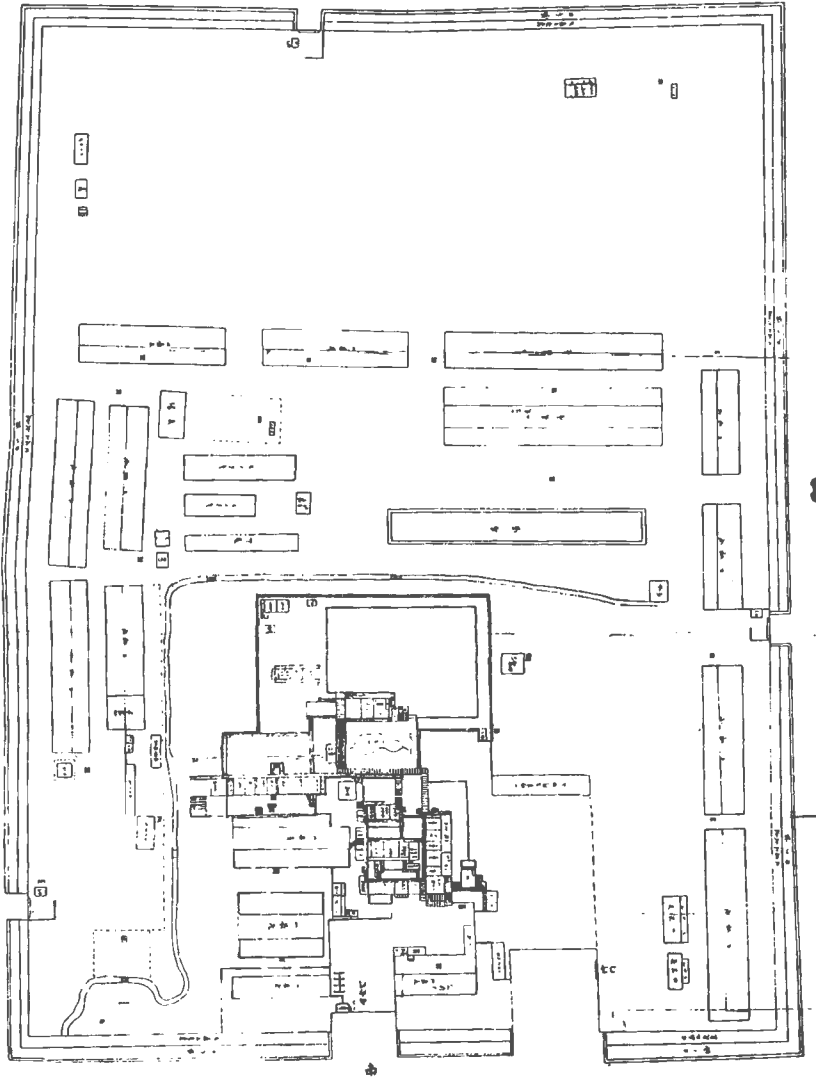


図1-8-3 名古屋市蓬左文庫蔵「吉田御屋敷惣惣図」

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

を配置している。相当な数の武士が駐屯していたようである。中央の空地には、軍事教練のための馬場も設けられている。

吉田神社はこうした環境の変化に敏感に対応したらしい。北の馬場と南の馬場を一体化して一筋の表参道とした。さらにその正面を飾り、かつ神域を示す境界の装置として新しく一の鳥居を建て、その前面両脇に石灯籠を建てるなど、杜頭の景観を整備したようである。「慶応元乙丑歳(1865)十二月」という日付が刻まれたこの石灯籠は、こうした変化を語る歴史の証人のように思われる。正門前の道とその景観は、まさに近代の胎動の中で形づくられたといえようか。

第2節 第三高等中学校キャンパスの誕生

——第Ⅰ期・明治20(1887)年～明治30(1897)年

第1項 第三高等中学校の京都移転

明治19(1886)年の「中学校令」は、全国を5区に区画して、各区ごとに1カ所高等中学校を設置すると定めた。

京都帝国大学が明治30年の創設に当たり、土地と建物を譲り受けることになった第三高等中学校は、洋学教育における専門的な理化学校としての舎密局と、洋学教育における普通教育の機関としての洋学校を2つの系譜としてもっている。教育制度のめまぐるしい変遷にともなって、大阪開成所、第四大学区第一番中学、第三大学区第一番中学、開明学校、大阪外国語学校、大阪英語学校、大阪専門学校、大阪中学校、大学分校と、度重なる校名の改称が行われ、最終的に明治19年の「中学校令」によって第三高等中学校となったものである。

大学分校時代から校地が狭くなっていたために校地移転が希望されていたことと、当時の京都府知事北垣国道を先頭にした京都市民の熱心な運動により、明治19年11月、京都移転が決定されている。

1. 新校舎の建設地

敷地の候補は、いくつかあった。まず1つは葛野郡宇多野の谷口村を中心に、西は仁和寺、南は花園妙心寺、北は等持院にまたがる7万5,000坪の地、第2に愛宕郡紫竹大門村のうち、大徳寺の南から船岡山建勲神社の北にいたる地、そして第3に愛宕郡吉田村のうち、吉田神楽岡の西方、旧尾張藩屋敷

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

跡、である。

明治19(1886)年12月、文部大臣森有礼による敷地の検分が行われ、谷口村や大徳寺船岡山は水質に難点があるとし、一方、吉田村は、「水質良純なるうへ、東の方の吉田山を除く三方は皆田野にして、遙か西に賀茂川をひかえ、北に百万遍知恩寺ありて至極の清地」であると判断されたのであった。

明治20(1887)年4月に吉田村の尾張藩屋敷跡に正式決定されている。

第三高等中学校の敷地は、尾張藩屋敷跡の矩形の敷地で、4万9,570坪という広大な面積をもっていた。西側の敷地境界線の形は、第三高等中学校を経て、京都大学に受け継がれているといえよう。

明治20年6月には文部省の四等技師久留正道と三等技師山口半六が京都に出張し、7月にかけて敷地の測量調査を行っている。

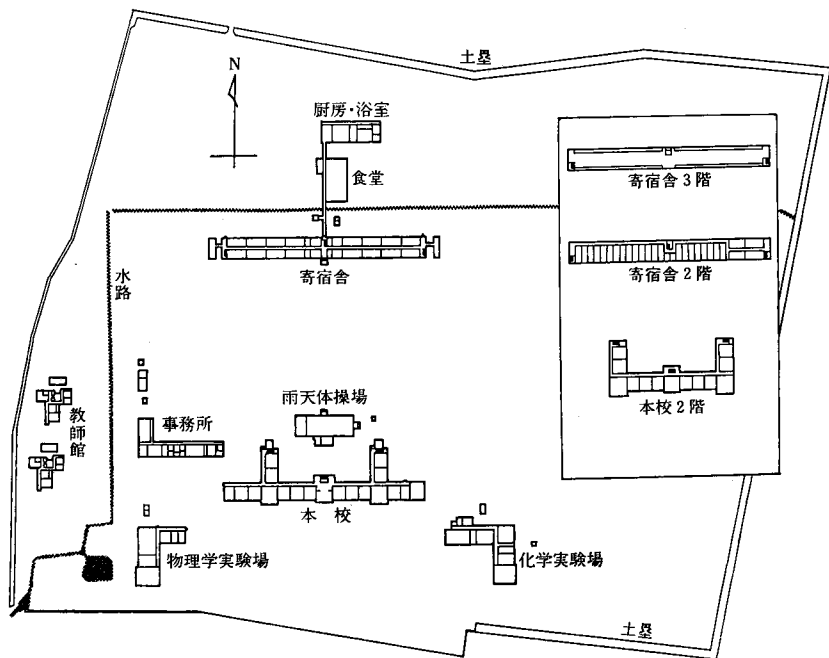


図1-8-4 第三高等中学校吉田学舎建物配置図

2. 新 校 舎

明治22(1889)年7月に本校、寄宿舍、食堂、厨房および浴室が竣工し、次いで8月に雨天体操場、事務所、教師館が、9月になって化学実験場、11月に物理学実験場が竣工している。新校舎のうち、煉瓦造りであったのは、本校と厨房および浴室、化学と物理学の実験場であり、残りはすべて木造であった。新校舎完成とほぼ同時期に苗木1万7,014本の植樹も終わっている。明治26(1893)年には敷地の南辺中央より少し西より、吉田神社参道に向かって正門が開けられた。

正門、本校、雨天体操場、寄宿舍が、南北軸上約4度西にずれた線の上にほぼ正確に並び、さらに水路を越えたところに食堂、賄所および浴室が配置されている。また、本校西側後方に事務室があり、さらにその西方、水路を越えたところに木造平家建ての教師館が2棟建っている。一方、本校の前面広場の東と西に、L字型の物理学実験場および化学実験場が相対し、南北軸構成と中心性を強調しながら、広場の広がり限定している。多くの建築が南面しており、正面性が強調されている。

第三高等学校は、広大な敷地に対して施設全体を南側に寄せて配置していた。これは設立当時から大学昇格を念頭において拡充用の土地を確保するためであったという。その結果、本校前面の広場は、本校自体の意匠も手伝って、中心性というよりは正面性の強いものとなっているように思われる。

本校は、現在の本部本館(時計台)の位置に南を正面として建設された。煉瓦造り2階建てのコの字型で、正面中央に玄関をつけ、両端において北方に折れる。両端部はさらに1階建ての煉瓦造りが東西に延びる。他の高等学校と比して規模も大きく、マンサード屋根を正面に戴くなど、意匠にも創意がみられる。

物理学実験場は、本学において現存する唯一の第三高等学校の遺構で、山口半六と久留正道が設計し、堅実な構成と意匠をみせている。本学の建築では最も古く、また焼失した本校と同一の意匠をもっているのも、第三高等

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年



写真 1-8-1 第三高等学校吉田学舎本校



写真 1-8-2 第三高等学校吉田学舎
化学実験場



写真 1-8-3 第三高等学校吉田学舎
物理学実験場

第2節 第三高等学校キャンパスの誕生



写真1-8-4 第三高等学校吉田学舎
教師館



写真1-8-5 第三高等学校吉田学舎
寄宿舍

中学校のイメージを伝える建築といってよい。本学の起源を示す建物として歴史的価値は高く、また文化史的、建築的価値もきわめて高い。

明治27(1894)年の高等学校令の発布とともに、第三高等学校には医学部、工学部、法学部が設置された。これは、他の高等学校と異なるところであり、大学昇格を見越した布石とされていた。明治28(1895)年、この三高拡充期に建設された、煉瓦造り平家建ての機械学実験場は、敷地の東側、中央あたりに建設されており、大学昇格後のゾーニングを予想させるものである。

表1-8-1 キャンパス建築変遷表 第Ⅰ期

建 築 名 称	設 計 者	年 代	時期	ブロック
旧第三高等学校 本校	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	101
旧第三高等学校 寄宿舍	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	102
旧第三高等学校 事務所	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	104
旧第三高等学校 物理学実験場(現存)	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	105
旧第三高等学校 化学実験場	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	106

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

旧第三高等学校 寄宿舎食堂	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	110
旧第三高等学校 賄所及び浴室	山口半六、久留正道	1889(明治22)	1	110
旧第三高等学校 正門(現存)	山口半六、久留正道	1893(明治26)	1	101
機械工学教室 機械学実験場		1895(明治28)	1	107

第2項 キャンパスを形成した人々(1)

文部省の営繕組織は、明治18(1885)年に工部省が廃止されるのにもない、営繕業務が各省庁へ移管されていったことから実質的な活動が始まったようである。文部省に所属した最初の建築技術者は、明治18年に入省した山口半六と考えられるが、明治16(1883)年には当時郵便汽船三菱会社に所属していた山口半六に東京師範学校の改築工事が設計委託されており、このことから文部省営繕組織の起源をこの時点に求めることもできよう。

山口半六は、安政5(1858)年松江に生まれた。フランス語を学んだうえで、明治4(1871)年に大学南校へ入学し、明治9(1876)年には文部省海外留学生としてフランスに留学し、パリのエコール・サントラル(工業中央専門学校)で3年間建築学を修学し、学位を得て、明治14(1881)年帰国し、民間の郵便汽船三菱会社に入っている。

明治19(1886)年、山口半六に次いで久留正道が、工部省技手、内務省技手を経て、文部属に転じた。久留は、安政2(1855)年に東京で生まれた。開成学校で英語を学んだ後、工部省鉾山寮で地質工学を学び、鉾山寮の一等技術見習となるが、明治7年職を辞して工学寮工学校(明治10年に工部大学校に改組)に入学、明治14年に造家学の課程を終えている。

明治20(1887)年、山口が三等技師、久留が四等技師に任じられ、文部省の技術官僚としての地位を確立した。

明治中期には第一から第五にいたる高等中学校が相次いで設立されたが、その設立の経緯は各校によって異なり、設立の順序も数字の順ではなく、一高、三高、五高、二高、四高の順で行われた。しかしその建設活動は文部省

の直轄工事として一貫したプロセスで行われている。

まず会計局長と山口半六、久留正道の間で企画を立案し、それに基づいて山口と久留が設計図面を作成し、学校側に照会した後、工事に着手し、現場には雇員を常駐させて、山口と久留が連絡を取りつつ管理に当たるというものである。すべてのプロセスに技術官僚としての山口と久留の手が実際に加わっている。

山口と久留の直接の設計監督によって建設された高等学校の教育施設は、近代日本の高等教育施設のモデルとして位置づけられている。5校の間にみられる差異は、理想的な高等教育施設が模索され、完成にいたる過程で生じたものであり、また平面構成に各校ごとの教育方針が反映されていると考えられている。

5校に共通する建物は、本校(本館)、物理学・化学実験場、寄宿舎であり、また建築配置の共通点として、正門の奥に左右対称形の本校を据え、正門と本校がつくる軸線を基本に左右対称に各建物を配する点がある。学校衛生の見地から、快適で合理的な施設構成を完成させること、そして経済的にきわめて厳しい制約のもとで、すぐれた意匠構成を完成させることが課題であった。こうして施設の配置構成は、中庭型から分棟型へ、さらに並行型へと移り変わり、また意匠構成は様式的モチーフを局所的に用いた、いわば一点豪華主義から、簡潔で率直、微妙な味わいのある完成度の高い意匠へと変遷しているといつてよい。

第3項 周辺地域の変貌

明治初期に刊行された地図は、明治9(1876)年刊「京都市分一覽之図」などの題が示すとおり、行政区画を示す図としての性格が強いが、当時の様子を知ることができる。幕末期に建てられた多くの藩邸、また公家邸、寺社境内が上地され、鴨東に多く建設されていた藩邸はことごとく姿を消し、白川道などの旧来の道が記入されているところもある。かわって近代施設が散見

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

され、荒神橋から丸太町橋にかけて「仮牧畜」、丸太町橋西詰めから南へ「女紅場」（女学校）、「舎密局」（第1章の舎密局とは別）などの勸業施設が注目される。

明治22(1889)年4月1日に京都市市制が施行され、吉田村は、聖護院村・岡崎村と合わせて、上京区第三十四番組に編成される。

当時の状況を示す地図として、明治22年9月、府議会に知事が諮問した「上京区元三十四組新市街経画及道幅予定案」に関する「道路之図」がある。これは、鴨川以東、百万遍以南、三条以北の吉田・岡崎地区に、市街化を予定して既設街路の拡幅や道路の新設を計画したものであり、幅員によって一等から三等まで格付けされた計画道路がこの地区を東西南北に区切っている。計画どおり実施されたのは、現在の東一条通り(二等道路)、近衛通り、春日通り(ともに三等道路)のようである。東大路通りや丸太町通りは計画されておらず、これらと異なる位置に別の道路が幹線道路として計画されていた。東一条通りに新しい橋が記入されており、図中に「高等中学校」と書き込まれた第三高等中学校と洛中を直接つなぐ計画であったようである。

明治22年の測図、明治25(1892)年発行の大日本帝国陸地測量部の地図には、明治22年7月竣工の本校、寄宿舍、食堂、厨房および浴室と、9月竣工の化学実験場が描かれている。このキャンパスの敷地の形態や四至は、現在の京都大学キャンパス本部地区と一致している。前掲「道路之図」と比較するかぎり、第三高等中学校敷地がもとの尾張藩屋敷に加え、東方へかなり拡大されたようにみえる。

第三高等中学校の北に位置する百万遍、東南の吉田村などのほか、周囲のほとんどが田畑であった。ゆるやかな曲折をもつ道と田園風景が卓越する中で、明確な南北方向軸をもった本校のブロックがひととき目立っている。

吉田村への第三高等中学校の移転、明治23(1890)年の川端荒神口における京都織物会社の開業、さらに疏水の開通、明治28(1895)年の平安神宮の創建と相まって、京都の北東地域は急速に発展することになり、地価の高騰を招くことになった。

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成

——第Ⅱ期・明治30(1897)年～大正7(1918)年

京都帝国大学が創立された明治30(1897)年から、大正7(1918)年末の大学令により新しい制度にかわるまでの期間を第Ⅱ期とする。この期間は、さらに2期に分けることもできる。

明治40(1907)年までの帝国大学キャンパス形成期には、明治30年第三高等中学校から引き継いだ本部地区に、新たな敷地として明治32(1899)年から明治33(1900)年に買収した医学部地区、明治31(1898)年に買収の病院東地区、第三高等中学校が移転した南部地区の南半分、さらに後に明治35(1902)年買収の病院地区(西)が加わる。開設された理工科大学・医科大学・法科大学・文科大学の施設が順次整備され、明治40年ころには一応の姿がつくられる。

その後の帝国大学キャンパス拡充期は、施設の整備拡充に向かって進む。敷地の増加以上に、建築面積の増加は著しく、平家が大部分を占めていたため、キャンパスは急速に平面的に広がっていった。

この時期の建築構造は、既存の煉瓦造り建築に対する増築や、耐火に配慮された建築にかぎって煉瓦造りであり、一般的には簡素な木造建築であった。おそらく増大する施設需要にとりあえず応えるために、後の建て替えを予定したフローとして建設されたのであろう。

また建築設計は、文部省技師真水英夫が最初の1年を担当し、その後は山本治兵衛がその責を担った。文部省の直轄工事として行われたが、明治40(1907)年に本学に建築部が設置されると、山本治兵衛がその初代の建築部長になり、その後の建築工事を担当した。

こうした工事担当の変化によって、建築意匠も次のような3類型があると

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

されている。

(1) 真水英夫担当——スタッコ仕上げの外壁とピクチャレスク系の様式的細部をもつ重厚な建築。工・機械工学教室本館、附属図書館閲覧室、附属医院本館など。

(2) 山本治兵衛担当——下見板張の外壁のピクチャレスク系の様式的細部をもつ簡素な建築。医・解剖学、病理学教室、第三高等学校本校。

(3) 建築部(山本治兵衛)——下見板張の外壁と古典系の様式的細部をもつ華麗な建築。医・法医学教室、附属医院眼科学教室。

第1項 新校舎の建築計画と新築工事

京都帝国大学の校舎などの施設は、三高が使用していた施設を譲り受けてはいたが、多くの建物を新築する必要があった。本部地区では、理工科大学や法科大学を中心に増築・改築が行われ、また医科大学では基礎医学系の教室と附属医院を新築している。

1. 京都帝国大学(本部地区)

〔本館ほか〕

明治30(1897)年の京都帝国大学創立とともに、三高の敷地と建物が本学に譲られ、本学の成長は、それらを核として始まった。三高の本校はそのまま京都帝国大学本館となり、当初は理工科大学、法科大学の教室、事務室などに用いられた。

正門前の広場の景観も、三高および本学の創立期につくられた。明治27(1894)年の三高解散事件の記念碑と記念樹などがある。

本学設立の明治30年は、施設譲渡の過程と平行しているため、変則的な建物の使われ方がされていたらしい。三高の二本松新校舎がほぼ完成した明治30年8月には、本館の西半部および事務所を譲り受け、本学事務所を西階下に移し、階上の諸室を教室に割り当てた。

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成

三高より引き継がれた旧三高事務所は、本学創立後も同様に用いられたが、組織の拡大にともなって、大正3(1914)年に改築される。従来の南正面を改めて東正面とし、東側に通路が設けられた。この事務室は、外壁スタッコ仕上げの木造建築で、簡略化されたブローケンペディメントなどをもつ正面入口回りなどに本格的様式建築への志向がみえる。ストック形成期の到来を示している。永瀬狂三の作品である。

学生寄宿舎は、「学生研学修養上の重要な機関」として、創立と同時に設置されたが、開学当初は、三高寄宿舎がまだ譲渡されていなかったのもので、旧事務所へ臨時寝台などを借り入れて利用した。第三高等中学校寄宿舎、すなわち木造3階建ての本館と食堂、賄所が本学へ引き継がれ、明治34(1901)年には、木造1棟に定員90名(原則として1室4名)を収容している。大正2(1913)年に南部地区の南に新築移転するまで、そのまま寄宿舎として用いられた。

本部地区の西半部には第三高等学校の教師館が数棟存在し、本学創立後も三高の官舎として用いられた。

〔附属図書館〕

本学創立と同時に設置された附属図書館は、理工科大学教室の一部に設けられた仮図書館として出発した。明治31(1898)年7月に2階建ての書庫が完成し、次いで翌年には閲覧室および事務室が竣工して、同12月に閲覧が開始された。

閲覧室は木造平家建てで、スタッコ仕上げの外壁をもち、アーチなどを用いた窓回りの扱いなどに、重厚な印象がある。さらに蔵書の増加にともなって、明治37(1904)年に煉瓦造り3階建ての書庫が増設された。閲覧室および事務室、書庫は文部技師真水英夫の設計と考えられる。

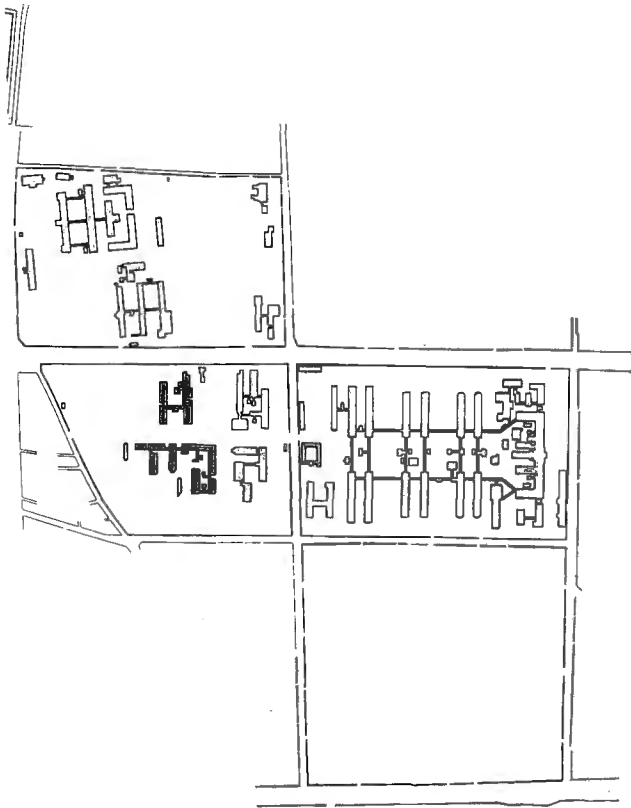
その後も附属図書館の拡充は続き、大正7(1918)年に事務室が、大正14(1925)年に貴重書庫が竣工している。北側に増設された書庫は、山本治兵衛の設計で、四隅におかれた巨大なオーダーが特徴的である。

〔尊攘堂〕



図1-8-5 明治41(1908)年の京都帝国大学

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成



および第三高等学校キャンパス

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

吉田松陰は、尊王攘夷の理念を掲げて、京都に学習院とともに尊攘堂の設置を考えていたという。この松陰の遺志を引き継いだ子爵品川弥二郎は、明治20(1887)年3月、高倉通錦小路の自邸内に、維新において尊攘の功があった人々を記念した尊攘堂を建てた。品川の死後、松陰の宿志も汲んで、所蔵品のすべてが本学に寄贈され、かつ建物も学内に新築、寄付され、明治36(1903)年に落成した。尊攘堂の蔵品は品川子爵の収蔵によるものが多いが、その趣旨を伝え聞いた四方の有志の寄贈によるものも少なくない。明治37(1904)年尊攘堂は、事務室の北側に移築された(後に西へと移築される)。

煉瓦造り平家建て、寄棟屋根で、厚い壁とペディメント付きの縦長の開口部が重厚な印象を与える。

〔理工科大学の建築〕

明治30(1897)年6月に公布された京都帝国大学官制により、最初に理工科大学が設立され、数学・物理学・化学・土木工学・機械工学・電気工学・採鉱学・冶金学の講座が定められた。そして同9月、土木工学科・機械工学科が設置され、翌明治31(1898)年、電気工学、採鉱冶金学、製造化学の各学科が設置される。

本館前広場の東西に相對していた物理学実験場と化学実験場が、ともに増築される。前者は少し東側に張り出しつつL字型に増築されて、物理学科と数学科教室に、後者は西端を北に増築し、採鉱冶金学科教室に使用される。物理学実験場を囲むように配置された増築平家部の意匠は、第Ⅰ期を踏襲した簡潔なものとなっている。以上の煉瓦造り建築の東側立面は、東方の採鉱冶金学教室の西側立面と対称の構成を示している。

本部地区東方においては、明治31年に純正化学科・製造化学科教室と土木工学科・機械工学科教室が、また明治33(1900)年から明治35(1902)年にかけて電気工学科教室の建物が新築された。これらの建築群は、E字型やロの字型といった、独立性が高い平面形式を採用している。三高の建物が東西に長い平面形式であったのとは異なり、中庭をもつのが大きな特色となっている。

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成

土木工学科・機械工学科教室本館は、当初は西半部を機械工学教室、東半部を土木工学教室が用いた。木造平家建て、外壁が瓦下地スタッコ仕上げであるが、下見板張を用いず、石造を模したスタッコの表現は重厚である。南ファサードは、アーチを組み込んだ正面、スティックワークの切妻面をもっていた。

純正化学科・製造化学科教室は、第三高等学校化学教室の計画建物を引き継いだもので、木造平家建て、外壁スタッコ仕上げ、正面部の詳細は不明だが、機械工学教室本館と同様の外観をもっていたらしい。

電気工学科教室は、この時期に新築された唯一の煉瓦造り本館であり、キーストーンをのせた簡素なセグメンタルアーチの窓となっている。

〔法科大学・文科大学の建築〕

明治32(1899)年開設の法科大学は、当初は専用の建物はなかったが、本館教室の北側に、木造1階建て、L字型の講義室2棟を東西に対称に建て、本館教室の南北方向に張り出した部分から渡り廊下でつないでいる。

明治39(1906)年開設の文科大学には、専用の建物がなく、理工科大学の一部を借用していた。明治40(1907)年、法科大学教室の北側に、法科および文科大学事務室および研究室として木造2階建ての建物が新設された。

この木造建築群はいずれも下見板張の簡素な外壁であり、フロー的な位置づけであったらしい。

2. 医科大学(医学部地区)

医科大学および附属医院は、京都・大阪のいずれにおくかで議論が分かれたが、最終的に誘致に懸命であった京都に設置することとなった。文部省は、府立医学校の教室・病舎を譲り受け、多少の増改築を加えればよいと考えていたが、府立医学校長猪子止戈之助の奔走によって、新たな土地を買収し、全設備を新設する案となった。

明治32(1899)年に医科大学が開設され、解剖学・生理学・医化学・病理学・病理解剖学・薬物学・内科学・婦人科学産科学・小児科学・外科学・眼科

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

学・皮膚病学・微生物学・精神病学・衛生学・法医学・整形外科学など、基礎医学系各教室の多くの建物が建設された。

明治34(1901)年の東南端の解剖学教室の竣工に始まり、翌明治35(1902)年に西南端の生理学・衛生学教室とその北の薬物学教室・医化学教室、明治36(1903)年の病理学教室へと、北方へ順次各教室が建設され、明治43(1910)年に法医学教室が竣工して、その全容が整った。

敷地の南側中央、近衛通りに面して正門を開き、敷地中央を南北に貫通する幅員約7mの道路を設け、その東西に各教室を配置している。敷地北側に門が開けられたのは明治36年である。

敷地の西半部には、南から微生物学・生理学・衛生学、医化学、薬物学、一方、敷地の東半部には、南から解剖学、病理学および病理解剖学、法医学の教室が、それぞれ50～70mのブロックを形づくりながら並ぶ。ドイツの大学に範をとったとされるこれらの教室は、それぞれ研究室や標本室をもつ2階建ての本館と講堂、実習室を配置し、廊下で接続するのが特色である。

建築構造は、当初の計画通り煉瓦造りで建てられたのは生理学・衛生学教室本館だけであり、本館の標本室部分のみを耐火煉瓦造り、あるいは防火的な木骨煉瓦造りとするほかは、すべて木造である。しかし構造は堅牢であり、簡素ながらも様式的装飾が要所に施され、建築的質は高い。

3. 医科大学附属医院(病院東・西地区)

明治32(1899)年の医科大学開設と同時に附属医院が設置され、同年に病院東地区に医院本館が竣工している。その後継続して病舎などが建設され、明治40(1907)年になって病院東地区の全容が整った。

医院の配置計画は、敷地の南側中央、春日通りに面して門を開け、南端に2階建ての医院本館を南面して建て、その北側に独立した平家建ての16棟の病舎を南北軸に対称な位置に並べ、渡り廊下でつなぐ形であり、こうした配置計画は「パビリオン(Pavilion)式」と呼ばれた。この配置方式は、明治26(1893)年から明治29(1896)年に建設された東大病院においても用いられてい

だが、医科大学設計委員であった久留正道は、かつてこの東大病院の新築計画にも関与していた。

病室は、北廊下で東から保養室、重病室の個室、長方形の大病室2つ、物置、看護婦室、配膳室、医員および研究室となっており、内部空間も南北軸に対称に計画された。東西の病舎をつなぐ渡り廊下の中心に便所と浴室がつくられている。本館の両脇に、外科、内科、眼科、婦人科産科の教室研究室が設けられている。敷地北側に沿って東側に看護婦寄宿舎が建てられた。

医院本館は、煉瓦造りから木造に計画変更されているが、スタッコ仕上げの外壁を用いて、重厚な意匠をみせていた。正面玄関上部は、土木工学・機械工学教室本館と同様の意匠であって、半円形を切り取った切妻面を突出させ、スティックワークで飾っていた。なお、他の教室については不詳である。

この医院本館を中核として、内科・外科・小児科・眼科・婦人科産科・皮膚科・耳鼻咽喉科・精神科・整形外科などの診療と研究が実施されていた。明治末から大正初めにかけて眼科・小児科・皮膚科の教室が病院西地区に新築移転し、他の教室は、第Ⅲ期以降に現在の場所に新築移転する。

4. 第三高等学校二本松学舎(南部地区、旧教養部地区)

明治30(1897)年、第三高等学校は京都帝国大学にその吉田学舎を譲り、南隣の二本松と呼ばれる敷地(現：総合人間学部、旧教養部地区)に校舎を新築し、移転した。東一条通りに北面して正門があり、その正面に北を向いて本校が、その南に事務室が建ち、ともに東西に長いプランをもっている。正門の傍には門番所、その西に銃器室、東北隅に生徒控所が配置された。

翌明治31(1898)年には、事務室の南にT字型プランの博物室および画室、さらにその南にはL字型プランの物理学実験室、化学実験室が東西に相対して並ぶ。西南部には寄宿舎、同食堂、賄所、浴室、そして図書閲覧所と文庫が建設された。

建築配置は、吉田学舎の配置方式を踏襲しており、やや西に振った南北軸

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

線上に、本校と事務所、博物室および画学室、物理学実験室と化学実験室を左右対称に配置している。

本校以下の学舎は、煉瓦造りの文庫を除いてほとんどすべてが木造であった。外観は簡素であり、下見板張の外壁が多く、また装飾もわずかであった。本校は2階建てで、官立学校の標準的なスタイルを示している。博物室および画学室、物理学実験室、化学実験室は、いずれも階段教室をもっていた。

洋風の正門は、大扉の上棧をアーチ上にデザインし、また門番所は、八角屋根のようにみえる受付部と切妻屋根の居室部の取り合わせがおもしろい(ともに現存しており、京都大学歴史的建造物である)。

明治34(1901)年、事務室を銃器室跡地に移築し、そこに画学教室を建設することになり、明治35(1902)年に東半分、その後明治40(1907)年、明治43(1910)年の増築工事によって西半分が竣工した。木造2階建て一部平家建て、下見板張の外壁で、2階に実習用の大教室を配していた。

第三高等学校敷地の南半部は、当初は、明治32(1899)年開設の医科大学基礎医学系各教室の仮教室に当てられ、簡素な木造の仮校舎が設けられていた。また東部には文部省建築掛京都出張所(明治40年に京都帝国大学建築部となる)があった。

医科大学法医学教室が竣工した明治43年以降、仮教室を取り壊して、そこに学生のための厚生諸施設を建てた。明治44(1911)年に学生集会所(木造2階建て)、翌大正元(1912)年に道場(木造平家)が建ち、翌大正2(1913)年には本部地区から移った寄宿舎(木造2階建て)3棟が竣工している。

表1-8-2 キャンパス建築変遷表 第Ⅱ期一前半

建 築 名 称	設 計 者	年 代	ブロック
旧第三高等学校 正門及び門番所	真水英夫(推定)	1897(明治30)	501
旧第三高等学校 本校	真水英夫(推定)	1897(明治30)	501
旧第三高等学校 銃器室	真水英夫(推定)	1897(明治30)	501
旧第三高等学校 生徒控所	真水英夫(推定)	1897(明治30)	501
旧第三高等学校 事務所	真水英夫(推定)	1897(明治30)	501

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成

附属図書館 書庫	真水英夫(推定)	1898(明治31)	103
旧物理学及び数学教室	山本治兵衛	1898(明治31)	105
機械工学教室及び土木工学教室 旧本館	真水英夫	1898(明治31)	107
機械工学教室 旧製図室	真水英夫(推定)	1898(明治31)	107
純正化学製造化学教室 本館	真水英夫(推定)	1898(明治31)	108
旧第三高等中学校 博物室及び画学室	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 物理学実験室	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 化学実験室	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 寄宿舎	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 寄宿舎食堂	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 賄所及び浴室	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 文庫	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
旧第三高等中学校 図書閲覧所	真水英夫(推定)	1898(明治31)	501
附属図書館 閲覧室及び事務室	真水英夫(推定)	1899(明治32)	103
採鉱冶金学教室 増築	山本治兵衛(推定)	1899(明治32)	106
機械工学教室 機械工場 増築	山本治兵衛	1899(明治32)	107
機械工学教室 旧工作加工実験室	山本治兵衛	1899(明治32)	107
附属医院 旧本館	真水英夫、山本治兵衛	1899(明治32)	301
眼科学教室	真水英夫、山本治兵衛(推定)	1899(明治32)	301
婦人科学産科学教室	真水英夫、山本治兵衛(推定)	1899(明治32)	301
附属医院 第1病舎	真水英夫、山本治兵衛	1899(明治32)	302
附属医院 第2病舎	真水英夫、山本治兵衛	1899(明治32)	303
看護婦寄宿舎		1899(明治32)	304
電気工学教室 本館	山本治兵衛	1900(明治33)	109
解剖学教室 本館	山本治兵衛	1901(明治34)	201
解剖学教室 実験室	山本治兵衛	1901(明治34)	201
外科学教室 研究室	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	301
附属医院 第3病舎	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	302
附属医院 第5病舎	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	302
附属医院 第7病院	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	302
附属医院 第4病舎	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	303
附属医院 第6病舎	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	303
伝染病疑似患者観察室	山本治兵衛(推定)	1901(明治34)	305
法科大学 講義室	山本治兵衛	1902(明治35)	102
法科大学 講義室 〈別棟〉	山本治兵衛	1902(明治35)	102
土木工学教室 製図室	山本治兵衛(推定)	1902(明治35)	107
電気工学教室 本館 増築	山本治兵衛	1902(明治35)	109

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

土木工学教室 製図室	山本治兵衛(推定)	1902(明治35)	111
解剖学教室 講堂	山本治兵衛	1902(明治35)	201
生理学教室及び衛生学教室 本館	山本治兵衛	1902(明治35)	202
生理学教室及び衛生学教室 講堂	山本治兵衛	1902(明治35)	202
生理学教室 実習室	山本治兵衛	1902(明治35)	202
旧医化学教室 研究室	山本治兵衛	1902(明治35)	203
薬物学教室 本館	山本治兵衛(推定)	1902(明治35)	203
薬物学教室 講堂	山本治兵衛(推定)	1902(明治35)	203
附属医院 第8病舎	山本治兵衛(推定)	1902(明治35)	303
旧第三高等学校 画学教室	山本治兵衛(推定)	1902(明治35)	501
尊攘堂		1903(明治36)	104
医化学教室 本館	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	203
医化学教室 実習室	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	203
医化学教室 動物小屋	山本治兵衛	1903(明治36)	203
薬物学教室 動物小屋	山本治兵衛	1903(明治36)	203
病理学教室 旧本館	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	204
病理学教室 講堂	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	204
病理学教室 実習室	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	204
病理学教室 動物小屋	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	204
附属医院 第9病舎	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	304
附属医院 旧第10病舎	山本治兵衛(推定)	1903(明治36)	305
附属図書館 書庫	山本治兵衛	1904(明治37)	103
内科及び小児科研究室及び大講義室	山本治兵衛(推定)	1904(明治37)	301
附属医院 旧婦人科分娩室	山本治兵衛(推定)	1904(明治37)	304
附属医院 第12病舎	山本治兵衛(推定)	1904(明治37)	305
衛生学教室 実習室	山本治兵衛	1905(明治38)	202
伝染病疑似患者観察室増築	山本治兵衛(推定)	1906(明治39)	305
法科及び文科大学 事務室及び研究室	山本治兵衛	1907(明治40)	102
機械工学教室 製図室 増築	山本治兵衛(推定)	1907(明治40)	107
外科学教室 手術室及び講義室	山本治兵衛(推定)	1907(明治40)	301
附属医院 旧第11病舎	山本治兵衛(推定)	1907(明治40)	304
看護婦寄宿舍	山本治兵衛(推定)	1907(明治40)	305

第2項 キャンパスの拡充

新たな敷地としては、明治40(1907)年に病院西地区、明治44(1911)年から明治45(1912)年にかけて医学部地区が買収、追加され、大正6(1917)年に北部地区の理学部用地が加わり、敷地面積は増加したが、施設の建設が行われるのは次の第Ⅲ期になる。

明治40(1907)年以降、京都帝国大学キャンパス、特に本部地区では施設の拡充が進んだ。建築の増加は、本部地区が多くを占め、ほかでは病院西地区や南部地区において認められる。本部地区の新築・改築・増築は、おおむね煉瓦造りによるものであった。これまでキャンパスにみられた空地は、この時期にほとんど埋め尽くされてしまう。

本部地区においては、本館の北側が法科大学および文科大学用地として、敷地の東側一帯と西南隅が理工科大学用地として、本館の西北側が事務所や図書館などの用地として、敷地北側は学生施設の用地としてゾーニングされていた。大正3(1914)年に理工科大学が工科大学と理科大学に分離され、次いで大正5(1916)年に寄宿舎が南部地区に移転、新築したのにもなって、本部地区の北端は理科大学と工科大学の用地となった。新たな制度のもとで施設の再配置が行われ、大正3年に理科大学の化学教室、工科大学の工業化学教室、大正6(1917)年に土木工学教室が新用地に移転し、そこで施設を新築した。

このようなキャンパス空間の再編成は、本部地区の道路網にも大きな影響を与えることになった。本部地区西方では、明治32(1899)年の図書館によって、事務室から北門にいたる南北の通路が整備されていた。この道路は、さらに大正3年に図書館の北に文科大学陳列館を新築したこと、大正5年に事務室を東正面へ改築したことなどによって、数学・物理学教室の東側、本館前面広場の西辺から事務室、図書館、陳列館を経て北門にいたる南北の中軸道路として重要性をより高めた。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

また本部地区東方では、土木工学・機械工学教室、純正化学・製造化学教室、電気工学教室が、それぞれ独立性の高い平面型式で南から北に配置されており、土木工学・機械工学教室の西側(採鉱冶金学教室東側)から北方へ通る南北の道路が整備されていた。そこに大正6(1917)年、この通路のアイ・ストップの位置に土木工学教室が新築されたので、この道は、本部地区の軸として明確な位置付けを獲得した。

本部地区の東と西と北におけるこのような施設の変化、特に土木工学教室、化学教室の新築により、それらの正面を東西に走る道路が整備された。東門は、もともと明治43(1910)年に敷地東辺の水路の南側に設けられたのであるが、大正6年にこの東西通路の出入口として現在地へ移動した。

この時期に行われた増改築や新築は、道路に面した部分に重点を置いて実施されている。これまでの南北中心軸とその正面という空間構成ではなく、通路からみた建築のファサードの意匠を大切にし、一方それらの建築により囲われた中庭の形成を意図した、ブロック建築型の空間構成とみることができる。

さて、この時期、キャンパスの建築は、平面的には拡大しながら、ストックとしての充実化が進行した。すなわち大規模な煉瓦造り建築を大量に、しかも段階を追って建設した。意匠的にも、前期の簡素で定型的な様式建築から、本格的な様式建築への志向があらわれ、石造を模したモルタル被覆の外壁や古典様式の多彩な装飾をもつ建築がつくられる。文科大学の陳列館や、理科大学化学教室本館、法科大学の研究室などが代表的である。木造建築も、簡素な下見板張ではなく、スタッコ仕上げの重厚な外壁と、多彩な装飾をもつ。

この時期の建築設計は、明治40(1907)年にできた京都帝国大学建築部の初代部長山本治兵衛と、明治42(1909)年から建築部に勤務する技師永瀬狂三である。大正8(1919)年に山本治兵衛が死去すると、永瀬狂三がその跡を継いで建築部長になっているので、この時期の設計は、実質的には永瀬狂三によるものであろう。

1. 本部地区

〔本部施設〕

大正元(1912)年、本館が火災のため焼失した。その後、大正14(1925)年に本館が新築されるまで、14年間は京都帝国大学の中心施設であるべき本館は存在しなかった。

大正3(1914)年、本部事務室は組織の拡大にともなって改築され、従来の南正面を改めて東正面とした。このため東側に設けられた通路が、正面の広場から本部地区北西の門まで開通した。

大正2(1913)年、学生寄宿舎が第三高等学校南部の敷地に移転した。

〔理科大学・工科大学〕

大正3年、理工科大学が理科大学と工科大学に分離される。この時期には学科の新設はないが、講座が拡大、整備されるとともに、建物施設の充実が図られる。

理工科大学純正化学教室および製造化学教室は、明治の末ころ本館の教室を使用していたが、前述のように本館が焼失したため元の建物にもどった。大正3年の理工科大学の分離にともなって、理科大学化学教室と工科大学工業化学教室に分かれ、同時に移転、新築することになる。本部地区の南北中心軸上、北端の敷地に、化学教室と工業化学教室それぞれの本館、すなわち煉瓦造り2階建ての長大な建物を、南と北に並列して建てた。この時に、第三高等中学校の寄宿舎の浴室および賄所であった煉瓦造り1階建ての建物を分析実験室として使うことになった。

化学教室本館は、煉瓦造りの柔らかく華麗な意匠をもつ典型的作品である。工業化学教室本館も、ほぼ同様の立面構成をとるが、西側に入口を開くなどやや異なるところがあった。

明治31(1898)年に新築された土木工学・機械工学教室本館の東半部を占めていた土木工学教室は、大正6(1917)年に化学教室の東側に移転して新築した。また製図室も同年に移築して、土木工学教室製図室とした。大正3



図1-8-6 理学部化学教室本館設計図

(1914)年の工業化学および化学教室の移転に次いで行われた、本部地区の拡充を示すものである。現存する土木工学教室本館は、この時期を代表する建築であり、その正面は南北の通りのアイ・ストップとなっていて、本部地区の景観構成の上でも重要である。正面には、白い花崗岩の装飾が壁面に施され、第Ⅱ期と比べ窓面が大きい。

土木工学教室本館と、その西方の化学・工業化学教室本館を中心とする統一的な建築群は、本部地区の北側に独特の雰囲気醸し出しており、戦前の京都帝国大学キャンパスを代表する景観を形成していたにちがいない。

〔法科大学〕

第三高等学校の寄宿舎が移転した後、大正5(1916)年に法科大学研究室が竣工している。既設の法科および文科大学事務室や文科大学心理学教室、文科大学研究室は、いずれも東西方向に伸びる細長い棟を並列配置するものであったが、今回は中庭を囲い込む口の字型の建築配置を意図して計画されており、ひとまずその北と西の棟が完成している。残る東と南の棟が増築されるのは、大正13(1924)年のことである。

〔文科大学〕

文科大学の施設が一応整備されたのは、ようやく明治42(1909)年のことであった。創設当時から陳列館を附置する構想があり、歴史学・考古学・地理学・古美術関係資料の蒐集を続けていたが、大正3年に陳列館の新築が始まり、正面部(南面)が竣工している。その後、大正12(1923)年、大正14(1925)年、昭和4(1929)年と増築が行われ、中庭型の建物が完成した。

陳列館は、正面入口の楕形ペディメント、外壁のモルタル目地切仕上げのブーソールなど重厚な雰囲気をもち、またブローケンペディメントや楕円

形の窓などは、ネオ・バロック的なデザインとなっている。本学における正統の様式建築の代表的作品といえよう。

2. 医科大学および附属医院

明治43(1910)年に法医学教室が医科大学敷地東北の隅に移転、新築している。法医学教室も、本館のみが煉瓦造りであり、実習室や大正3(1914)年の講堂などは木造であった。また大正5(1916)年には微生物学教室が衛生学教室より分離して、木造建物を新築した。大正前半期の医科大学敷地における変化はわずかである。

病院西地区への拡張、移転が始まったのは、明治43年竣工の眼科学教室からであり、次いで明治44(1911)年に小児科学教室、明治45(1912)年に精神病学教室、やや遅れて大正3年に皮膚病学徴毒学教室が建設され、全体が整った。西地区では、精神病学教室が西に正面入口を設けているが、他の3教室の本館は春日通りに南面し、その背後に病舎を配するという方式を採ってい

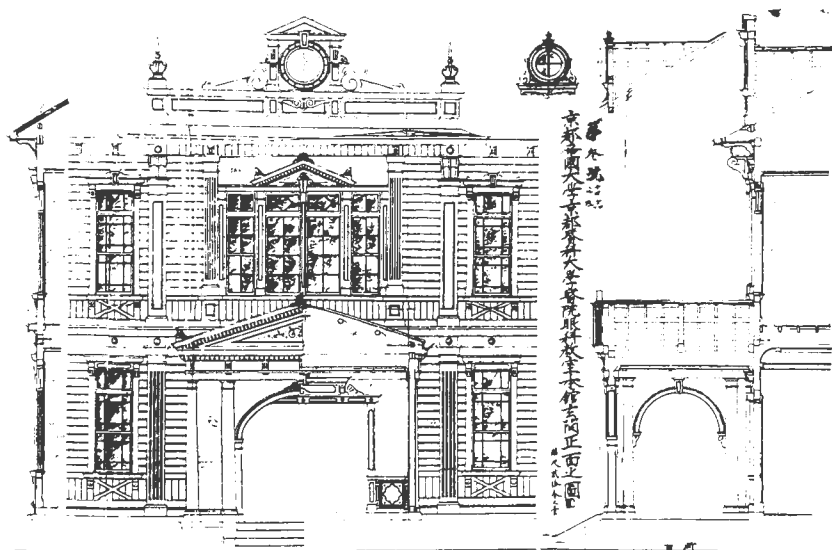


図1-8-7 眼科学教室本館設計図

る。

眼科学教室本館は、本学における正統的な古典系木造様式建築の最初の作品、かつ代表作であった。ペディメントを戴き、オーダーをもつカップルド・コラムによって支えられた正面ポーチ、またピラスターを随所に配した外壁など、華麗かつ端正な姿をもっている。

小児科学教室本館は、下見板張の外壁、アーチを飾った軒回りなど、より軽快な意匠となっている。

3. 第三高等学校二本松学舎

この時期に本校前の広場に、尚賢館と新徳館が建てられている。大正7(1918)年に迎える三高創立50周年の記念行事の企画によるもので、両建築の名称は、『易大蓄』にみえる「日新其徳剛上而尚賢」に由来しているという。

大正5(1916)年3月、前年の即位御大典に用いられた臨時造営物のうち、第二朝集所御車寄せおよび二条離宮内饗宴場附属調理所が三高に下賜されることになり、大正7年3月、朝集所の移築が完了し、尚賢館と命名された。木造平家建てで、和風の外観で統一し、入母屋造り銅板葺の屋根、正面に切妻屋根を出して車寄せとしている。

一方、記念講堂は、当時京都高等工芸学校教授であった武田五一が設計・工事監督を担当し、工科大学機械工学科教授の大塚要が工事契約担当を務めた。新講堂は大正7年4月に竣工し、新徳館と名づけられた。

2階建ての新徳館は、1階を鉄筋コンクリート壁構造、2階は木造という過渡的、変則的な構造を採用している。2階のデザインは、柱型を張りつけてハーフティンバー様式にまとめ、切妻造りの屋根の棟中央に塔屋を設けている。2階床を支える鉄柱の上部にはアール・ヌーボー風の装飾をつけている。設計者の武田五一は、西洋の新しい建築運動であるアール・ヌーボー、ゼツェションなどを最初に日本に導入した先駆者であるが、当建築は、構造とデザインの双方において彼の才能を駆使した佳作であり、また鉄筋コンクリート構造を本学に本格的に導入した実験建築として記憶にとどめておきた

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成

い。

表1-8-3 キャンパス建築変遷表 第II期—後半

建 築 名 称	設 計 者	年 代	ブロック
文科大学 心理学教室	山本治兵衛	1908(明治41)	102
機械工学教室 鋳工場	山本治兵衛	1908(明治41)	107
医学部表門門衛所	山本治兵衛(推定)	1908(明治41)	202
整形外科科学教室	山本治兵衛(推定)	1908(明治41)	301
文科大学 研究室	山本治兵衛	1909(明治42)	102
旧物理学教室 増築	山本治兵衛	1909(明治42)	105
機械工学教室 鍛工場	山本治兵衛	1910(明治43)	107
法医学教室 本館	山本治兵衛	1910(明治43)	205
法医学教室 実験室	山本治兵衛	1910(明治43)	205
眼科学教室 本館	山本治兵衛	1910(明治43)	306
眼科学教室 講堂及び手術室	山本治兵衛	1910(明治43)	306
眼科学教室 病舎2棟	山本治兵衛	1910(明治43)	306
附属医院 汽罐室		1910(明治43)	306
旧小児科学教室 本館	山本治兵衛、永瀬狂三	1911(明治44)	307
旧小児科学教室 病舎5棟	山本治兵衛、永瀬狂三	1911(明治44)	307
学生集会所	山本治兵衛、永瀬狂三	1911(明治44)	502
採鉱冶金学教室 増築	山本治兵衛、永瀬狂三	1912(明治45)	106
精神病学教室 本館	山本治兵衛、永瀬狂三	1912(明治45)	308
精神病学教室 講堂	山本治兵衛、永瀬狂三	1912(明治45)	308
旧武道場	山本治兵衛、永瀬狂三	1912(大正元)	502
精神病学教室 保養室	山本治兵衛、永瀬狂三	1913(大正2)	308
精神病学教室 男病舎	山本治兵衛、永瀬狂三	1913(大正2)	308
精神病学教室 女病舎	山本治兵衛、永瀬狂三	1913(大正2)	308
学生寄宿舍食堂及び賄所	山本治兵衛、永瀬狂三	1913(大正2)	502
学生寄宿舍	山本治兵衛、永瀬狂三	1913(大正2)	502
文科大学 陳列館	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	103
本部事務室	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	104
旧物理学教室 増築	山本治兵衛	1914(大正3)	105
電気工学教室 本館 増築	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	109
理学部化学教室 本館	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	110
工学部工業化学教室 本館	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	110
工学部工業化学教室 分析実験室	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	110
旧生理学教室 研究室	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	202

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

生理学教室 動物小屋	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	202
法医学教室 実験室	山本治兵衛	1914(大正3)	205
法医学教室 講堂	山本治兵衛	1914(大正3)	205
皮膚病学微生物学教室 病舎2棟	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	309
皮膚病学微生物学教室 本館	山本治兵衛、永瀬狂三	1914(大正3)	309
法科大学 研究室	山本治兵衛、永瀬狂三	1916(大正5)	102
旧物理学教室 輻射学及び放射学研究室	山本治兵衛、永瀬狂三	1916(大正5)	105
旧工学部中央実験所	山本治兵衛、永瀬狂三(推定)	1916(大正5)	108
工学部工業化学教室 製図室	山本治兵衛、永瀬狂三	1916(大正5)	110
附属医院 賄所及び洗濯場		1916(大正5)	306
旧小児科学教室 外来伝染病舎	山本治兵衛、永瀬狂三	1916(大正5)	307
採鉱冶金学教室 増築	山本治兵衛、永瀬狂三	1917(大正6)	106
土木工学教室 本館	山本治兵衛、永瀬狂三	1917(大正6)	111
旧生理学教室 物置	山本治兵衛、永瀬狂三	1917(大正6)	202
旧附属図書館 事務室	山本治兵衛、永瀬狂三	1918(大正7)	103
旧小児科学教室 化学細菌室	永瀬狂三	1918(大正7)	307
旧第三高等学校 尚賢館	御大典用第二朝集所移築	1918(大正7)	501
旧第三高等学校 新徳館	武田五一	1918(大正7)	501

第3項 キャンパスを形成した人々(2)

明治33(1900)年に文部省京都出張所が設置され、明治40(1907)年5月23日に京都帝国大学に建築部が設置される。

1. 真水英夫

真水英夫は、慶応2(1866)年東京に生まれた。明治25(1892)年に東京帝国大学工科大学造家学科を卒業して、文部省に入り、先輩の久留正道のもとで勤務した。明治29(1896)年から明治31(1898)年にかけて京都帝国大学と第三高等学校の建築を担当し、土木工学・機械工学教室本館などの作品がある。しかし明治31年に突然外国出張をすることになって、本学関係の仕事は終わった。

2. 山本治兵衛

山本治兵衛は、安政元(1854)年武蔵国に生まれる。工部省の建築技術者、立川知方に師事して「和洋造家学および製図法」を学び、明治11(1878)年に東京府庁土木課に入り、明治18(1885)年に工部省鉄道局に移って河川開鑿や鉄道建築工事に従事した後、明治20(1887)年に文部省雇となり、第三高等中学校の創設工事の後半を現場の責任者として担当する。現存する第三高等中学校物理学実験場は、山口半六と久留正道の設計・監督のもと、山本治兵衛が現場工事を担当しているほか、図書館や理科大学博物教場などの工事にも当たっている。

その後、明治31年に真水英夫に替わって京都帝国大学に出張し、電気工学教室などの設計に携わる。明治33年に文部省京都出張所長となった。明治38(1905)年から福岡に出張するが、明治39(1906)年には京都に戻り、明治40年に京都帝国大学に設置された建築部の初代建築部長に就任し、大正8(1919)年、在任中に死去した。京都帝国大学キャンパスの創設と充実に尽力し、20年以上の間キャンパス計画、建築設計に従事し、現在の京都大学キャンパスの基礎をつくった人物として非常に重要である。文部省技師として生涯のほとんどを学校および病院の建築に携わった。

3. 永瀬 狂三

明治23(1890)年に生まれる。明治39(1906)年東京帝国大学建築学科を卒業し、民間の辰野・片岡設計事務所などで働いた後、明治42(1909)年から京都帝国大学建築部に勤務し、大正8年死去した山本治兵衛の跡を継いで、建築部長となる。その後、組織の変更により、同年12月建築課長、翌大正9(1920)年1月営繕課長となり、昭和4(1929)年までその職を全うした。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

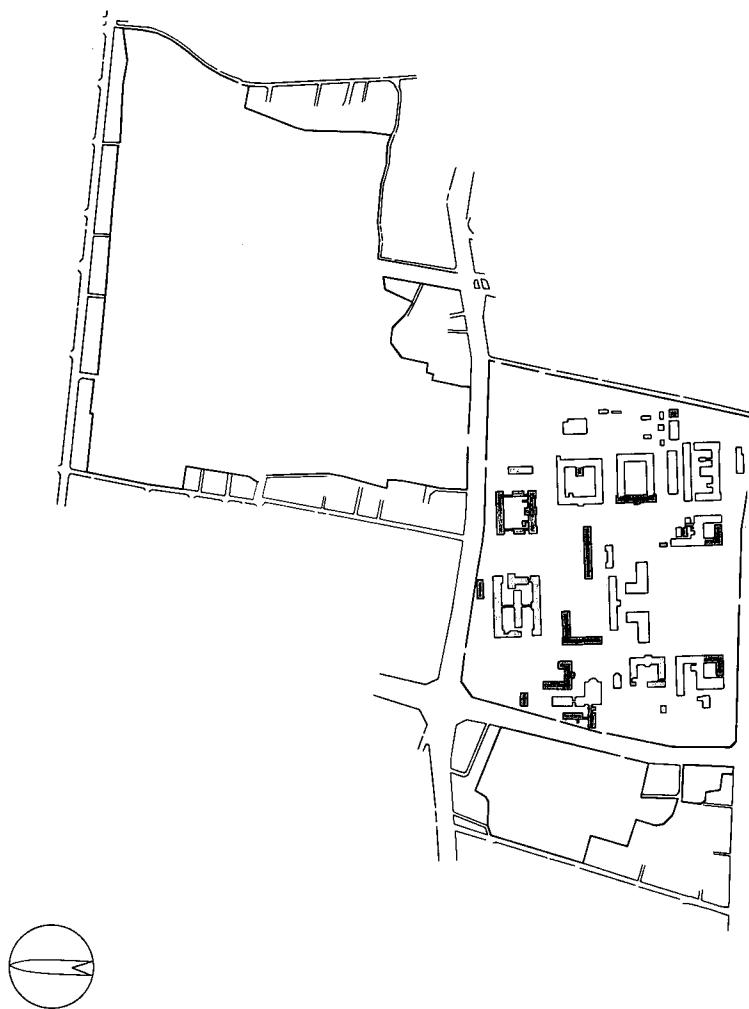
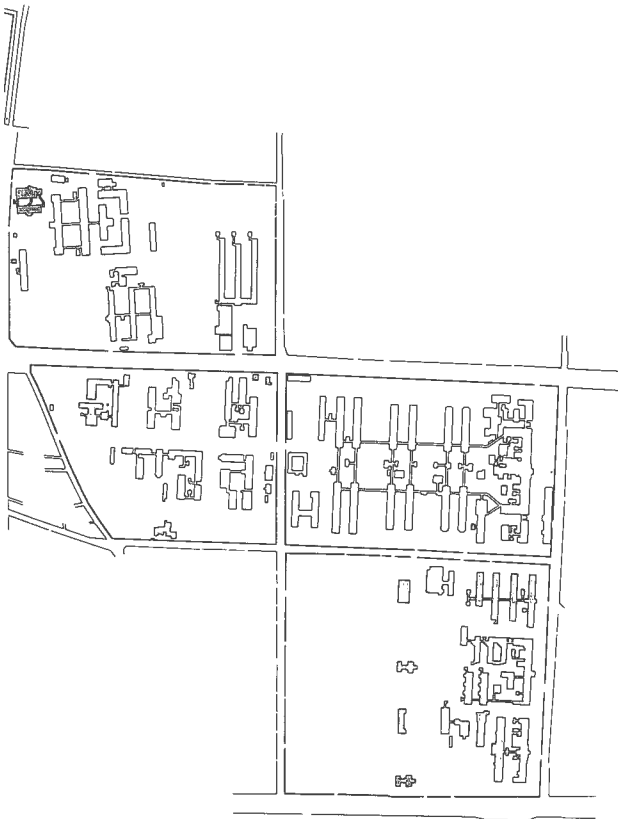


図1-8-8 大正7(1918)年の京都大学キャンパス

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成



(濃い色は明治42～大正7年に建てられたもの)

第4項 周辺地域の変貌

大日本帝国陸地測量部による明治42(1909)年測図、大正元(1912)年発行2万分の1の地図をみると、岡崎地区には、動物園と武徳殿、桓武天皇を祭神とする平安神宮、吉田地区には京都帝国大学や医科大学、附属医院と並んで、第三高等学校、府立第一中学校の建物がみえる。

京都帝国大学の創設、第三高等学校の移転新築と時をほぼ同じくして、明治31(1898)年に府立尋常中学校(後に府立第一中学校と改称)の開校、明治36(1903)年に京都高等工芸学校の竣工と、教育施設が相次いでつくられ、市街発展の呼び水となった。先の地図では、鴨川以東、三条以北の地域、つまり北東の吉田・岡崎地区において市街地の拡張は特にめだっている。こうして人家が増えるに従い、旧来の道路の幅員が相変わらず狭いのが問題となってきた。

吉田地区では、文教施設の建設によって、大きく地域が分節され、それらをもとに道が整備されているといつてよい。帝国大学の設立により、春日通りから百万遍まで現在の東大路のもとになる道路が整備され、近衛通りも開かれている。しかし岡崎地区へ貫通する南北の道路はなく、また今出川通りは河原町通りまでしか通らず、東へは出町柳からの道が白川村へとつながっているだけである。

京都高等工芸学校(京都工芸繊維大学工芸学部的前身)は、明治35(1902)年に創立され、本部地区の西に位置する。その敷地は、京都市から寄付されたもので、関西日仏学館と人文科学研究所の敷地を含んでおり、約1万1,790坪(3万9,000m²)の広さをもっていた。

地区の南東、東一条通りに面して正門を設け、その北側やや奥まった位置(現在の日仏学館付近)に本館、講堂が、さらに裏手に生徒控所がいずれも南面して建てられ、また西側には図案科教室、理化学教室、機械科教場、色染科工場が配された。建物は明治36年に竣工し、ほとんど木造である。2階建

第3節 京都帝国大学キャンパスの創成

ての本館は下見板張の外壁であり、三高の建築によく似ていたようである。設計監督に当たったのが文部省技師久留正道と山本治兵衛であるから、当然のことかもしれない。

昭和4(1929)年に京都高等工芸学校は松ヶ崎へ移転し、跡地は本学に移管された。

第4節 京都帝国大学キャンパスの拡大と充実 ——第Ⅲ期・大正8(1919)年～昭和4(1929)年

大正8年4月1日、これまでの分科大学を学部と改める制度の変更があり、新しい京都帝国大学が発足した。同年5月には、経済学部を増設し、さらに大正12(1923)年には農学部を開設した。経済学部は母胎となった法学部と施設を共用したが、農学部はその用地として大正9(1920)年以来広大な敷地を取得していた。大正6(1917)年に買収していた理学部用地(北部地区の西南部)と合わせて、ここに新しいキャンパス敷地、北部地区が形成されることになった。

北部地区の四至は、大きくは北を御蔭通り、南を今出川通り、東を琵琶湖疏水、西を百万遍知恩寺境内に限られている。しかし東西南北いずれも、この時にはすでに宅地となっていたようで、そのため用地は、道沿いの宅地を除いた、不整形なブロックとなっている。

北部地区には、理学部と農学部の多数の建築が建てられたが、それらに加えて、農学部附属の農場や理学部附属の植物園、またグラウンドなどのスポーツ施設も建設された。こうして広大な北部地区は、建築群で構成される他の地区とは異なり、建築とそれを包みこむ樹木などが一体となった、良好な環境が形成されていく。緑に包まれた北部地区の環境は、農村的といってもよい特質をもっている。

前期においては変化の少なかった医学部地区や病院東地区にも、質の高いストック的な建築が建てられる。既存の地区においては、明治40(1907)年以降と同じように施設の充実が目指される。

しかし、建築をめぐる状況は、第1次世界大戦の後大きく変化した。世界

第4節 京都帝国大学キャンパスの拡大と充実

的な流れの中で建築の意匠が構想され、最新の研究と技術を背景に構造設計がなされるようになる。この第Ⅲ期では、構造は鉄筋コンクリート構造が採用され、またデザインはゼツェシオンや表現派風の意匠となり、これまでの勾配屋根にかわって、フラットルーフ(陸屋根)が多く用いられる。様式建築から近代的な建築へ向かう世界的動向が、キャンパスの建築にも反映しているのである。

こうした革新性は、大正9(1920)年の工学部建築学科の開設によるといっても過言ではない。創設委員であり、学科主任教授であった武田五一は、自ら日本に紹介したゼツェシオンなど最新の意匠を用いた建築を、大正11(1922)年の建築学教室本館をはじめとして、大正14(1925)年の本部本館など、次々とキャンパスに生み出していく。一方、建築学科助教授の森田慶一は、大正14年の楽友会館や大正13(1924)年の農学部表門など、表現派風の意匠をもった建築を設計している。

この時期の営繕課長は、前期に引き続いて永瀬狂三であるが、彼の設計にも医学部微生物学教室本館のように、表現派的な意匠があらわれている。

第1項 キャンパスの拡大——北部地区

1. 理 学 部

大正6(1917)年に買収された、主として理学部を拡充するための用地には、大正8(1919)年に新設された生物学教室(大正10年に動物学、植物学教室に分離)と、大正10(1921)年に新設された地質学鉱物学教室の施設が建設され、それぞれ大正9年、大正11年に竣工した。両教室の本館は、煉瓦造りと木造を併用した2階建て、外壁はモルタル目地切仕上げであり、様式解体期の特徴がうかがわれる。

これらの建築は、地区の南側、中央に開けられた門から北に延びる通路に東西に相対して配置され、この通路が、理学部の敷地における空間構成軸となった。これは本部地区の軸とは10度以上の傾きをもち、現在も本部の敷地

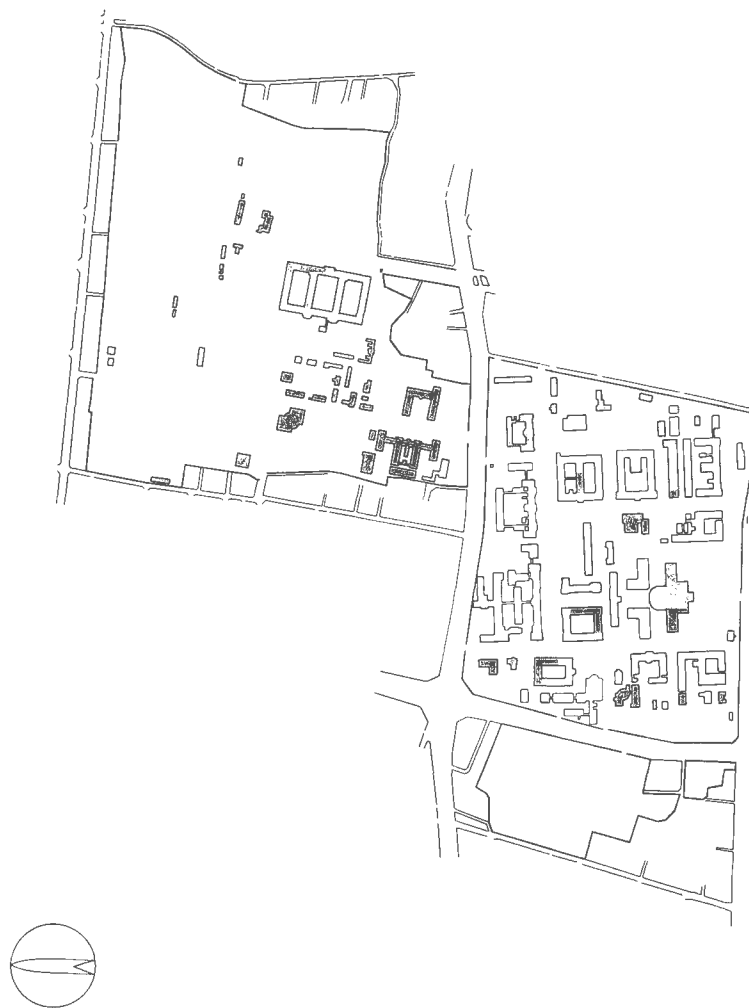
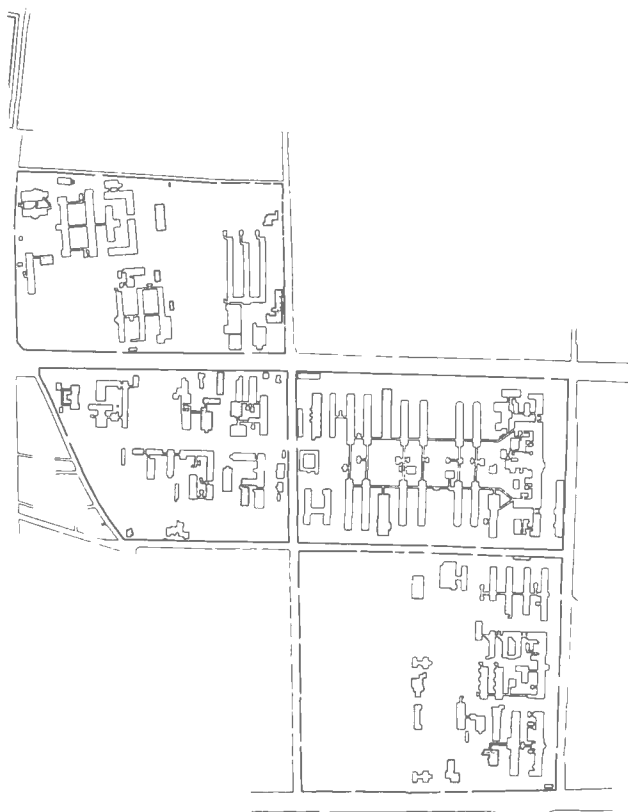


図1-8-9 昭和4(1929)年の京都大学キャンパス

第4節 京都帝国大学キャンパスの拡大と充実



(濃い色は大正8～昭和4年に建てられたもの)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

内の空間軸、今出川通りの方向と微妙な傾きを保っている。

大正14(1925)年に建設された武道場は、側面のピラスターや玄関回りのコラムなどに表現派的意匠を示している。また扇形に方形を組み合わせた特異な平面構成は、武道場という機能が求心性を必要としたからである。

2. 農 学 部

農学部用地は、大正9(1920)年、京都市からの寄付金によって、本学の北に隣接する白川村・田中村の田畑・宅地を買収し、その後大正10年、大正11年と買収を続け、用地の取得を完了した。

農学部の表門は、後二条天皇陵の東、今出川通りから北に走るアプローチ道路の奥に開かれている。今出川通りから表門の間は、両脇にミツマタの植栽が施され、すぐれた景観の並木道となっていた(今はヒマラヤシーダーを残すのみである)。

大正11年に校舎の建築に着工し、大正12(1923)年9月、表門から延びる南北道路の西に、農学部本館の第1期工事が竣工し、その後、大正12年から大正14年にかけて増築工事を行い、完成した。農学部全体の講義、研究、事務などがここで行われた。

この本館は、武田五一をはじめ、森田慶一、坂静雄など、開設後もない本学建築学教室の教官が協力して意匠と構造の設計を行った建物である。平坦な立面構成が特色であり、また味わいのある細部もみられる。正面玄関回りには石を張ったり、小豆色の小口タイル張りの曲面や、鋭角状のピラスターを配するなど、表現派的な意匠となっている。

大正13(1924)年に竣工した表門および門衛所は、森田慶一が設計したもので、表現派的な意匠と、日本瓦を戴く屋根がよく調和している。

農学部は大正末年までにおおよそ施設を整えるが、これらは、本館を別にすると、木造の簡素な小建築ばかりである。こうした建築が、並行して整備された植栽と一体となり、北部地区の緑の景観を形成している。

第2項 キャンパスの充実

1. 本部地区

大正14(1925)年に竣工した現在の本館(京都大学歴史的建造物)、特にその時計台は京都大学のみならず、周辺地域のランドマークともなっている。新設の建築学科の教授武田五一が設計した本館は、この時期に特徴的なゼツェシオンの意匠を随所にとどめ、日本におけるゼツェシオンの集大成作品といっている。また近代史上有名な米国の建築家 F. L. ライトの細部手法をみることができるのも興味深い。

文学部では、大正12(1923)年から翌大正13年にかけて文学部中央館(本館)西半部が新築され、ようやくにして施設が整備・充実された。哲学科と文学科の教室として建てられたこの建物は煉瓦造りであり、外壁は当初は文学部陳列館と同様の石造りを模したモルタル仕上げ目地切りとされ、様式建築に属している。新しい意匠と構造が定着しつつあるこの時期において、特異な存在であった。

法学部では大正13年に法学部研究室の増築部が完成し、もとの煉瓦造り2階建ての法科大学研究室とあわせ、ロの字型の平面が完成し、中庭を囲い込むことになった。増築部は鉄筋コンクリート造り2階建てであるが、外壁には煉瓦を用いて、外観の調和を計り、本部地区の景観を形づくる大きな要素となっていた。

このように法学部・経済学部・文学部のある地域では、建築の新しい流れとは距離を置き、ストック形成期にみられた様式的色彩の濃い、重厚な建築群が中心となっていた。

本部地区の理学部施設をみると、化学教室では大正8(1919)年に金相学研究室、大正11(1922)年に生物化学研究室、大正12年に分析化学研究室が相次いで竣工し、大正13年には本館も増築された。煉瓦造りであった建物の増築が多く、同じ煉瓦造りとされ、もとの意匠との調和が図られている。ただ、

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

金相学研究室だけは、他の煉瓦造り建築が三角形の切妻をモチーフとしたのに対し、矩形を強調した意匠を採用してルネッサンス・パラッツォ風とし、本学ではまれな建築であった。

また大正10(1921)年開設の理学部地球物理学教室が、既存の煉瓦造り建築の西側に増築され、大正12(1923)年に竣工している(現存)。増築は鉄筋コンクリート造りで実施されたが、既存の煉瓦造り建築と調和するように、煉瓦タイルを外装に用い、シルコース、リントルコースを施しているのが注目される。

大正11(1922)年竣工の建築学教室本館および製図室は、ともに本学における最初の鉄筋コンクリート造り建築である。第Ⅲ期を象徴する建築であり、瓦屋根をもたない初めての建築でもある。

建築学教室本館(京都大学歴史的建造物)は、建築学科の開設に力を尽くし、自ら初代教授となった武田五一の意欲作であり、ゼツェシオンの色彩の濃い



図 1-8-10 建築学教室本館設計図

斬新な意匠と最新の構造技法は高く評価される。小豆色の外装タイル、正面入口上部の湾曲した壁面、頂冠帯の装飾、あるいはゆるやかな円を描く階段室などは、これまでの様式建築にはみられなかった表現である。こうした特色は本学の第Ⅲ期の建築に広がっていく。

大正14(1925)年に建設された旧施設部電気掛事務室(現存)は、隣接する発電所に付随した建物で、情報工学教室の新築にともない、現在地に移築された。武田五一の設計で、ゼツェシオンの意匠を四隅上部に施し、その特色がよくあらわれている。

なお、本部地区北門は、大正8(1919)年に買収された北部地区との連絡のために設けられたもので、門脇に現存する門衛所は昭和4(1929)年の竣工である。

2. 医学部地区

母教室から分離独立した衛生学、微生物学教室の新築、既存の教室への増築などが行われ、建築の堆積が進んだ。新しいゼツェション風の建築意匠の採用がみられる。

衛生学教室は元来、生理学教室地区の西半部を占めていたが、大正5(1916)年の微生物学教室独立によって東北隅に移転することになり、大正14年、新教室を建築している。衛生学教室(現存)は医学部地区における最初の鉄筋コンクリート造り建築である。水平に延びる庇や、外壁をめぐるバルコニーなどに近代建築の特色を示しながら、様式の名残もとどめている。

昭和3(1928)年に竣工した微生物学教室本館の半円形の窓や、セットバックしていくファサード、また生理学教室実習室のピラスターに貫かれた庇などは、ドイツなどの表現派の影響を示している。同じ年に解剖学実習室西半部の跡地に増築された発生学研究室にも、表現派風の半円形の窓や、偏平な断面の煙突がみられる。

3. 病院地区

鉄筋コンクリート構造による内科学研究室、外科学研究室、内科学隔離病舎などが、初代建物の間に建設されていく。前2者では、開設後もない建築学教室の武田五一、森田慶一、坂静雄らが設計に参与している。

大正15(1926)年に竣工した内科学教室研究室は、病院地区における最初の鉄筋コンクリート造り建築である。

昭和2(1927)年、病院地区北端部に新築、移転した外科学教室研究室は、意匠的には、内科学研究室とは異なり、連続窓が用いられ、装飾的要素はほとんどない。ただ西側入口の重々しいアーチは表現派的色彩が強く、森田の意匠を思わせる。

昭和4(1929)年竣工の内科学隔離病舎は、当地区における3番目の鉄筋コンクリート造りで、内科学研究室と似た外観であるが、タイルは張られていない。玄関回りにのみ小口タイルを用い、重々しい表現派的意匠を示している。

昭和4年、病院西地区の精神病学教室病舎2棟が増築される。たがいに異なった意匠で、表現派的色彩の濃い建築をつくり上げている。双方とも瓦屋根を用い、円形のパターンを平面計画とアーチ窓に用いながらも男病舎は力強さを、女病舎は落ち着きを示している。

4. 南部地区(旧第三高等学校二本松学舎)

大正12(1923)年、本校の北西に大教室(後の教養部40番教室)が、翌大正13(1924)年に物理学実験室の南に体操館(後の教養部体育館)が建設された。

大正14(1925)年に竣工の楽友会館は、本学創立25周年記念事業の1つとして建設された。同窓会館建設費拠金者で組織された同窓会楽友会が寄贈し、当時の総長荒木寅三郎が「楽友」と名づけた。

鉄筋コンクリート造り2階建ての斬新な意匠をもつ楽友会館は、建築学科助教授に就任したばかりの森田慶一の設計であり、スパニッシュ・ミッシヨ

第4節 京都帝国大学キャンパスの拡大と充実

ン様式を基調とし、鋭利な玄関ポーチの柱などの意匠と、円みをもつポーチの屋根が、よく調和している。農学部表門とともに、森田の代表的作品である。

表 1-8-4 キャンパス建築変遷表 第III期

建 築 名 称	設 計 者	年 代	フロア
理学部化学教室 金相学研究室	永瀬狂三	1919(大正8)	110
旧小児科学教室 本館	永瀬狂三	1919(大正8)	307
動物学教室及び植物学教室 旧本館	永瀬狂三	1920(大正9)	401
動物学教室及び植物学教室 旧本館南棟	永瀬狂三(大倉三郎改修)	1920(大正9)	401
機械工学教室 旧図書室	永瀬狂三	1921(大正10)	107
電気工学教室 本館 増築	永瀬狂三	1921(大正10)	109
電気工学教室 本館 階上 増築	永瀬狂三	1921(大正10)	109
旧物理学教室 増築	永瀬狂三	1922(大正11)	105
機械工学教室 実験室	永瀬狂三	1922(大正11)	107
機械工学教室 機械工場 増築	永瀬狂三	1922(大正11)	107
理学部化学教室 生物化学教室	武田五一、永瀬狂三	1922(大正11)	110
建築学教室 本館	武田五一	1922(大正11)	112
建築学教室 製図室	武田五一	1922(大正11)	112
地質学鉱物学教室	永瀬狂三	1922(大正11)	402
文学部 中央館	武田五一、永瀬狂三	1923(大正12)	102
文学部 陳列館 増築	永瀬狂三	1923(大正12)	103
旧地球物理学教室	永瀬狂三	1923(大正12)	105
理学部化学教室 分析化学教室	武田五一、永瀬狂三	1923(大正12)	110
皮膚病学微生物学教室 癩病舎	永瀬狂三(推定)	1923(大正12)	309
農学部 本館	武田五一、永瀬狂三、森田慶一、坂静雄	1923(大正12)	405
旧第三高等学校 大教室		1923(大正12)	501
文学部 中央館 増築	武田五一、永瀬狂三	1924(大正13)	102
法学部 研究室 増築	武田五一、永瀬狂三	1924(大正13)	102
理学部 宇宙物理学教室	武田五一、永瀬狂三	1924(大正13)	104
工学部共同講義室及び事務室	永瀬狂三	1924(大正13)	106
工学部工業化学教室 本館 増築	武田五一、永瀬狂三	1924(大正13)	110
理学部化学教室 本館 増築	武田五一、永瀬狂三	1924(大正13)	110
土木工学教室 本館 増築	永瀬狂三	1924(大正13)	111
動物学教室及び植物学教室 旧本館増築	永瀬狂三	1924(大正13)	401
農学部 本館 増築	武田五一、永瀬狂三、森田慶一、坂静雄	1924(大正13)	405

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

農学部 表門及び門衛所	森田慶一	1924(大正13)	405
旧第三高等学校 体操館		1924(大正13)	501
本部会館	武田五一、永瀬狂三、坂静雄	1925(大正14)	101
旧施設部電話拡張交換室	武田五一、永瀬狂三	1925(大正14)	101
文学部 陳列館 増築	武田五一、永瀬狂三、松江秀季	1925(大正14)	103
附属図書館 貴重書庫	武田五一、坂静雄	1925(大正14)	103
理学部 事務室	武田五一、永瀬狂三、坂静雄	1925(大正14)	104
旧施設部電気掛事務室	武田五一、永瀬狂三	1925(大正14)	113
衛生学教室 本館	武田五一、永瀬狂三、坂静雄	1925(大正14)	205
旧武道場(のち宇宙物理学教室)	武田五一、永瀬狂三、坂静雄	1925(大正14)	403
農学部 本館 増築	武田五一、永瀬狂三、森田慶一、坂静雄	1925(大正14)	405
附属農場 園芸実験室	永瀬狂三	1925(大正14)	407
楽友会館	森田慶一	1925(大正14)	502
医学部事務室	永瀬狂三(推定)	1926(大正15)	204
内科学教室 研究室	武田五一、永瀬狂三、坂静雄、森田慶一	1926(大正15)	302
演習林本部 試験地実験室	永瀬狂三	1926(大正15)	406
演習林本部 試験地実験室管理室	永瀬狂三	1926(大正15)	406
附属農場 堆肥舎	永瀬狂三、坂静雄	1926(大正15)	407
附属農場 西牛舎	永瀬狂三	1926(大正15)	407
林学教室及び農学教室 温室及び実験室	永瀬狂三	1926(大正15)	408
旧工学部中央実験所 防火設備実験室	永瀬狂三(推定)	1927(昭和2)	108
生理学教室 実習室	永瀬狂三	1927(昭和2)	202
衛生学教室 本館 増築		1927(昭和2)	205
外科学教室及び整形外科科学教室 研究室	武田五一、永瀬狂三、森田慶一、坂静雄	1927(昭和2)	303
北部地区既舎	永瀬狂三	1927(昭和2)	407
工学部共同講義室及び事務室 増築	永瀬狂三	1928(昭和3)	106
解剖学教室 発生学研究室	永瀬狂三	1928(昭和3)	201
微生物学教室 本館	永瀬狂三	1928(昭和3)	202
物理学教室 工作場		1928(昭和3)	404
文学部 陳列館 増築	永瀬狂三	1929(昭和4)	103
北門門衛所	武田五一、大倉三郎	1929(昭和4)	111
東門門衛所	大倉三郎	1929(昭和4)	112
内科学教室 隔離病舎	永瀬狂三、大倉三郎	1929(昭和4)	304
精神病学教室 男第1病舎	永瀬狂三	1929(昭和4)	308
精神病学教室 女第1病舎	永瀬狂三	1929(昭和4)	308

第3項 キャンパスを形成した人々(3)

大正8(1919)年におよそ20年間にわたって本校の施設計画に携わった山本治兵衛が死去したあと、永瀬狂三が建築部長の職を引き継いだ。就任直後の大正8年12月17日、建築部が建築課に、年が明けてまもない1月9日、建築課が営繕課と改組されるなど、目まぐるしく組織の変更が行われたが、第Ⅲ期のほぼ全期間を永瀬狂三が責任者の務めを果たした。

吉田キャンパスに建ったものではないが、大分県別府市にある理学部附属地球物理学研究施設(別府地震研究所)は、塔をもつ端正な意匠の、すぐれた様式建築である。

さて第Ⅲ期においてキャンパスの建築設計に深くかわかり、大きな貢献をしたのが武田五一である。

武田は、明治5(1872)年に広島に生まれ、明治30(1897)年東京帝国大学工科大学造家学科を卒業、2年後に東京帝国大学工科大学助教授に就任したが、英独仏への留学を経て、明治36(1903)年京都高等工芸学校図案科主任として京都に着任、明治40(1907)年には京都帝国大学文科大学講師嘱託、大正7(1918)年名古屋高等工業学校長に転任、大正8年に京都帝国大学工学部建築学科の創設委員となり、大正9(1920)年、学科創設と同時に教授に就任した。また武田は営繕課の建築設計顧問であったが、昭和元(1926)年には京都帝国大学建築委員会委員、昭和4(1929)年から昭和5(1930)年にかけては永瀬狂三の後をうけて営繕課長も兼任した。

彼の作品は、本部地区においては本部本館(時計台)をはじめ、北東隅の建築学教室本館、北門付近の理学部化学教室生物化学研究室、分析化学研究室(煉瓦造り)、本館北側の文学部中央館(煉瓦造り)、法学部研究室増築、図書室南側の理学部物理学教室などがあげられる。その中には建築学教室本館や時計台など、本キャンパスの象徴的な建築となっているものがある。

なお、キャンパスの設計は、同志社女学校、同志社本部についても行って

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

いる。現在、今出川通りから望むことのできるこれらのキャンパスの景観は、武田が、キャンパス計画において個別の建築のみならず、キャンパスの景観計画に大きく関心を寄せていたことを示している。

武田は「関西建築界の父」「建築意匠学の泰斗」と呼ばれ、また日本の近代建築史上、最大のプロフェッサー・アーキテクトといわれる。彼は建築家という概念を超え、意匠家ともいうべき幅広い造形活動を行っている。その活動の特色は多様性にあり、西洋の新しい建築の動向を紹介して自らも設計しながら、前近代の様式建築や、中国風建築、日本建築の伝統に則った建築を設計し、また公園施設(円山公園内施設)、街路設備(本願寺前噴水)、橋(加茂大橋、二条橋)、さらには工芸品やポスターなどまで、多くの分野に手を広げている。武田は、造形言語のもつ多彩な魅力を愛好し、表現した。本部本館や建築学教室本館の細部にもそれらを見出すことができる。

表 1-8-5 武田五一設計の建築意匠

建 築 名 称	年 代	構造・材料	意 匠
本部地区			
理学部化学教室生物化学研究室	1922(大正11)	B2	ゼツェション
建築学教室本館	1922(大正11)	RC、タイル張	
建築学教室製図室	1922(大正11)	RC1	
(文学部中央館、永瀬)	1923(大正12)	B、モルタル	
理学部化学教室分析化学研究室	1923(大正12)	B2	ゼツェション、表現派
文学部中央館増築、永瀬	1924(大正13)	B、モルタル	
(法学部研究室増築、永瀬)	1924(大正13)	RC、煉瓦張	
理学部宇宙物理学教室	1924(大正13)	RC2+RC3	
工学部工業化学教室本館増築	1924(大正13)	B2	
理学部化学教室本館増築	1924(大正13)	B2	ゼツェション
本部本館	1925(大正14)	RC、タイル張	
旧施設部電話拡張交換室	1925(大正14)	RC、タイル張	
文学部陳列館増築	1925(大正14)	B2	ゼツェション、表現派
附属図書館貴重書庫	1925(大正14)	RC2	
理学部事務室	1925(大正14)	RC2	
旧施設部電気掛事務室	1925(大正14)	RC2	
(北門門衛所、大倉)	1929(昭和4)	W1	ゼツェション

第4節 京都帝国大学キャンパスの拡大と充実

(旧施設部電話拡張交換室増築、大倉)	1931(昭和6)	RC、タイル張	ゼツェション
医学部地区			
衛生学教室本館	1925(大正14)	RC2+1	近代(様式)
(病理学教室本館、大倉)	1930(昭和5)	RC3+1、	近代(様式)
病院地区			
内科学教室研究室	1926(大正15)	RC3+1	
外科学教室及び整形外科学教室研究室	1927(昭和2)	RC4	
北部地区			
農学部本館	1923(大正12)	RC2+1	+表現派
農学部本館増築	1924(大正13)	RC2+1	+表現派
旧武道場	1925(大正14)	RC1	+表現派
農学部本館増築	1925(大正14)	RC3+1	+表現派
南部地区			
旧第三高等学校新徳館	1918(大正7)	RC+W	アールヌーヴォー、ゼツェション
北部地区の東方			
旧東方文化学院京都研究所	1930(昭和5)	RC2+1+RC1	スパンニッシュ・ミッション

注 W：木造、B：煉瓦造り、RC：鉄筋コンクリート造り、数字：階数

第5節 京都帝国大学キャンパスの整備 ——第IV期・昭和5(1930)年～昭和21(1946)年

平面的成長が限界を迎えたキャンパスでは、おのずから立体的な成長を求めていくことになる。フロー的な建築群の計画的増改築と再開発が開始されるのは、昭和5年以降のことであるが、太平洋戦争の勃発によって建築活動が中断し、キャンパスの成長はとまってしまう。なお、戦時中および戦後の荒廃については、省略する。

キャンパス敷地は、昭和9(1934)年から昭和11(1936)年にかけて京都高等工芸学校の跡地、すなわち西部地区を加え、58万5,420m²の土地を占めるようになった。昭和16(1941)年の建ぺい率は21.7%と、第III期とほとんど変わらないのに対し、容積率は昭和5年の29.7%から昭和16年の36.8%へと急速に伸びている。キャンパスのゆるやかな立体的成長によって高密度の空間が生まれたのである。なお、昭和19(1944)年には、清風荘の土地と建物が住友吉左衛門から寄付された。清風荘はもともと西園寺公望の別荘で、庭園は、著名な庭師であった小川治兵衛、通称「植治」が作庭したものであり、国指定の名勝となっている。

この時期のキャンパス形成は、量的な拡大とともに、景観に配慮した、質的な向上も意図された。病院東地区の再開発計画は、この時期に建てられたもので、戦争によって中断されたが、共通の近代的な意匠をもつ建築群には優れたものが多い。また本部地区においても、中央部の増改築が計画され、附属図書館は未完成で終わったものの、法・経新館などは、質の高い、大学らしい景観をもっていた。第IV期は、建築の量と質の向上、環境の充実を図った、キャンパスの整備期といえよう。

この時期の建築は、次の3つに大別できるとされる。

(1) 完成度の高い形態をもつ近代建築——病院地区の諸建築(耳鼻咽喉科学教室・内科学教室病舎・婦人科学産科学教室など)

(2) 茶褐色のスクラッチタイルを用い、多少様式的な色彩を帯びた重厚な建築——本部地区の法経新館・文学部中央館増築や、北部地区の数学教室・東方文化学院京都研究所

(3) 景観的配慮のみられる軽快な様式的建築——北部地区の諸建築(演習林本部事務室)

キャンパスの充実化を担ったこれらの建築は、第Ⅲ期において一つ一つの建築が個別的な表現をもち、いわば単体としての意匠であったのとは異なり、地区ごとに統一性を保っている。まとまりのある景観の構成を企図し、群としての意匠が重視されていたのである。

この時期の建築のほとんどは、京都帝国大学営繕課の大倉三郎の設計である。本学建築学科教授武田五一の弟子に当たる大倉は、技師として、次いで営繕課長として第Ⅳ期のキャンパス形成に大きな足跡を残した。

第1項 キャンパスの整備

1. 本部地区

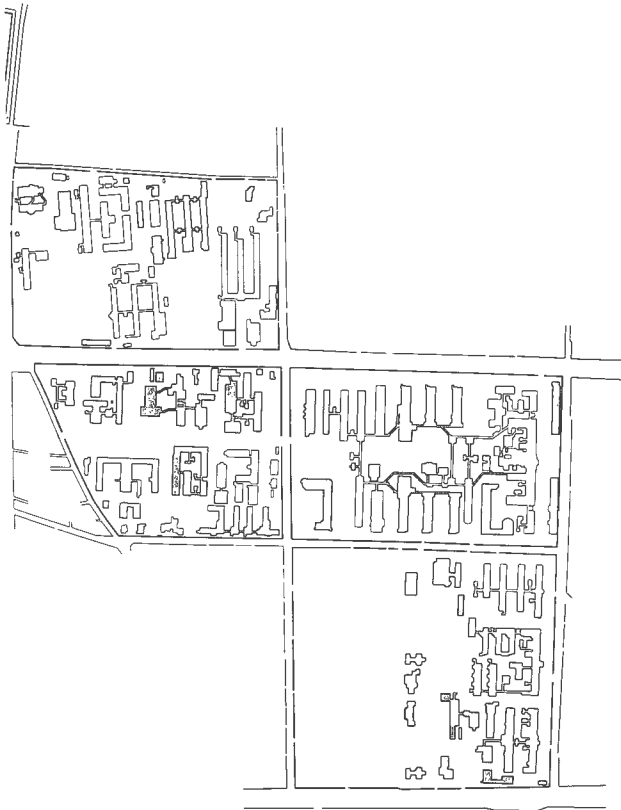
大倉三郎は本部地区における新築、増改築を、統一的な意匠によって進めた。茶褐色のスクラッチタイルを張った外壁は、本部地区に共通し、優れた環境を形成している。

昭和6(1931)年、旧施設部電話拡張交換室の増築と改装が施されている。武田五一の設計による施設部電話拡張交換室を母体として西側に倉庫を増築したものである(現在は東側も含めて保健診療所)。外壁はタイルで覆われ、窓や入口、屋外階段などに表現派的な意匠が見られる。

附属図書館の建設は、大倉三郎、内藤資忠両名によって周到な準備のもとに行われたようである。計画では、鉄筋コンクリート造り3階建て(一部地



図 1-8-11 昭和17(1942)年の京都大学キャンパス



(濃い色は昭和5～17年に建てられたもの)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

下1階、書庫は7層)で、東隣の法経新館と同じデザインが施されていた。昭和14(1939)年5月工事に着手したものの、戦争のために地上2階、地下1階までコンクリートを打設したところで中断し、他は一切未着手のまま終戦まで放置された。

〔法学部・経済学部・文学部〕

法学部および経済学部本館(現在のコの字型の西翼部分)が昭和8(1933)年に新築され、昭和13(1938)年に増築(コの字型の中心部分)されている(戦後になって、法経新館の東翼部分がほぼ対称に増築された)。新館は、北側の片廊下型で、中心に階段室を設け、3階南側には、中心が円弧状に膨らんだ露台がある。外観は、腰部分と正面柱型のみ、擬石塗りびしょん叩仕上げで、他はすべてスクラッチタイルで覆われる。垂直窓や入口のバットレス風の柱型など、ゴシック風の意匠によって垂直線を強調している。法経新館は、配置において対に計画された本部本館と一体となって、本学を象徴する景観を構成している。

文学部中央館(本館)は昭和8(1933)年から昭和11(1936)年にかけて東北隅・東面・南面と増築され、完成する。武田五一の設計した西面とはほぼ同じ意匠になっているが、縦長の窓を用いたり、西側の隅の屋根が寄棟造りなのに対して、増築の東側部分は切妻にするなどのちがいがあがあるほか、北東隅部の北面にステンドグラスをはめ込み、壺型の彫刻を配するなど独自の意匠もある。

これらを出発点として、以降は、外壁に占めるタイルの割合の減少、水平線の強調、壁面の平坦化など、徐々に近代建築様式への志向が強くなる。

昭和11年、中央館の東側に文学部新館(東館)の西半部が新築される(現在のコの字型の姿となったのは、戦後の増築による)。新館の入口は、相対する中央館と意匠を統一しているが、正面1スパンを吹き放ちにして渡り廊下とし、入口柱の上部にモザイクを施すなどの変化もある。また中間帯のみスクラッチタイル張りとし、腰の部分と3階部分にはタイルを張らず、屋根をフラットルーフ、ボーダーによる水平線の強調など、近代建築様式への方向性を明

確に打ち出している。文学部の中央館と新館の間には、意匠の変化が明らかにみとめられる。

このような施設充実の過程で、第Ⅱ期の木造建築群は姿を消した。わずかにその一部が西部地区武道場(現：西部講堂)や学生控所として、部材を転用して再建されている。

〔工学部・理学部〕

電気工学教室本館および増築部分の東に接続して、2棟の増築が、昭和9(1934)年と昭和15(1940)年に行われた。昭和9年の増築部(現存)は、茶褐色タイルを外装に用いるが、2階部分は全面タイル張りで、1階部は柱型のみタイルを張る。玄関部の迫り出した庇が印象的である。

昭和10(1935)年に新しい機械工学教室製図室(現存)が竣工する。旧製図室および増築部分にかわる、新しい製図室は、東西に細長い平面をもち、2階への階段は北面に、地下への階段は南面にもつ。本部地区の他の建築と同じように、外装に茶褐色のスクラッチタイルを用いるが、中央部のそれとは仕様が異なり、腰部分と1階窓回りにはタイルを張らずにモルタル仕上げとする。純近代建築をめざした洗練された作品である。

同じ昭和10年、第Ⅱ期の純正化学製造化学教室本館(木造部分は昭和8年焼失)の跡地に中央実験所が新築され、また本館煉瓦造り部分(大正5年)を改修した。東面のみが平家建てで、南面と北面は2階建てと変則的である。1階、2階ともに中庭に面して歩廊を設け、外回りは平坦に仕上げるが、ただ1つ南面玄関上部に露台をもつ。中央玄関にドイツ古典主義風の、独特のポーチを設け、外壁は本部地区共通の茶褐色スクラッチタイルを張り、中庭に面した部分はモルタル仕上げとする。また、単調なタイル張りの立面に、南東隅の先端にモザイクタイルが張られた煙突がアクセントを与えている。西面の改修部分は、元の煉瓦造りの壁面に同様のタイルを張り、ポーチを設けている。意匠は近代建築をめざし、また構造体として菱組梁を一部に用いるなど、建築学科助教授坂静雄の設計による工学研究所らしい新しい試みも行われた。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

理学部化学教室では、昭和10(1935)年に生物化学研究室の増築が、昭和11(1936)年に物理化学研究室の増築が行われる。生物化学研究室は、本部地区共通のタイル張りの建築で、西面、南面のみ中間部すべてをタイル張りとし、北面、東面は一部分のみタイルを張り、残りはモルタル仕上げとする。物理化学研究室もタイル張りの建築で、西面こそ全面にタイルを張るが、北面、南面は柱部分にのみタイルを張る。

採鉱冶金学教室研究室は、昭和12(1937)年に旧第三高等学校化学実験場および採鉱冶金学教室に接続する形で新築された。本部地区共通の茶褐色スクラッチタイル張りで、壁面のラインで水平線を強調しながら、垂直窓も用いている。近代建築を志向しているが、法経新館や文学部中央館を意識して重厚性をもたせたため、様式主義から脱しきれていない。

昭和12年の建築学教室東別館(現存)の増築は、本館と渡廊下で結んで新築された、タイル張りの建物であるが、タイルの色合が異なり、また意匠的にも平板である。

昭和12年竣工の裏門門衛所は、本部北西隅の北に面した門横に現存する。第IV期の本部地区共通の茶褐色タイルを用い、庇の水平線の軽快なアシンメトリカルな構成などに味わいがある。

近代建築スタイルを目指したこの時期には、意匠の特徴として、タイル仕上げにかわってモルタル仕上げが増え、①1層部の窓回りをモルタル仕上げとしたもの、②腰部と1層窓回りをモルタルにしたもの、③柱型以外はすべてモルタルにしたものなど、そのヴァリエーションは多様である。また、経済的制約からか、外観だけタイル張りにし、内側面はすべてモルタル仕上げとしたものもある。

2. 医学部地区

第IV期にいたって初めて改築が行われる。大正14(1925)年に火災焼失した病理学教室の再建が昭和5(1930)年であり、その後、医化学および薬物学教室も改築される。しかし病院地区と比べて改築もそれほど進まなかった。

昭和5年に竣工した病理学教室新本館(現存)は、中廊下型の、T字型平面で、北西隅に図書館を配し、図書館のみ中2階をもつ。西半部分は改修され、茶褐色のタイルで覆われた。全体的に水平線を強調し、大きな連続窓を使うなど、近代建築としての意匠をみせる。東半部分の縦長の窓に対して、横長の窓を用いた西側立面は、水平線と垂直線がバランスのとれたファサードを創り出しているが、他方では中央部に法経新館と同様に直角に張り出した窓をもち、重厚な造りの入口部分や、その脇の円形の窓、軸性シンメトリの強調など、様式建築の名残がみられる。医学部・病院地区の近代建築の先駆的作品として、また大倉三郎の近代建築の出発点として重要な作品である。

昭和6(1931)年、解剖学教室実習室の残る東半部を移築し、その跡に組織学研究室(現存)を増築している。平面はシンプルな中廊下型で、2階には、東面に日光室および露台をつくり、また東面に屋外階段が設けられている。第Ⅲ期の増築部、発生学研究室(現存)は半円形の窓、偏平な断面煙突などの表現派風の意匠をもっていたが、第Ⅳ期の増築部もそうした意匠をほぼ踏襲している。

昭和9(1934)年から昭和14(1939)年にかけて、医学部地区では唯一の大規模な再開発が行われた。すなわち薬物学教室本館、同講堂、医化学教室本館などが並ぶところに、全体としてヨの字型の平面をもつ鉄筋コンクリート造り3階建ての大規模な新教室が建設された。まず昭和9年に上部L字型の部分が建設された。北と西に通路を配した片廊下型のプランで、文学部中央館の入口を大きくしたような東立面の意匠は、ドイツ古典主義風のいくぶん重厚なイメージをもつ。特にエントランス部分は半屋外のモザイク張りの大階段があり、威圧的な雰囲気さえ与える。この重厚な東ファサードに対して、北南のファサード、西ファサードなどでは、水平線の強調、円形のガラスに包まれた階段室など、近代建築の表現がみられるが、その意匠はややバランスを欠いている。

昭和12(1937)年にヨの字型の真ん中の部分が建設され、続いて残る部分の

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

東側、さらに南西隅を新築し、昭和14年に完成している。北側部分と同じ意匠であるが、ガラス張りの階段室はもたず、また南面には深い庇を付ける。

昭和14年に設置された薬学科は、当初の計画では鉄筋コンクリート造り3階建てであったが、日華事変のため、旧医化学教室を改装、増築して用いた。

3. 病院地区

病院地区の新築は、大倉三郎によって立案された全面的再開発計画に沿って行われた。再開発計画では、近代的な形態と独自の平面をもつ内科学病舎と外科学病舎の間、敷地の中央に本館を置き、本館を中核として求心的に配置された教室や病舎を地下道で結んでいる。本館の南北両側には緑で囲まれた幾何学的な広場を設けている。まず東地区の再開発に着手し、内科学研究室、病舎、講堂、耳鼻咽喉科学教室外科学教室北病舎、外科学教室南病舎、整形外科学教室、内科学教室隔離病舎など、第二世代になる建築群が建設されたが、この再開発計画が半分ほど達成されたところで、戦争のため中断した。

病院の再開発計画は、建築的にも優れたものであった。近代医学の急速な進歩が要求する機能に従い、表現として欧米の近代建築の形態を駆使して、近代病院の機能的な感覚を表した。しかし、設計者の大倉が、昭和9(1934)年の耳鼻咽喉科学教室の竣工時に「近代科学の産物とその雰囲気醸す理知的な簡素、明朗さの気分が第一に望ましいと思う。…(中略)…然もその中に尚情趣ある一抹の温かさが欲しいものである」と述べているとおり、合理主義一辺倒ではなかった。

昭和6(1931)年、再開発計画に従った病院地区最初の近代建築、つまり婦人科学産科学教室(現存)が完成した。L字型の平面をもち、廊下は東西棟では北側に、南北棟では中心にある。屋上階には噴水付パーゴラが設置されている。外部には、手すり付き庇がめぐらされ、水平線を強調する一方で、ド

イツ古典主義風の太い柱を突き出し、垂直性も表現する。また、南東隅玄関回りの曲面や、タイル張りのポーチなどには表現派風の意匠もみられる。折衷的な色合いもあるが、記念碑的作品であることにはまちがいない。婦人科学産科学教室の東に設けられた広場は、再開発計画が生み出した唯一の実現したオープンスペースである。

昭和9年に竣工した耳鼻咽喉科学教室は、婦人科学産科学教室と同様の意匠であり、ほぼL字型といってよい平面と、曲面の外壁、屋外階段、西立面のドイツ古典主義風の柱、表現派的な玄関の底をもつが、婦人科学産科学教室に比べて意匠の洗練、深化がみられる。東面の張り出し連続窓、水平に伸びる庇、バルコニーなど、近代主義建築の造形言語を駆使し、表現派的な細部があるにしても、全体としては近代主義建築としてまとまっている。

昭和11(1936)年に内科学教室病舎3棟が竣工した。ほぼ同一プランの東西に長い建物を南北に3棟並べ、それらの西端を南北の渡り廊下でつないでいる。ベランダをめぐらし、張り出した連続窓のサンルームや、屋上のパーゴラをもつ。西端の階段室はガラス張りの開放的な空間であり、東端の屋外階段は、柔らかな曲線の端部と階段のつくり出す緩い斜方向線が軽妙なアクセントとなっている。病院地区の第IV期の建築の中で最も洗練されている。ここには、近代主義建築以外の造形言語は一切みあたらない。西欧の前衛的なデザインを十分に吸収し、同化し、近代建築の美学を体现しているといつてよい。同じ時期における日本近代建築の先駆的な作品、例えば昭和13(1938)年の東京通信病院に匹敵し得る建築であることは確かである。

昭和13年、外科学教室および整形外科科学教室病舎3棟が南北中軸線に対称に建設された。北から第1、第2が普通外科、第3が整形外科の病舎である。平面、立面などの構成は、内科学教室病舎とほぼ同じであるが、屋外階段の部分に変化がみられる。内科学教室病舎では曲面を含んでいたものが、完全な直方体へと変化し、ややかたい印象を与える。一切の曲線、曲面を排除したという意味では、婦人科学産科学教室、耳鼻咽喉科学教室、内科学教室病舎へと進んだ近代建築への歩みはここで終結をみたといえよう。

4. 北部地区

第Ⅳ期には、理学部各教室の本部地区からの移転、新築が相次いで行われた。物理学教室の移転、新築に始まり、演習林本部事務室や数学教室の新築、動物学、植物学教室の改築などが行われる。これらは、演習林本部事務室が巧みに既存の景観の中に配置されたように、すでに良好な環境を形成しているキャンパスの中へ建築がはめ込まれていったといつてよい。

〔理学部〕

物理学教室はもともと本部地区の旧三高物理学実験場を増築した建物にあったが、昭和3(1928)年の東山通りの市電開通によって精密実験に影響を受けるようになり、農学部の農場用地として取得した現在地への移転が定められ、昭和5(1930)年に本館(南館)が竣工して一部が移転した。第Ⅳ期における本学最初の建築である。その後、本部地区に残っていた講義室、実験室、研究室なども統合することになり、昭和12(1937)年に本館(北館、現存)が新築され、付属する約100名収容の木造平家建ての講義室も竣工している。

南館は、L字型のプランをもち、東西棟は中廊下、南北棟は北側の片廊下で、南西隅にポーチの付いた入口をもつ。ポーチには5本の巨大なギリシア風列柱を配し、外壁には同様のピラスターが並び、ドイツ新古典主義的な雰囲気をもたせていた。当時としてはめずらしく電線、水道管、ガス管などをそのまま壁面に露出させていた。南館の玄関列柱上に飾られた唐草模様のレリーフが、新築された新館の玄関内の壁面にそのまま残されている。

北館は南館にかみ合う形でL字型平面をもつ。南館に比べやや平坦な壁面を有し、近代建築への志向がうかがえるものの、同じ時期の動物学教室および植物学教室本館や数学教室ほどではない。

昭和9(1934)年、数学教室が新築され、昭和11(1936)年の増築、その後の増築により、コの字型の現在の姿になっている。2回にわたる増築部は、北側片廊下型のプランをもつ。動物学教室および植物学教室と同一のファサードであるが、数学教室のほうが建設時期は早い。外観は、この時期の本部地

区の建築に共通してみられるスクラッチタイル張りで、窓間は人造石洗い出し仕上げである。文学部中央館、法経新館などとほぼ同時期であるが、外装を変えることによって変化を与え、それらほど厳格なイメージではない。玄関回りの列柱は、独特の柔らかみがあり、ドイツ・ネオクラシシズムを参照したという。

昭和9(1934)年、動物学教室特別研究室(寄生虫研究室)が、動物学教室講師山口左仲の寄付5万円により建設されている。鉄筋コンクリート造り2階建て、中廊下型プランで、外観は、茶褐色のタイル張りで、ボーダーのみ異型タイルを使用し、囲まれた部分は擬石塗りびしょん叩仕上げとする。正面はボーダーで縁どられた内部に円形窓を並べるなど、ユーモラスな表情を示し、茶褐色タイル外装を施した建築の中で秀作の1つである。

昭和9年の室戸台風によって大破した動物学教室および植物学教室旧本館は、昭和11年に鉄筋コンクリート造り3階建てに改築され、また南棟と西棟が改修された(南棟は理学部事務室となった)。新築部分はヨの字型で、渡り廊下によって旧館と連絡している。それぞれの棟は片廊下型であり、東西棟は西端に階段室をもち、南北棟は中央に突出した階段室をもつ。数学教室とはほぼ同じ意匠をもっている。ポーチ部のドイツ・ネオクラシシズム風の列柱が印象的である。

宇宙物理学教室は、本部地区に位置していたが、昭和3(1928)年の東山通りの市電開通と、昭和14(1939)年に始まった附属図書館の新築工事にともなう騒音振動のため、現在地に移転することとなり、昭和14年、武道場を改装、増築してこれに充てた。大正14(1925)年の武道場は、側面のピラスターや玄関回りなどに表現派的意匠を示し、扇形に方形を組み合わせた特異なプランをもっていたが、当増築はその特色をよく生かしていた。

〔農学部〕

昭和6(1931)年に演習林本部事務室(京都大学歴史的建造物)が木造平家建てで新築された。本部事務室と同時に、附属の演習林本部研究室(図面では標本室材料室)も同じ木造平家建て、同様の意匠で新築され、演習林本部の全容

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

が整った。事務室は、スペイン瓦を葺いた、バンガロー風の建物である。北に開いたコの字型プランで、事務室、研究室、図書室などがある。東面と南面は外周に、西面は芝生の中庭に面してベランダが付き、外壁は腰部を横羽目板、上部を豎羽目板とする。南東隅の玄関は、照明や天井部にアール・デコ風の装飾もみられる。

優れた景観をつくりあげ、また周囲の景観にも調和している本部事務室には、設計者大倉三郎の環境への配慮がうかがわれる。医学部地区や病院地区に前衛的な近代建築群を生み出した第IV期のもう1つの面であり、様式を軽快に用いた瀟洒な作品である。農学部グラウンド、附属農場、理学部附属植物園などとともに、独特の農村的景観を形成している。

昭和16(1941)年に農学部事務室が竣工している。木造平家のバンガロー風建築で、西隣の演習林本部事務室と同様の形式をもっている。日本瓦を葺く点が異なっているが、両者一体となって、北部地区の独特の景観を構成していた。

なお、農学部教授黒正厳の開設した日本経済史研究所は、昭和8(1933)年に土居原亀之助の設計で建設され、昭和29(1954)年に本学が買収して、現在は農業簿記研究施設が用いている。

5. 南部地区

昭和9(1934)年の室戸台風は、40年近くの歳月を経て老朽化していた第三高等学校の木造校舎に大きな被害を与えた。本校は倒壊、寄宿舎は2階部分が吹き飛ぶなど、壊滅的な打撃をこうむった。復旧計画では、鉄筋コンクリート構造の本館を新築し、工事期間中は寄宿舎を平家建ての仮教室に改造して使用し、その代わり新しい寄宿舎を化学実験室の南庭(現在のE号館付近)に新築することになった。

鉄筋コンクリート造り3階建ての新しい本館(現:総合人間学部A号館)が竣工したのは、昭和11(1936)年のことであった。自由の鐘をおさめた塔屋は、デ・スティール派の表現を思わせるすぐれたデザインであるが、一方、巨

大な柱を有する玄関ポーチなどにはドイツ・ナショナリズムの影響もみられ、当時の社会状況がうかがわれる。設計は文部省営繕管財局第三製図掛が担当したが、デザインは、本学建築学科を昭和4(1929)年に卒業し、当時三高教授として図画を講義していた八木清之助が指導した。

6. 西部地区、その他の地区の変遷

京都高等工芸学校跡地の西部地区は、学生のための各種施設用地に充てられ、武道場と学生控所が建てられた。学生控所は、昭和10(1935)年に文学部の建物と工学部機械工学教室製図室を移築し、さらに昭和12年に、法学部・経済学部・文学部の事務室および研究室などを移築して、H型の建物をつくりあげた。食堂や売店など学生の生活のために用いられたが、昭和23年の火災により焼失した。武道場(現在の西部講堂)は、昭和12(1937)年に法学部の講義室2棟などの一部を解体し、その部材を用いて建てられた。

その後、この地区には、新設の工学部化学機械学科と繊維化学科の建物が建設される。まず昭和15(1940)年に設立された化学機械学科は、当初は本部地区の工業化学教室において授業などを行ったが、西部地区において木造2階建ての本館を新築することになり、同年12月に着工している。戦争のため資材、労力など不足しがちであったが、昭和17(1942)年に完成している。

昭和16(1941)年設立の繊維化学科も、昭和17年に木造2階建ての本館を新築している。

また、京都高等工芸学校の跡地に、昭和9(1934)年に独逸文化研究所が建設され、昭和11(1936)年には関西日仏学館が九条山から移転している。関西日仏学館はいくぶん様式的な色彩をおびた建物で、南側の明るい庭園とともに静穏な環境をつくっている。

独逸文化研究所は、日本建築界の巨峰村野藤吾(文化勲章受章者)が設計した建築で、数少ない戦前の作品の1つであった。鉄筋コンクリート造り2階建てで、大胆なコンクリート打ち放しの壁面と列柱の表現が、数寄屋風の緩い勾配の屋根や庇によって覆われた、味わいのある作品で、外周の煉瓦塀な

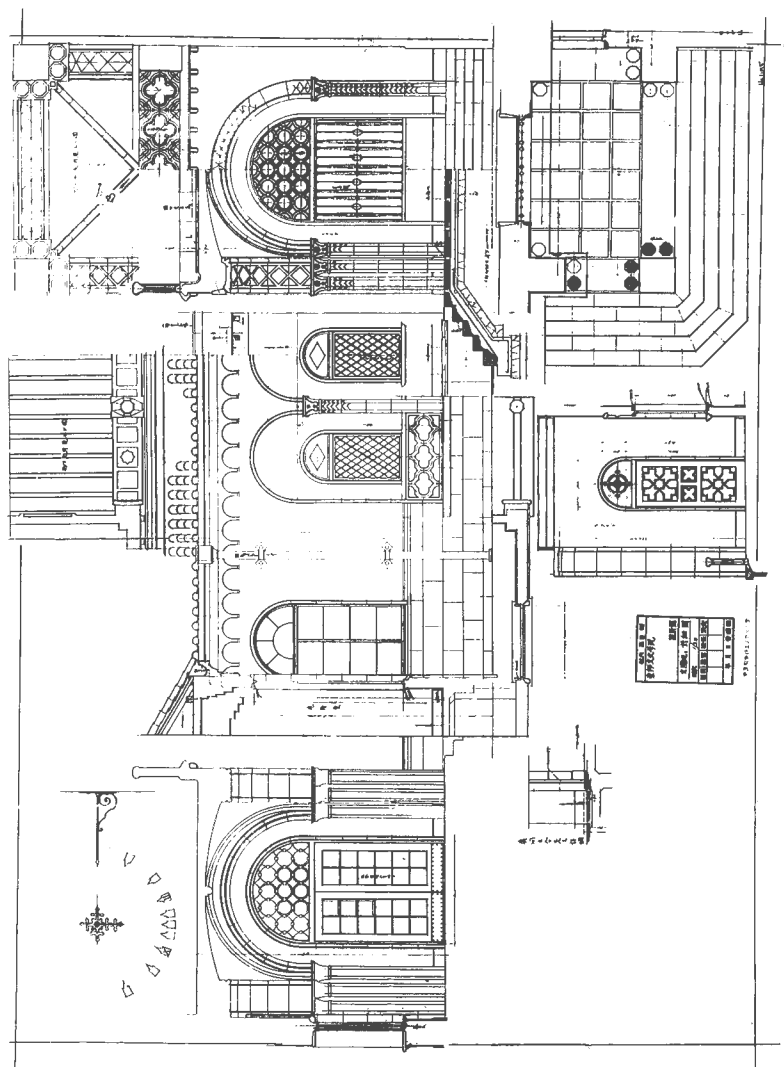


図 1-8-12 東方文化研究所京都研究所設計図

第5節 京都帝国大学キャンパスの整備

どの建設に私費を投じた村野の情熱を込めた作品であった。戦後になって京都大学に移管され、人文科学研究所分館として長く用いられたが、昭和49(1974)年に解体撤去されて現存しない。

便宜上、人文科学研究所旧本館(東洋学文献センター)についてここで記述しておく。旧本館とその敷地は、昭和4(1929)年に開設された東方文化学院京都研究所のものであったが、昭和24(1949)年に人文科学研究所東方部として本学に統合された。したがって本来この第Ⅲ期キャンパスの対象外なのであるが、本学営繕課が建築設計を受託し、昭和5(1930)年に竣工している。

この建築の設計は、実際には当時営繕課長兼務の建築学科教授武田五一の指導のもと、大学院学生であった東畑謙三(現在東畑建築事務所長)が設計を担当した。スパニッシュ・ミッション様式を基調とし、心地良いヴォリューム構成を白いスタッコの壁面で覆った正面外観は、垂直に伸びる塔を中心にした構成を採り、半円アーチを随所にともなうて、本格的様式建築でありながら重々しきを感じさせない。さらに東側に低く水平に延びる研究棟に囲まれて、スパニッシュ・ミッション特有のパティオが設けられている。書庫となっている高層部の壁面を西に控え、アーケードによって囲まれたパティオは、清楚な雰囲気を醸し出している。このようなすぐれた意匠構成は、家具調度にも及んでいる。本学のみならず昭和初期の日本における様式建築の代表的作品ということができ、建築史的価値は高い。

表1-8-6 キャンパス建築変遷表 第Ⅳ期

建 築 名 称	設 計 者	年 代	ページ
土木工学教室 材料実験室		1930(昭和5)	111
病理学教室 本館	武田五一、大倉三郎	1930(昭和5)	204
物理学教室 旧本館(南館)	大倉三郎	1930(昭和5)	404
旧東方文化学院京都研究所	武田五一、東畑謙三	1930(昭和5)	602
旧施設部電話拡張交換室 増築	武田五一、大倉三郎	1931(昭和6)	101
解剖学教室 組織学研究室	大倉三郎	1931(昭和6)	201
婦人科学産科学教室	大倉三郎	1931(昭和6)	305
演習林本部 研究室	大倉三郎、関原猛夫	1931(昭和6)	406
演習林本部 事務室	大倉三郎、関原猛夫	1931(昭和6)	406

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

地質学鉱物学教室 増築		1932(昭和7)	402
文学部 中央館 増築	大倉三郎	1933(昭和8)	102
法学部及び経済学部 新館	大倉三郎	1933(昭和8)	102
看護婦寄宿舎		1933(昭和8)	202
精神病学教室 本館 増築	大倉三郎	1933(昭和8)	308
旧日本経済史研究所	土居原亀之助	1933(昭和8)	405
旧第三高等学校 武道館		1933(昭和8)	501
電気工学教室 本館 増築	大倉三郎、内藤資忠	1934(昭和9)	109
薬物学教室 動物小屋	大倉三郎、内藤資忠	1934(昭和9)	203
耳鼻咽喉科学教室	大倉三郎、内藤資忠	1934(昭和9)	301
動物学教室 寄生虫研究室	大倉三郎	1934(昭和9)	401
数学教室	大倉三郎	1934(昭和9)	403
独逸文化研究所	村野藤吾	1934(昭和9)	601
皮膚病学微生物学教室 特別研究室	大倉三郎	1934(昭和9)	309
文学部 中央館 増築	大倉三郎	1935(昭和10)	102
機械工学教室 製図室	大倉三郎、内藤資忠	1935(昭和10)	107
旧工学部中央実験所	大倉三郎、内藤資忠	1935(昭和10)	108
旧工学部中央実験所 改修	大倉三郎、内藤資忠	1935(昭和10)	108
理学部化学教室 生物化学研究室 増築	大倉三郎、内藤資忠	1935(昭和10)	110
看護婦寄宿舎 増築		1935(昭和10)	202
精神病学教室 本館 増築(瀬川氏研究室)		1935(昭和10)	308
農学部 本館 増築	大倉三郎	1935(昭和10)	405
旧第三高等学校 寄宿舎		1935(昭和10)	501
学生控所(北棟)	大倉三郎	1935(昭和10)	601
旧施設部電話拡張交換室 増築	大倉三郎、内藤資忠	1936(昭和11)	101
自動車車庫及び門衛所	大倉三郎、内藤資忠	1936(昭和11)	101
文学部 中央館 増築	大倉三郎	1936(昭和11)	102
文学部 新館	大倉三郎	1936(昭和11)	102
機械工学教室 第1材料実験室	大倉三郎、内藤資忠	1936(昭和11)	107
理学部化学教室 物理化学研究室 増築	大倉三郎、内藤資忠	1936(昭和11)	110
内科学教室 病舎3棟	大倉三郎、内藤資忠	1936(昭和11)	302
動物学教室及び植物学教室 本館	大倉三郎、内藤資忠	1936(昭和11)	401
数学教室 増築	大倉三郎	1936(昭和11)	403
旧第三高等学校 本館(現総合人間学部A号館)	八木清之助 文部省営繕管財局	1936(昭和11)	501
採鉱冶金学教室 研究室	大倉三郎	1937(昭和12)	106
裏門門衛所及び倉庫	大倉三郎、内藤資忠	1937(昭和12)	110
建築学教室 東別館	大倉三郎	1937(昭和12)	112

第5節 京都帝国大学キャンパスの整備

医化学教室及び薬物学教室、講堂及び実習室	大倉三郎、内藤資忠	1937(昭和12)	203
内科学教室 講堂	大倉三郎	1937(昭和12)	302
物理学教室 旧本館(北館)	大倉三郎	1937(昭和12)	404
物理学教室 講義室	大倉三郎	1937(昭和12)	404
学生控所(南棟)	大倉三郎	1937(昭和12)	601
旧武道場(現西部講堂)	大倉三郎	1937(昭和12)	601
法学部及び経済学部 新館 増築	大倉三郎、内藤資忠	1938(昭和13)	102
外科学教室 北病舎	大倉三郎、内藤資忠	1938(昭和13)	303
外科学教室 南病舎	大倉三郎、内藤資忠	1938(昭和13)	303
整形外科教室 病舎	大倉三郎、内藤資忠	1938(昭和13)	303
皮膚病学微生物学教室 特別研究室 増築	大倉三郎	1938(昭和13)	309
附属図書館(着工・未完成)	大倉三郎、内藤資忠	1939(昭和14)	104
医化学教室	大倉三郎、内藤資忠	1939(昭和14)	203
宇宙物理学教室 増築	大倉三郎	1939(昭和14)	403
附属農場 東牛舎	大倉三郎	1939(昭和14)	407
電気工学教室 本館 増築		1940(昭和15)	109
微生物学教室 実習室		1940(昭和15)	202
精神病学教室 病舎 増築		1940(昭和15)	308
精神病学教室 保養室 増築		1940(昭和15)	308
工学部旧工業化学教室 別館		1941(昭和16)	110
薬学科教室		1941(昭和16)	203
農学部 旧事務室		1941(昭和16)	408

第2項 キャンパスを形成した人々(4)

大倉三郎は、明治33(1900)年京都市に生まれ、同志社中学校、第五高等学校を経て、大正12(1923)年、創設されたばかりの京都帝国大学建築学科を卒業し、宗建築設計事務所に勤務した後、昭和3(1928)年に京都帝国大学営繕事務を嘱託され、翌昭和4(1929)年に技師、次いで昭和6(1931)年に営繕課長を命ぜられ、昭和14(1939)年まで勤務した。技師の時代の大倉は、営繕課長兼建築設計顧問であった建築学科教授武田五一と働き、課長の時代には技師の内藤資忠と仕事をした。なお、営繕課の技手は、常時数名が従事してい

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

たようである。大倉三郎は、10年半の間に五十数件もの設計に関与し、精力的に大学キャンパスの形成に携わった。

大倉は、師と仰ぐ武田のデザインを継承し、互いの調和を図りながら、新築や増改築の設計を行った。本部地区中心部では、武田の設計した本部本館を中心として、京都大学の顔ともいい得るアカデミックな景観をつくり出した。

一方、武田の到達点から前進しようとする姿勢、すなわち近代建築に対する志向も明らかにみえる。それは特に病院地区の施設配置、建築設計において大きく展開される。

大倉のキャンパス計画は、街路によって囲まれたブロックごとに意匠をほぼ統一している。本部地区は、スクラッチタイルを用いた、重厚な折衷主義建築で統一され、また北部地区の本部に近いところでも、同じ意匠による統一性がみられる。スクラッチタイルの使用には、表現派、特にアムステルダム派の影響が感じられるが、やはり武田の本部本館に代表される一連の茶褐色タイルの作品や煉瓦造りの作品を意識したものであろう。建築学教室本館、文学部中央館に典型的であるように、表面装飾であるタイルは、構造体の煉瓦とちがって、タイルの目地によって様々な模様をつくり出すことができる。しかし武田の用いたタイルが平滑で硬質なのと比べ、大倉の用いた櫛引きされたスクラッチタイルは、素朴さと温かみがあり、素材感としては煉瓦に通じるものがある。結果として、煉瓦、平板タイル、スクラッチタイルの三者の織りなす、微妙な色彩および素材感のグラデーションが、本部地区の落ち着きある温かい空間をつくり出している。

一方、病院地区は近代建築スタイルで統一されており、医学部地区もそれほど完全とはいえないものの、同様のデザインで統一されている。これは高度な機能を要求される病院地区が、合理的な全体計画に基づいて再開発されたのに対して、医学部地区は段階的に新築と増改築が行われたことによるものであろう。

北部地区の農場周辺や、西部地区には、非古典系の軽快な木造様式建築が

第5節 京都帝国大学キャンパスの整備

採用されている。これは、周囲の景観に配慮したものであり、同じ様式で設計された各門衛所などは、地区の景観に適度なアクセントを与えている。

このように大倉の作風は、折衷主義建築、近代建築、非古典様式建築の三者に分類できる。キャンパスの中心である本部地区および北部地区には、重厚で温かさのある様式建築を配して、大学としての象徴性を表現した。病院地区および医学部地区は、最新の近代建築で統一し、機能的な要求に応えた。北部地区の農場周辺、西部地区では、その立地や環境を尊重し、木造の非古典様式建築によって良好な景観をつくり出した。これらはそれぞれの地区の特性を理解し、真に合理的かつ機能的なキャンパス計画であり、その設計と、計画を推進した大倉の手腕および才能は高く評価される。

表 1-8-7 大倉三郎設計の建築意匠

建 築 名 称	年 代	構造+外装	意 匠
本部地区			
北門門衛所	1929(昭和4)	W、下見板張	
東門門衛所	1929(昭和4)	W、下見板張	
旧施設部電話拡張交換室増築	1931(昭和6)	RC、茶タイル張	+表現派
文学部中央館増築	1933(昭和8)	RC、スクラッチ	+表現派
法学部及び経済学部新館	1933(昭和8)	RC、スクラッチ	+表現派
電気工学教室増築	1934(昭和9)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築
文学部中央館増築	1935(昭和10)	RC、スクラッチ	+表現派
機械工学教室製図室	1935(昭和10)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築
旧工学部中央実験所	1935(昭和10)	RC、スクラッチ	→近代建築
旧工学部中央実験所改修	1935(昭和10)	B、スクラッチ	+独古典主義
理学部化学教室生物化学研究室増築	1935(昭和10)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築
旧施設部電話拡張交換室増築	1936(昭和11)	RC、茶タイル張	+表現派
自動車車庫及び門衛所	1936(昭和11)	RC、スクラッチ	
文学部中央館増築	1936(昭和11)	RC、スクラッチ	+表現派
文学部新館	1936(昭和11)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築
機械工学教室第1材料実験室	1936(昭和11)	RC、?	
理学部化学教室物理化学研究室増築	1936(昭和11)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築
建築学教室東別館	1937(昭和12)	RC、スクラッチ	→近代建築
採鉱冶金学教室研究室	1937(昭和12)	RC、スクラッチ	
裏門門衛所及び倉庫	1937(昭和12)	RC、スクラッチ	

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

法学部及び経済学部新館増築	1938(昭和13)	RC、スクラッチ	+表現派
附属図書館(計画)	1939(昭和14)	RC、スクラッチ	
北部地区			
物理学教室旧本館(南館)	1930(昭和5)	RC、?	→近代建築+独古典主義
演習林本部事務室	1931(昭和6)	W、板張	
演習林本部研究室	1931(昭和6)	W、板張	
動物学教室寄生虫研究室	1934(昭和9)	RC、スクラッチ、モルタル	
数学教室	1934(昭和9)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築+独古典主義
農学部本館増築	1935(昭和10)	RC、?	
動物学教室及び植物学教室本館	1936(昭和11)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築+独古典主義
数学教室増築	1936(昭和11)	RC、スクラッチ、モルタル	→近代建築
物理学教室旧本館(北館)	1937(昭和12)	RC、モルタル	→近代建築
物理学教室講義室	1937(昭和12)	W、?	
宇宙物理学教室増築	1939(昭和14)	RC、?	(内部改築)
附属農場東牛舎	1939(昭和14)	W、下見板張	
医学部地区			
病理学教室本館	1930(昭和5)	RC	近代建築
解剖学教室組織学研究室	1931(昭和6)	RC	近代建築+表現派
薬物学教室動物小屋	1934(昭和9)	RC	近代建築+独古典主義
医化学教室及薬物学教室講堂及実習室	1937(昭和12)	RC	近代建築
医化学教室	1939(昭和14)	RC	近代建築
病院地区			
内科学教室隔離病舎	1929(昭和4)	RC、小口タイル	近代建築
婦人科学産科学教室	1931(昭和6)	RC、小口タイル	近代建築+表現派+独古典主義
精神病学教室本館増築	1933(昭和8)	RC	
耳鼻咽喉科学教室	1934(昭和9)	RC	近代建築+表現派+独古典主義
皮膚病学微生物学教室特別研究室	1934(昭和9)	W	
内科教室病舎3棟	1936(昭和11)	RC	近代建築
内科学教室講堂	1937(昭和12)	RC	近代建築
外科学教室北病舎	1938(昭和13)	RC	近代建築
外科学教室南病舎	1938(昭和13)	RC	近代建築
整形外科教室病舎	1938(昭和13)	RC	近代建築
皮膚病学微生物学教室特別研究室増築	1938(昭和13)	RC	
西部地区			
学生控所(北棟)	1935(昭和10)	W	(転用移築)
学生控所(南棟)	1937(昭和12)	W	(転用移築)
旧武道場(現西部講堂)	1937(昭和12)	W	(転用移築)

第3項 周辺地域の発展

大正8(1919)年、都市計画法および市街地建築物法の制定公布がなされ、前者は大正9(1920)年に、後者は大正12(1923)年より施行された。これを受けて、京都市では京都の自然や歴史的な環境を重視しながら、都市計画制度を次々と整備した。京都の市街地として位置づけられたキャンパス周辺地域は、住居地域、さらには風致地区に指定され、また現在の基盤をなす道路の新設、拡築が実施される。

大正11(1922)年に設定された都市計画区域は、四条烏丸を中心とした半径6^{マイル}哩(およそ10km足らず)の円内の地域が、将来において京都市の発展と密接な関係をもつと想定している。この都市計画区域設定の大きな特徴は、多くの周辺山地を含むことであり、それは「京都ノ特色タル風光ハ主トシテ、是等山地ニ拠リ發揮セラレ、名勝旧跡亦此ノ裡ニ存在スルモノ多キヲ以テ…(中略)…公園都市タルノ特徴ヲ益々發揮セシムルノ施設ヲ為ス」ためのもので、京都の歴史的風土のもつ都市計画上の重要性が強調されている。

大正13(1924)年には用途地域が指定されている。市街地の東・北・西の三方を囲繞する連峰とその山麓につらなる一帯は、「土地概ネ高燥風物快適ニシテ、土地ノ現状亦主トシテ住居ノ用ニ供セラレ、陵墓、社寺、名勝旧跡モ多ク之ニ介在スル」ことから、住居地域とされた。

また昭和4(1929)年には風致地区の指定が実施された。これは、昭和元(1926)年の明治神宮風致地区の第1回指定に続くものであり、周辺の山地が広範囲に指定されたことが注目される。「京都市ハ古来山紫水明ノ地トシテ知ラレ而モ古キ歴史ヲ有シヒニ比類ヲ見ザル優雅ナル都市」として、風致維持に影響を及ぼす行為を禁止制限するものであり、山麓一帯は住居地域として用途地域指定を受けているが、市街地の膨張が懸念されるために指定されたのである。第1次の指定として、最も破壊されやすい山地部、また平地に近くかつ中央に近い箇所として、東山、北山などととも吉田山をあげてい

る。

一方、大正8(1919)年には京都市区改正街路として1号線から15号線までが決定されたが、都市計画法の施行によって見直され、改めて大正10(1921)年に都市計画道路新設拡張事業として10年の継続事業として開始された。大正12(1923)年から昭和15(1940)年の歳月を費やしてほぼ完成される。

外郭道路の建設は、路線用地を区画整理事業区域内の地主から受益負担の代償として提供させることによって進められた。土地区画整理事業の対象区域は、宅地としての利用の増進と、既成市街地の周辺に健全な新市街地を開発することを目指して、外郭道路の両側にその道路幅員の約10倍の距離で設定された。第1号線、3号線においては約150間、4号線では120間とし、その区域内の道路も順次整備していった。これによって、それまでの市街地周辺部にあった農地は無秩序な開発をまぬがれ、整備された住宅地域や工業地域へと生まれ変わっていった。

キャンパス周辺地域においては、1号線(外郭道路に当たる)の一部として東大路通りの百万遍から現在の北大路通りにいたる部分の新設、8号線として現在の東山丸太町から吉田泉殿町まで拡張、4号線として現在の東山丸太町から天王町に至り、白川通りを北上し「今出川寺町東入大宮町三一五」までが拡張、新設された。このうち1号線と、4号線の白川通りに当たる南北道は、土地区画整理事業と同時に実施されている。4号線は西園寺家の清風荘(現在、京都大学歴史的建造物に指定されている)を迂回するよう計画されていたが、反対運動により土地が寄贈され、百万遍から河原町今出川までが新設された。

1号線は東大路通り百万遍から叡電北側にいたるまでが昭和13(1938)年竣工、叡電から大原街道にいたる部分が昭和8(1933)年に竣工した。また今出川通りは、百万遍から浄土寺西田町まで昭和4(1929)年に、百万遍から河原町今出川までが昭和6(1931)年の加茂大橋とともに竣工している。

こうした道路の整備とともに、市街電車の軌道も整備された。昭和3(1928)年には東山通りの熊野神社・百万遍間が開通し、次いで昭和5(1930)

第5節 京都帝国大学キャンパスの整備

年には百万遍・銀閣寺道間、昭和6年には百万遍・河原町今出川間、やや遅れて昭和18(1943)年には百万遍・大原街道間が開通している。

第6節 京都大学キャンパスの全面的再開発 ——第Ⅴ期・昭和22(1947)年～昭和47(1972)年

戦後の本学は、第三高等学校を統合し、また東方文化学院京都研究所、京都織物会社などの敷地を吸収して、吉田キャンパスの敷地面積を拡大した。キャンパスにおける新営工事は、昭和34(1959)年までは少なかったが、昭和35(1960)年以降、いわゆる高度経済成長期以降は、昭和36(1961)年度から国立大学整備計画が始まったことやベビーブーム、大学志願者の急増などあって、本学キャンパスにおいても建築ラッシュといってよい状況になった。こうした急激なキャンパス再開発が、昭和48(1973)年の石油ショックという外圧によって冷却されるまでを、第Ⅴ期とする。

再開発直前の昭和33(1958)年と昭和47(1972)年を比較して、その急激な拡張を概観してみよう。敷地面積は、73万2,553m²から77万4,502m²に、建築面積は15万1,266m²から18万1,085m²に、延べ床面積は26万635m²から50万1,478m²になっている。建ぺい率は昭和33年の20.6%に比べ、昭和47年が23.4%と、増加の伸びはそれほどでもないが、逆に容積率は、昭和33年の35.6%から昭和47年の64.7%と飛躍的に増加し、戦後のキャンパスが全面的再開発によって立体化、高層化したことを物語っている。

新制京都大学の施設の新営には、昭和24(1949)年の京都大学分課程の改正により、技術課が当たることになった。昭和35(1960)年の規程一部改正によって技術課を施設部に改め、施設部に企画課と施設課を置いている。昭和41(1966)年から施設部の構成を、企画課、建築課、設備課に改め、現在にいたっている。なお、昭和22(1947)年に京都大学に建築委員会が設置されている。その目的は、大きくは建築その他の施設整備にかかわる長期計画や、建

築の配置などの敷地の利用、建築および道路の整頓ならびに大規模な環境整備、建築の意匠、などに関することを審議するものである。

この時期においても各部局において建築活動が実施された。こうしてさまざまな意匠の鉄筋コンクリート構造の中層建築が林立し、他方で本学の歴史と文化的伝統を伝える木造や煉瓦造りの建築は、次々に解体撤去されていった。整然とした美しいキャンパスの形成にはいたらず、キャンパスの高密化が急速に進行した。

第1項 新制大学の発足とキャンパスの整備

戦後における大幅な学制改革によって、昭和22(1947)年、学校教育法が制定され、6・3・3・4の新学制が始まる。同年9月に京都帝国大学は京都大学と改称し、昭和24(1949)年、新制の京都大学が発足している。

この時、新たに教育学部が設置され、教育学部の用地として熊野地区がキャンパスに組み込まれた。設立当初は、本部地区の附属図書館や尊攘堂などの施設を使っていたが、昭和31(1956)年に熊野地区に営まれた新営建物に移転した。その後も熊野地区の本館・新館とともに、本部地区の諸施設も併せ用いていた。

昭和24年の国立学校設置法により、第三高等学校は京都大学に含まれることになり、一般教養課程を担当する分校と改められた。昭和25(1950)年には宇治分校が、京都府宇治郡東宇治五ヶ庄(現：宇治市五ヶ庄)にあった旧陸軍火薬廠の敷地のうち、7万8,811m²と火薬製造工場・火薬貯蔵庫を借りて、開設された。宇治分校の設立においては2回生までの全授業を行い、課外活動や厚生施設の完備した学園都市を建設する理想があったというが、実現にはいたらなかった。こうして1回生は宇治分校、2回生は吉田分校で授業を受ける変則的、かつ不便な事態が続くことになった。

昭和29(1954)年、分校は教養部と改称されたが、宇治分校の廃止、吉田分校への統合が認められたのは、昭和32(1957)年のことである。昭和33(1958)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

年の本館講義室の新営をはじめとして校舎の建設が進められ、昭和34(1959)年にA号館西半分、同36年にD号館が完成した。こうして昭和36(1961)年には教養部の統合が完了した。

昭和35(1960)年には、薬学部が発足した。それに先だって昭和32(1957)年、京都織物会社の寄宿舎と社宅の敷地を買収し、薬学部予定敷地としてキャンパスに組み込んでいる。

また昭和26(1951)年に防災研究所、昭和28(1953)年に基礎物理学研究所、昭和31(1956)年にウイルス研究所が附置された。それぞれ本部地区、北部地区、病院西地区に施設をもって出発した。

第2項 高度経済成長と再開発

昭和30(1955)年の神武景気に始まり、日本経済は急激に発展していった。経済の高度成長期に入った昭和35(1960)年以降、日進月歩の技術革新や産業設備投資の増加を背景として理工系学部卒業者に対する社会的な需要が著しく増大した。昭和36(1961)年度から国立大学整備計画が始まり、その結果、昭和40年代半ばにかけて理工系学部では学科や講座の大幅な新設・拡充が実施された。

また全国の研究者の共同利用を目指した研究所やセンターなどの新設も多く、昭和37(1962)年には経済研究所、昭和38(1963)年には数理解析研究所と原子炉実験所、昭和40(1965)年には東南アジア研究センター、昭和42(1967)年には霊長類研究所、昭和44(1969)年には大型計算機センター、昭和46(1971)年には放射性同位元素総合センターが附置された。

こうして京都大学は吉田キャンパスや宇治キャンパス以外の地にも、多くの研究施設をもつようになった。

1. 本部地区

昭和14(1939)年に開始された附属図書館の建設は、戦争のために地上2

第6節 京都大学キャンパスの全面的再開発

階、地下1階までコンクリートを打設したところで中断していた。戦災を受けなかった本学は工事予算を獲得できず、閲覧室および事務室など、緊急を要するものから着手し、昭和23(1948)年にともかくも竣工式を挙げた。竣工時には、地上2階で、タイルも張られていないありさまであったが、計画どおりに完成していたなら、同じデザインの法経本館とともに本部地区の統一的な景観の形成に寄与していたであろう。

本館前面広場東側から北へ伸びる通路の正面に位置していた心理学教室が取り壊され、土木総合館を正面とする南北通路が整備され、格子状の通路による空間構成がほぼ完成する。

〔法学部・経済学部・文学部〕

昭和8(1933)年の西翼と昭和13(1938)年の中央部のみが建てられ、残る東翼が未完であった法学部・経済学部本館は、昭和28(1953)年と昭和30(1955)年に、西翼と同じ意匠によって東翼が竣工し、当初のコの字型の計画が完成した。法学部・経済学部本館と本部本館は、それらに囲まれた中庭と一体になって、大学キャンパスらしい雰囲気をただよわせており、特に桜の満開の新学期のころは華やいでいる。

昭和47(1972)年には、法学部研究室の赤煉瓦建物(大正5<1916>年新築、大正13<1924>年増築)が解体され、跡地に法学部・経済学部研究室・図書室が竣工している。

文学部では、昭和11(1936)年に中央館が完成し、東館(西棟)が新築されている。東館の残る部分が竣工したのは、昭和40(1965)年のことであり、シンプルな外観で、隅部分にのみ茶褐色タイルを張っている。

〔教育学部〕

昭和40年になって本部地区の中央西、西門近くに、教育学部本館が竣工した。熊野地区にあった教官室・研究室・講義室、事務室を新本館に移した。昭和55(1980)年には本館増築工事が完了している。かつて附属図書館事務室であった煉瓦造りの建物を、現在も研究室として使用している。

〔工学部〕

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

最も学科・講座の新設が多かった工学部において、施設の全面的再開発を指導したのは、建築学教室教授増田友也である。昭和35(1960)年の工学部1号館に始まり、昭和47(1972)年に工学部8号館・10号館・11号館が竣工し、西部地区において記念総合体育館が竣工するまでの期間、すなわち、本学の戦後再開発期が増田友也の活躍期であったといえよう。なお、増田の敷いた路線は、その直接の手を離れた後も継続されている。

増田友也による工学部建物長期計画は、本部地区に3.75mの基準格子を重ね、全体をその均質な秩序の上に位置付けようとするものである。本部地区の東と北に広がる工学部用地において、各教室をグループ化してブロックに囲い込む、中庭型の計画を行い、そこに地下1階・地上4階の鉄筋コンクリート打ち放し仕上げの柱梁構成スタイルを標準型とする新しい建物を建設しようとした。こうして工学部の再開発によって生まれた空間は、きわめて整然とした近代主義的な形態、ある意味で画一的な表情をもつことになった。

こうした合理主義的な計画に基づく建設の過程で、創立以来の歴史を伝える機械工学教室および土木工学教室本館、壮麗な煉瓦造り建築が並んでいた理学部化学教室や工業化学教室など、多くの優れた歴史的建造物がほとんど失われることになった。ただ、明治33(1900)年の電気工学教室本館と大正6(1917)年の土木工学教室本館、大正11(1922)年の建築学教室本館などが保存されたこと、特に土木工学教室本館については、昭和41(1966)年の工学部5号館などの新しい建物が、本館を正面に置いたまま、それを抱き包むように背後に建設されたことは高く評価されてよい。

なお、本部地区の北西にあった理学部化学教室は、昭和40(1965)年に北部地区に移転している。

2. 医学部地区

昭和41年に医学図書館が新築されている。このとき北側にあった解剖学教室は、従来の南玄関ポーチを西面に移築し、西側を正面に改めた。

医学部地区は、病院地区と比べて改築も進まず、新築も、この第Ⅴ期はもちろん、昭和52(1977)年ごろにいたるまでほとんど行われることはなかった。

3. 病院地区

第Ⅳ期の大倉三郎による再開発計画は、戦争により中断された。そのため明治32(1899)年の附属医院(昭和24年より附属病院)本館も、昭和36(1961)年まで存在していた。このように病院東西両地区では初代の建物が戦後も用いられていたが、診療や研究の施設の近代化のために順次取り壊され、改築されている。

昭和29(1954)年に中央診療棟が新築され、その後毎年のように増築を重ねて、十字架のようなプランになった。東西の棟は、東を内科学教室病舎に接し、西を外科学教室北病舎・南病舎に接していた。

昭和37(1962)年に、本館を撤去した跡、中央診療棟の南に接続して外来棟・管理棟が竣工する。外来棟は、東西方向に長く、管理棟は南面する中央部から南北方向の棟が南へ伸びる。外来棟の正面にはなだらかにカーブする車寄せをもつ広場がある。

昭和42(1967)年、中央診療棟の東側、外来棟の北に第1診療棟が竣工している。第Ⅳ期の整形外科教室病舎を撤去した跡地に、昭和45(1970)年に南病棟(外科系総合病棟)を新築している。

現在、病院東地区では再び大規模な開発が進行中であるが、これに際し、中央診療棟の北部、第1診療棟などが早くも取り壊されている。

病院西地区の変化は、南西隅においてみられた。附属病院皮膚病学微生物学教室とその病舎の大部分が撤去され、そこに昭和42年にウイルス研究所本館と胸部疾患研究所附属病院が新築され、さらに昭和43(1968)年には胸部疾患研究所研究棟が竣工している。春日通りには、新しい研究所などと並んで、明治43(1910)年竣工の眼科学教室本館が相変わらず生き続けていた。

なお東北隅には昭和45(1970)年にサービスサプライ棟が建設されている。

4. 北部地区

北部地区の戦後は、湯川記念館の新築に始まる。湯川秀樹理学部教授のノーベル賞受賞を記念して基礎物理学研究所が設置され、その施設として理学部植物園の敷地を割いて昭和27(1952)年7月に湯川記念館が竣工している。建築学教室教授森田慶一の設計で、端正なファサードをもっている。

数学教室は、昭和32(1957)年から昭和42(1967)年にかけて、戦前のL型のプランの建物を増築し、全体としてコの字型をつくっている。

物理学教室は、昭和12(1937)年の本館(北館)を残し、ほかは撤去して、昭和34(1959)年から増築を重ねていき、L型の建物を昭和55(1980)年に完成している。また昭和39(1964)年には、東側にタンデム加速器実験棟が竣工している。敷地の周囲に建つこれらの建物が、中庭を囲い込んでいる。

昭和38(1963)年、地質学鉱物学教室のあったところに理学部事務室などの建物が新築されている。

昭和39年には数理解析研究所が、基礎物理学研究所の南の理学部植物園の敷地、農学部本館の東側に新築され、その後の増築を重ねて昭和43(1968)年に完成している。

大正12(1923)年以来、北部地区の中核となっていた農学部本館は、新しい各教室や事務室などの施設を建設するために撤去され、そこに昭和42年から順次増築を重ねて、昭和63(1988)年に農学部総合館を完成した。

昭和35(1960)年には放射性同位元素総合センター(現在分館)が、昭和40(1965)年には化学教室極低温研究室と農学部附属農薬研究施設が建設されている。

なお経済学部教授本庄栄治郎や農学部教授黒正厳の尽力により開設された旧日本経済史研究所は、昭和8(1933)年に土居原亀之助の設計で建設されたものであるが、戦後の昭和29(1954)年に本学が買収し、現在は農業簿記研究施設が用いている。

改築が相次いで行われた結果、第IV期の建物でさえすでに失われたものが

ある。農学部本館がその面影もとどめないのは惜しまれる。

5. 南部地区

D号館を新築し、教養部の統合が完了した昭和36(1961)年以後も、高度経済成長にともなう学生定員の急増に合わせ、施設が順次整備されていく。昭和38(1963)年にE号館、昭和40年にF号館、昭和41(1966)年にA号館東棟、昭和43年にA号館西棟、昭和46(1971)年にA号館南棟が竣工した。これらの施設は第三高等学校が第II期において形成した正門から本校、各教室を配する南北中心軸、その西側の南北通路の軸線を踏襲して配置されている。

この時期には、新築の4階建てD・E・F号館と3階建てのA号館の間に、2階建ての中央館(明治35年)や平家の木造校舎が数多く立ち並んでいた。

6. 西部地区

化学機械学科の創設に尽力した教授亀井三郎の退官を記念して「亀井記念館」が建設されることになり、昭和32(1957)年に鉄筋コンクリート造り2階建ての建物が当地区に完成し、京都大学に寄付された。

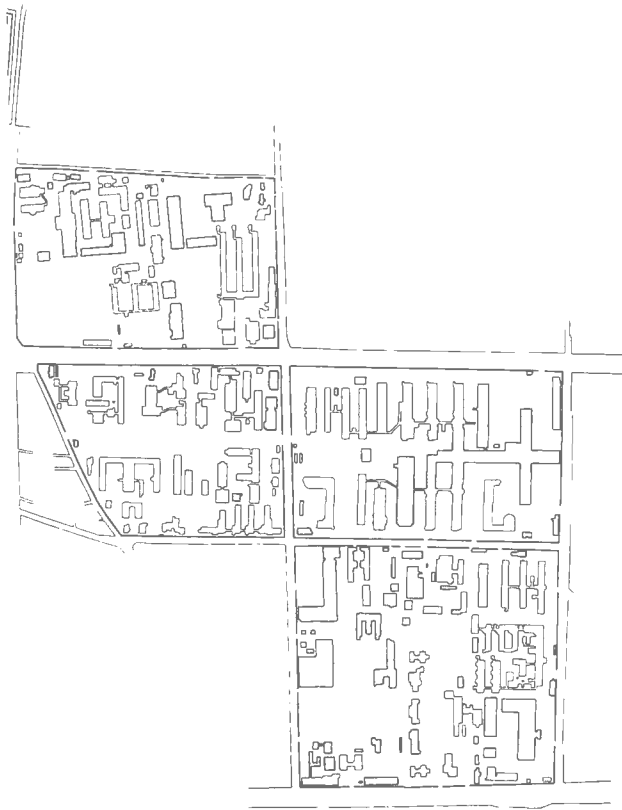
昭和38(1963)年に本部地区における工化総合館(現：工学部4号館北棟)の新築があり、昭和39(1964)年、昭和43(1968)年の増築によって、西部地区にあった全研究室が移転し、同年9月に旧木造本館は取り壊されている。なお、この移転にともない、亀井記念館は大学本部に所管換えされ、100m西北に移して、職員厚生施設となっている。

繊維化学科もまた、昭和36(1961)年に高分子化学科と改称され、その後の拡充によって、昭和43年、本部地区に完成した高分子化学科新館(工学部4号館)に、旧本館の研究室を移転した。

このように、戦前から戦後にかけて工学部化学機械教室や繊維化学教室が使用していたコの字型の建物が撤去された跡地に、本学創立70周年記念事業の1つである京都大学総合体育館が建設された。70周年に当たる昭和42



図1-8-13 昭和45(1970)年の京都大学キャンパス



(濃い色は昭和18～45年に建てられたもの)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

(1967)年からやや後の昭和47(1972)年のことであった。建築学科教授増田友也の設計になるもので、東大路通りに東面し、大階段を設けた重厚な意匠をもっている。

7. 薬学部地区

薬学部地区の歴史は、薬学部発足の昭和35(1960)年以前にさかのぼる。昭和32年に薬学部予定敷地として京都織物会社の寄宿舎と社宅の敷地9,256m²を和進会が買収し、その後本学が購入してキャンパスに組み込んだのが昭和33(1958)年である。

昭和38年に薬学部本館が竣工し、その後昭和40(1965)年、昭和41(1966)年と増築を重ねてL型プランの現状にいたっている。昭和41年には本館の東側に薬学部記念館を新築している。

なお、当時薬学部敷地の南方には、学生寄宿舎の吉田西寮があった。

薬学部の西方、川端通りと近衛通りの角に東南アジア研究センターの用地として、同じ京都織物会社敷地を昭和41年に1万5,080m²、昭和42年に1万3,404m²購入している。東南アジア研究センターが移転したのは、昭和46(1971)年のことである。当初は、川端通りに面して対称に並ぶ2棟の建物の北棟を利用している。北棟と南棟は、2階建て、昭和12(1937)年のものである。

8. 宇治地区

昭和19(1944)年に附置された木材研究所は、最初は農学部の建物を利用していたが、戦後の昭和22(1947)年、大蔵省から東京第2陸軍造兵廠宇治製造所跡地(現所在地)に、12万4,465m²の敷地の無償貸与をうけて移転し、さらに、昭和24(1949)年には同敷地として新たに7万8,305m²の無償貸与をうけている。これが京都大学宇治キャンパスの出発である。

昭和25(1950)年、新制大学の発足にともない、宇治分校に敷地の一部を提供した。敷地のほぼ西半分と東半分の一部と、旧陸軍の火薬製造工場および

第6節 京都大学キャンパスの全面的再開発

貯蔵所の建物を分校の研究室や教室などに使用している。木材研究所の用地は、東半分の残る敷地となったが、それにしても広大な面積であったといっている。

分校時代の正門は、現在の正門の南側にある通用門のところにあり、北端には北門が開かれていた。

昭和36(1961)年に宇治分校が廃止されると、その施設は工業教員養成所が引き継ぎ、その後、昭和37(1962)年に防災研の一部が移転した。分校跡地であった用地面積は広いものの、建物は平家建てであった。

宇治キャンパスの本格的な開発が開始されるのは、昭和39(1964)年以降のことである。まず工学研究所の新館が昭和40(1965)年度から昭和42(1967)年度にかけて新築された。次いで化学研究所・工学研究所・木材研究所・食糧科学研究所・防災研究所などが共同利用する合同総合館を新営することになり、昭和42年に鉄骨コンクリート造りの建物が竣工している。その後の施設の新営、増築もめざましいものであったといえよう。

新しい建築群の配置は、敷地の中央を東西に走る道の中軸としたものであり、そのため分校時代の正門に代わって、新たな正門が東辺の中央に設けられている。

第7節 京都大学キャンパスの再編と保全

——第VI期・昭和48(1973)年～昭和60(1985)年

昭和48年の石油ショックの後、日本社会は低成長経済の時代に入ったが、本学では教育・研究を進展させるために、昭和50(1975)年の医療技術短期大学部、昭和51(1976)年のヘリオトロン核融合研究センターと放射線生物研究センター、昭和55(1980)年の医用高分子研究センター、昭和56(1981)年の超高層電波研究センター、昭和58(1983)年の情報処理教育センターなど、新たな部局が併設・付設されている。

一方、高度経済成長期における無秩序な開発行為、自然環境や歴史環境を破壊した、いわゆる乱開発に対する反省から、環境の保全に社会の眼が向けられるようになった。昭和52(1977)年、本学においても環境保全センターと埋蔵文化財研究センターが設置されたことは重要な意味をもっているといえよう。

第V期、第VI期を通してのキャンパスの変化について、再開発直前の昭和33(1958)年と、昭和47(1972)年、昭和60(1985)年の容積率(=延べ床面積÷敷地面積)を比較してみると、表1-8-8のようになる。数字の意味は、グラウンドなどの空地を含むかどうかによって変わるが、本部地区や医学部地区、病院・薬学部地区の高密度化の著しいことがよくわかる。病院・薬学部地区は、昭和58年にはすでに容積率が106.9%に達していたのであるが、昭和59(1984)年に敷地が大幅に増加したために、昭和60年の容積率が下がっていたにすぎない。新営工事があった翌昭和61(1986)年には、再び100.1%に戻っている。

なお、北部地区ではグラウンドや農場、植物園などがあり、このデータで

表1-8-8 容積率の変遷(昭和33・47・60年)

(%)

	本 部	医学部	病院・薬学部	北 部	南 部	西 部
昭和33(1958)年	52.5	46.5	53.0	19.6	25.6	26.7
昭和47(1972)年	104.4	44.1	84.8	40.0	48.2	50.2
昭和60(1985)年	117.8	71.8	83.4	51.4	52.8	58.1

は低い容積率となっているが、校舎などの敷地に限定すると、やはり高い容積率となる。

建築デザインについてみると、第Ⅴ期新営施設の増築では、同じスタイルの建築意匠が踏襲され、また相変わらずモダニズム風のデザインの建物が新築されるが、他方では赤煉瓦風や茶褐色のタイルを張るなど、周囲に建つ既存建築の意匠との調和に配慮したデザインや、歴史的建築の修復・再生工事が行われ、新しい時代の息吹を感じさせる動きがみられる。

第1項 地域社会とキャンパス

1. 鴨東・東山の自然と歴史の保全

自然の風致があつてこそ都市京都である、という認識は、京都近代の初期から定着していた。自然・歴史環境の保護は、明治の山林保護や社寺林の保護に始まり、京都周辺の山地を広範囲に指定した昭和4(1929)年の風致地区の指定は、画期的な都市計画理念によるものであった。しかし高度経済成長期の開発優先は、公害や文化遺産の破壊など、自然環境や歴史的環境に大きな歪みをもたらした。こうした環境の危機的な状況が続く中で、多くの住民運動が展開された。そうした成果の1つに、昭和40(1965)年制定の「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」、いわゆる古都保存法がある。京都市にかぎっていえば、京都三山やその山麓の地域で歴史的意義の高い景観地域を総理大臣が「歴史的風土保全区域」に指定し、その中で特に大切な地域を都市計画の地域計画として京都府知事が「歴史的風土特別保存地区」

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

に指定している。本学キャンパスの背景となっている東山は、この歴史的風土特別保存地区に指定されている。

歴史的環境を保全するための法的な措置として、京都市では昭和47(1972)年に京都市市街地景観条例が定められ、これにより都市計画法における美観地区の指定が行われた。御所周辺や二条城周辺などと並んで、吉田山と鴨川に挟まれた吉田キャンパスを含む鴨東地区が美観地区に指定されている。

また昭和48(1973)年の新用途地域・高度地区の指定においては、北部・本部・教養部・医学部・病院・薬学部地区が第二種住居専用地域、第二種高度地区に、また西部地区は住居地域、第三種高度地域に指定されている。

これらはいずれも、東山を望む風致を保存し、すぐれた歴史的景観を保つためのものであり、本学キャンパスの開発を行う立場からは、かなり強い規制がかけられたと理解されたであろうが、しかし本学キャンパスが大変良好な自然環境と歴史的・文化的環境の中に立地していることを改めて再認識するよい機会であった。第VI期のキャンパスの再編は、このような地域とのかかわりの中で進行的なものであった。

2. 歴史的建築物の調査と保存

吉田キャンパスをはじめとする本学の敷地は、古来、生活の営まれたところであり、建設工事に先立って発掘調査を行うと、縄文時代以降の埋蔵文化財が姿を現したりする。こうした埋蔵文化財を組織的に調査研究する機関として昭和52(1977)年に学内措置として埋蔵文化財研究センターが設置されている。設置に当たっては、京都市から大学として「世間の範」たることを求められたという。学内の建設工事にともなう発掘調査は、センターの指導のもとに京都大学構内遺跡調査会(学外組織)が当たっていたが、平成4(1992)年4月以降、センターが実施している。

これまで数多くの成果が得られているが、そのうち全国的にみて貴重な遺構も少なくなく、文化遺産として保存の措置がとられたものに、理学部植物園内に移築、復元された縄文時代の配石墓や、埋め戻して保存された北部地

第7節 京都大学キャンパスの再編と保全

区の縄文時代の住居跡、本部地区の奈良時代の竪穴住居跡、南部地区の平安時代の梵鐘鑄造遺構がある（『京都大学百年史』部局史編3、第43章 埋蔵文化財研究センター参照）。

さて、キャンパスの地上にある文化財、すなわち歴史的建築物の調査、研究、保存を目的とした組織は、昭和49(1974)年12月に京都大学建築委員会の中に、歴史的建築物保存調査専門委員会として設置されている。

委員会の活動は、きわめて活発であり、昭和50(1975)年5月に建築委員会に第1次報告を行い、方針の承認をうけている。委員会所見は、まず京都の文化史上価値の高い歴史的建築物である「旧京都織物会社本館および附属工場」「尊攘堂」「旧蹴上発電所」の保存について、「大学として保存の方針を定め、とりあえず下記のごとき措置を取るべきものと考える」としたものであり、措置の概要は、およそ次のようなものであった。

(1) 放置すれば荒廃の恐れあるものはその進行をとどめる程度の応急の措置を図る。

(2) 歴史的建築物として不適当な補修が行われている部分、あるいは破損している部分は、将来なんらかの機会をとらえ、あるいは逐次、修復の方途を講ずる。

(3) 建物個々にその性格に適した利用方法を探索し、関係者の協力により、その実現に努力する。

(4) 今後周辺の開発を行う場合は、歴史的建築物としてのこれらの建物との調和を図るよう留意すべきである。

(5) 耐震安全性については、できれば部分的に歴史的価値を損なわない程度の補強策を講ずることも望ましいが、利用方法等によって危険度を下げる工夫が必要である。

この提言に付け加えて、保存対象建築の沿革と特色について詳細に報告している。なお、「旧蹴上発電所」は敷地を関西電力から、建物を京都市から借りていたものであるが、すでに返還しており、現在は京都大学の施設ではない。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

続いて、昭和50年10月、建築委員会に答申し、承認された第2次報告は、「大学固有の歴史的建築物などの保存について」のもので、次のような内容であった。

(1) 全学的立場から、第三高等学校および京都大学の創立を記念する建造物として旧石油化学教室・本部正門の保存を図る。

(2) その他の歴史的建築物の保存について、第三高等学校創立以来、80年以上の歴史を有する学園にふさわしい、精神的に豊かな環境の創出を期待しつつ、各部署が歴史的建築物の保存にいつそう強い関心を払い、努力することを要望する。

(3) 京都大学キャンパスにおける建築の歴史を記述するとともに、残存する歴史的建築物の保存について判断するための資料を提供するために報告書の刊行を要望する。

この報告には、参考資料として「京都大学主要明治、大正、昭和初期建築物一覧表」が添付されている。この資料は、歴史的建築物保存調査専門委員会の委員であった工学部建築学教室教授川上貢とその研究室の大学院生・学生の精力的な調査によるものであった。

昭和51(1976)年4月の第3次報告では、旧京都織物会社本館および工場の利用が雑居ビルの状況であり、記念建造物にふさわしい利用と保存を図るには程遠い状況にあることから、学園整備に関する検討組織の設置を要望している。

この年の6月18日、創立記念日には、歴史的建築物保存調査専門委員会委員長であった工学部建築学教室教授横尾義貫の呼び掛けにより、委員・職員・学生有志のボランティアによって、旧石油化学教室の階段教室の清掃が行われている。委員長はまた、旧石油化学教室階段教室を、三高および京大の創立を記念する小講堂として利用を図ることを総長に具申している。

昭和54(1979)年6月に承認された第4次報告は、昭和53(1978)年5月医学部長から審議依頼のあった「医学部解剖学教室講堂等の歴史的建築物の保存について」である。すなわち医学部にとって記念すべき歴史的建築物とし

第7節 京都大学キャンパスの再編と保全

て、①解剖学教室講堂、②解剖学教室実習室、③生理学教室本館、④生理学教室研究室の4件を選定し、新しい建築との調和を考慮しかつ有効利用を図りたいというものであった。委員会として、解剖学教室本館西端部の標本室(煉瓦造り2階建て)も保存の価値があると認め、解剖学教室講堂ほか4件を、医学部の歴史、さらには本学固有の歴史にとって記念すべき価値がある建築として指定し、今後の有効利用を図り、また保存の面で万全の策を講じるように建築委員会に要望し、承認されている。なお、保存を承認された5棟のうち、医学部生理学教室本館は、残念なことに、その後平成4(1992)年に新営工事のため解体されており、本学における文化遺産保存の限界を明確に示すことになった。

昭和54(1979)年9月に承認された第5次報告は、電気系学科旧本館の一部を京都大学固有の歴史を記念するものとして保存するというものであった。明治32(1899)年新築、明治35(1902)年増築、大正10(1921)年2階増築の電気工学教室本館は、西側の棟のみ保存されることになったのであるが、しかし平成元(1989)年竣工の工学部3号館(西館、電気系学科等研究棟)の工事に先立ち、大部分が破壊され、正面玄関の入口まわりだけがわずかに残されている。

歴史的建築物の保存が公的に認められるようになり、昭和54年7月から9月にかけて、「本学の歴史と由緒を伝える貴重な遺構」である本部正門の修復が行われた。門扉やその脇の通用口の扉は、創建時のものに倣って複製され、全体の姿は大正14(1925)年に本部本館が竣工した当時のものに復元されている。歴史的・文化的価値を認めた建築に対して修復保存工事を行ったことは、十分に評価すべき画期的なことである。

しかしながら、第5次報告が「本部構内の限定された用地の有効利用ならびに老朽化した建物の更新要求にせまられ、歴史的建築の保存には弾力的な対応が望まれている」と述べているように、開発優先の姿勢は覆い隠せないものがあつた。歴史的建築物の保存については、京都大学はとうてい「世間の範」となるように対処しているとはいえない状況であつた。

第2項 キャンパスの整備

1. 本部地区

各種の施設が新增築されたが、最も注目されるのは、附属図書館の新築である。長らく未完成の不十分な施設を利用してきたのであるが、昭和58(1983)年に新築されている。大きなガラス窓と赤煉瓦風の外装タイルが特徴的であり、タイルの色調は道をはさんで東に隣り合う法経本館や南の煉瓦造りの建築に対する配慮を示している。モダニズム建築的な窓の意匠やヴォリュームの評価はともかく、全体として周辺の歴史的環境とそれほどの違和感はない。

また昭和55(1980)年、工学部4号館を増築する形で環境保全センターが建設され、その中に重金属排液処理装置が完成している。昭和51(1976)年の大型計算機センターの増築では、もとの建物の前面に2階建ての建物が新築され、本来の正面外観を隠している。昭和55年には教育学部本館が増築され、また昭和56(1981)年には3階建ての経済研究所に4階部分が増築されている。

工学部地区では、前期の計画の完成に向けて1・2・3・4・6・7号館の新築・増築が行われた。またイオン工学実験施設が昭和55(1980)年に、建築系教室実験棟が昭和60(1985)年に新築されている。電気系教室の南館とイオン工学実験施設は、赤煉瓦風のタイルの外装を施し、本学指定の歴史的建築物である煉瓦造りの電気工学教室本館との調和に配慮している。

2. 医学部地区

創設時や第II期の面影をとどめる建築が多かった医学部地区では、さまざまな施設によって拡充整備が図られたが、その端緒となったのが、昭和48(1973)年竣工の放射性同位元素総合センターであり、地下2階・地上3階の規模をもち、鉄筋コンクリート構造のもつ重厚な表現が特徴的である。

第7節 京都大学キャンパスの再編と保全

昭和54(1979)年には、敷地中央、南側に基礎実験研究棟(D棟)が竣工している。鉄筋コンクリート構造、5階建ての高さであり、外装に赤煉瓦風のタイルを張っている。その後の医学部の建築デザインの標準となったものとして重要な位置を占めている。

昭和49(1974)年には附属動物実験施設が、昭和56(1981)年には附属総合解剖センターが、昭和59(1984)年には放射線生物研究センターが新築されている。これまでのように教室や学科で施設を保持するのではなく、共同利用を図っているところに新たな方向性が認められる。

基礎・臨床ともに増改築が進み、しだいに大規模な再開発が実施されることになり、すぐれた意匠を誇った明治の煉瓦造り建築も多くは破壊されていた。

3. 病院地区

病院東地区では、RI診療棟が昭和53(1978)年に、MR棟が昭和60年に竣工し、放射線診療の体制が整備された。

一方西地区では、昭和50(1975)年に医療技術短期大学部の建物が新築され、昭和52(1977)年、昭和53年、昭和58(1983)年と増築を経ている。この地には明治43(1910)年の眼科学教室本館・講堂および手術室・病舎などが建っていた。本格的な様式建築の最初の作品と評価された本館が失われてしまったことが特に惜しまれる。

また昭和58年には生体医療工学研究センターが、旧小児科学教室の明治44(1911)年建設の木造病舎のあったところに新築されている。昭和56年にはウイルス研究所が西方に増築を加えている。

4. 北部地区

昭和55(1980)年には赤煉瓦風のタイルを張った理学部宇宙物理学教室が、以前の施設を一掃した跡に、竣工している。昭和53(1978)年には物理学教室の増築および農学部総合館の増築が行われている。増築はそれぞれ以前のデ

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

ザインを踏襲している。

5. 南部地区

昭和48(1973)年に教養部図書館がA号館の南に新築され、昭和51(1976)年に教養部A号館東南棟、昭和62(1987)年に同じくA号館東棟南半分が増築されている。

昭和50年代には、教養部地区の景観は大きく変貌し、A号館の増築部以南は巨大なコンクリートのマッスと化した。その中にわずかに正門とその左手の尚賢館と新徳館、右手の門番所、そして前庭の植込み、その正面のA号館、その奥の中央館など、明治、大正、昭和戦前期にまたがる建築群が現存していた。それぞれの時代を記念するにふさわしい建築が、1つの場所にまとまって歴史的な景観を構成していた。

6. 西部地区

人文科学研究所は、昭和29(1954)年以来使用してきた建築を全面的に撤去し、昭和50(1975)年に4階建て鉄筋コンクリート構造の建物を新築し、本館とした。昭和57(1982)年にドイツ文化研究所が移転すると、あとの敷地・建物を利用している(平成9<1997>年取り壊し)。また昭和58(1983)年には西側に「西館」を増築している。

7. 薬学部地区

薬学部別館が、平成4(1992)年本館の西に竣工している。

昭和46(1971)年8月に旧京都織物会社跡に移転した東南アジア研究センターは、昭和54(1979)年になって赤煉瓦風の4階建て新館を建てている。昭和59(1984)年には新館の増築が行われている。

東南アジア研究センター敷地において注目されるできごとは、昭和57年と昭和58年の両年にわたって、本学歴史的建造物に指定されている旧京都織物会社本館の保存改修工事が実施され、保存と活用の向上が図られていること

である。ただ同じく指定歴史的建造物であった鋸屋根の工場は、惜しいことに、昭和63(1988)年3月撤去されている。

8. 宇治地区

ヘリオトロン核融合研究センターが昭和51年に設立され、ヘリオトロンE強磁場高温プラズマ実験装置およびそれを格納する実験研究棟の建設が開始された。工学研究所は、昭和46(1971)年以降、大型実験設備の設置にともなう施設の新営や、事務室、研究棟などの増築が行われた。昭和56(1981)年度に高温液体電熱流動実験室、次の年度にはプラズマエネルギー直接返還実験棟などが建てられている。

第8節 京都大学キャンパスの現在と未来 ——第Ⅶ期・昭和61(1986)年～平成9(1997)年

第Ⅶ期、特に近年は、新たな京都大学キャンパスの創出に向かって、新しい建築と歴史的建築の調和、歴史的建築の修復・再生、キャンパスのオープン化、学科・専攻や学部・研究科の枠を超えた共同使用による高層化などが進行している。新しい施設の多くは、もともと狭隘な吉田キャンパスの中に建設されるため、それまで利用されていた建物の解体撤去を前提とせざるを得なかったが、前の第Ⅴ期とは異なり、地域社会や周囲の環境に配慮した建築デザインが少しずつではあるが、行われるようになったところに大きな変化と意義が認められる。

新增築工事などにより、容積率はいっそう増加し、平成5(1993)年では、本部地区121.4%、北部地区112.2%となっている。

第1項 地域社会に開かれたキャンパスへ

1. 地域文化遺産と京都大学キャンパス

京都市は、平成3(1991)年と平成4(1992)年の「まちづくり答申」をうけ、京都の都市域を、「自然・歴史的景観保全地域」と「調和を基調とする都心再生地域」とに区分し、新しい都市計画構想を推し進めている。京都大学キャンパスに深くかわるのは前者であるが、その「自然・歴史的景観保全地域」、すなわちいわゆる京都三山の山地部、および山麓の文化財集積地、これに連なり中心部へいたる住宅地においては、自然景観や歴史的景観をこれまでよりいっそう保全するために、歴史的風土特別保存地区の拡大や、風

第8節 京都大学キャンパスの現在と未来

致地区の拡大、種別指定の見直しを行うというものである。こうした環境保全に対する社会的な支持と行政の方針のもと、平成5年に、キャンパスとゆかりの深い吉田山が緑地保全地区に指定されている。

こうした京都の動きは、キャンパスの将来計画に大きな意味をもっているが、近年注目すべき2つの出来事がある。1つは、平成4年にわが国が世界遺産条約(「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」)を批准したことであり、もう1つは、平成8(1996)年に文化財保護法が改正され、文化財登録制度が発足したことである。

平成6(1994)年12月、タイのプーケットで開かれた世界遺産委員会において、「古都京都の文化財」が世界遺産条約に基づく世界文化遺産として認められ、世界遺産リストに登録されたことは、まだ記憶に新しいところであろう。

「古都京都の文化財」とは、京都市・宇治市・大津市にある17カ所の社寺や城などからなっている。煩をいとわず列挙すると、京都市の賀茂別雷神社・賀茂御祖神社・教王護国寺・醍醐寺・仁和寺・高山寺・西芳寺・天竜寺・鹿苑寺・慈照寺・竜安寺・清水寺・西本願寺・二条城など14カ所、宇治市の平等院、宇治上神社、大津市の延暦寺である。

これらはいずれも、「千年にわたり、我が国の都であった古都京都において、歴史上・芸術上価値が高く、日本の文化を代表するとくに重要な文化財として文化財保護法により指定されている国宝建造物または特別名勝庭園を有し、かつ、周辺の風致景観を含めた保護状況にも優れ」ているというのが推薦理由であった。「古都京都の文化財」は、ほとんどの人が知っている有名な寺社ばかりであり、世界遺産になったことも不思議ではない。

世界遺産は、「国境や民族の違いを越えた人類全体にとって、極めて貴重でかけがえのない価値を持つ」とされる。そうした「古都京都の文化財」の存在は、歴史文化都市・京都の未来のあり方に大きな方向付けを与えるものであり、京都・宇治・大津などの都市圏の将来構想を考えるうえで大きな意味をもつことになろう。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

キャンパスの建築や庭園の中では、国指定の文化財は、近代の有名な庭師である小川治兵衛が造った清風荘の庭が名勝に指定されているだけであり、建造物は1つとしてない。100年におよぶ歴史をもつ大学のキャンパスであることを思えば、実に残念なことというほかない。しかしながら、京都大学や京都市の歴史上、大きな価値があるとして、本学が保存を定めた歴史的建造物が、明治26(1893)年の本部正門など17棟ある。今後、地域文化遺産としてのこれらの価値がいっそう広く認知されていくことが期待される。

平成8(1996)年に改正された文化財保護法による文化財登録制度は、こうした地域文化遺産の保全・活用と大きな関係がある。これまでの国宝や重要文化財の「指定」や、重要伝統的建造物群保存地区の「選定」と並ぶものであり、文化財としての価値の高い建造物で、保存しながら活用するための措置を必要とするものを文化財登録原簿に「登録」することができるようになった。このような文化財登録制度は、すでにヨーロッパをはじめ世界各国で行われていて、例えば先進国のイギリスではすでに44万件を越える建造物が登録されている。

登録文化財になるための資格は、むずかしいものではなく、建築後50年を経過している建造物で、①地域の歴史的景観に寄与しているものや、②造形の規範となっているもの、③再現することが容易でないもの、などであればよい。京大キャンパスでは、例えば本部の時計台や工学部の土木工学教室本館、建築学教室本館など、京都大学保存指定歴史的建造物はすべて、登録文化財になるりっぱな資格をもっているし、それ以外にも戦前に建てられた建築は、基本的な条件を満たしているといっていよい。

最近多くの都市で実行されているような、生活空間を豊かにするための方策、景観形成建物の選定や登録などは、開かれたキャンパスを目指す京都大学においても積極的に取り組んでいくべき課題であろう。

地域社会への本学の働きかけとして注目されるのは、昭和57(1982)年に本学が吉田神社の協力を得て、吉田山をめぐる散策路を整備したことである。およそ1 kmの起伏に富んだ「吉田山コース」では、山頂にある「紅萌ゆ

る」の歌碑や、豊かな自然と市街の眺望を楽しむことができる。

2. オープンなキャンパスへ

京都大学キャンパスは、その創立以来、常に施設の周囲に石垣や塀をめぐらしてきた。それらは、外部からの侵入を防ぐ隔離の装置であったといつてよい。キャンパスをつくりあげている地区を「構内」と言い習わしてきたのと同じように、ある意味で大学の閉鎖性を象徴するものであった。

しかし、学術情報はもとより多くの文化遺産が集積されている大学キャンパスを社会に開く試みが、少しずつであるが、実行されつつある。昭和61(1986)年の文学部博物館(現：京都大学総合博物館)は、文字どおり物理的にキャンパスに風穴を開けた。設計を担当した工学部建築学科教授川崎清は、新博物館で開催される展示を地域社会に公開するという課題を、重苦しい石垣を破り、東大路通りに入口を開けることによって解決している。敷地と東大路通りとの間にはかなりの高低差があったが、あえて高い擁壁を崩して道に正面を向けたのが最大の特徴である。キャンパスの中に閉じこめるのではなく、社会に向けて情報を発信することを建築的に表現しているといえよう。文学部博物館は、また京都大学歴史的建造物である文学部陳列館の保存と連係という課題ももっていた。川崎のデザインは、旧館のそれを現代風に継承し、屋根・破風・窓・壁面の形態に連続性をもたせ、明るい空間をつくり出している。

昭和63(1988)年、文学部博物館は「隣接する既存の博物館や周辺のキャンパスとの調和を配慮しながら、古い京都にふさわしい意匠でよくまとめられ」として、国立学校優秀施設に選ばれた。

キャンパスと外部空間とのオープンなあり方は、近衛通りに直面する楽友会館(大正14<1925>年)や、東大路通りからアプローチする総合体育館(昭和47<1972>年)に、その先例をみることができるが、残念ながらその後に影響を与えることがなかった。

京都大学キャンパスのオープン化をいっそう進めたのは、病院地区であ

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

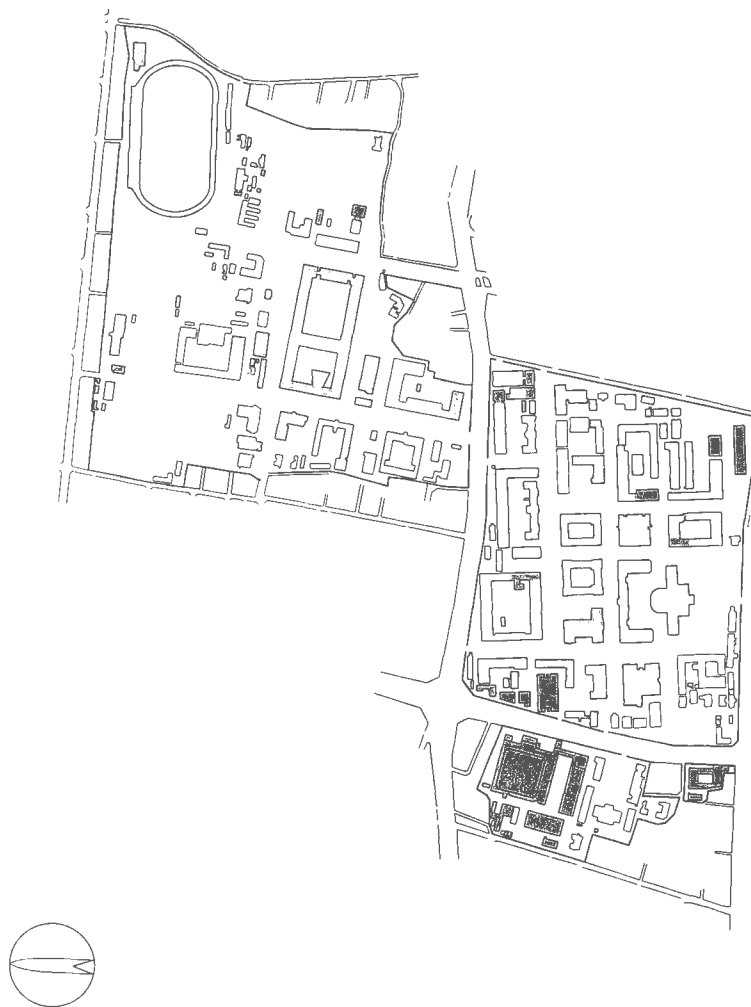


図 1-8-14 昭和63(1988)年の京都大学キャンパス



(濃い色は昭和46～63年に建てられたもの)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

り、次いで医学部地区である。病院地区では、昭和62(1987)年12月の臨床第1研究棟・内科系総合病棟の竣工にあわせて、それまでのいかにも陰鬱であった塀を撤去し、内外からの見通しのよい低いフェンスとした。医学部地区でも、病院地区との調和に配慮して、平成6(1994)年に鉄柵に緑の植え込みを添えた整備を行っている。

京都大学キャンパスにおいては、まだまだこうした環境整備は不十分であり、21世紀初頭には大きく様変わりしていると期待したい。

第2項 歴史的建築の保存と再生

1. 新たな保存指定

平成5(1993)年12月、キャンパスにある多数の歴史的建築のうち、新たに次の8件が本学の歴史的建造物として保全指定することに決定されている(説明は第9節参照)。これまでの9件と合わせて、保存指定の歴史的建造物は17件になった。

1. 事務局本館……大正14(1925)年
2. 文学部陳列館……大正3(1914)年建築部分についてのみ。
3. 土木工学教室本館……大正6(1917)年
4. 建築学教室本館……大正11(1922)年
5. 農学部附属演習林旧本部事務室……昭和6(1931)年
6. 農学部表門および門衛所……大正13(1924)年
7. 旧教養部表門および門衛所……明治30(1897)年
8. 楽友会館……大正14(1925)年

今回は、進行中の施設長期計画策定の前提として保存建物を明確化するために行われ、本学の建築委員会が保存を検討してきた建物、および日本建築学会から建築学的価値が高いものとして本学に保存の要請があった建物について検討した結果である。長期計画の策定を円滑に進めるために行われた保存指定であるから、自ずから保存にも大きな限界があった。すなわち「将来

計画の推移によっては、外観をできる限り保存し内部についても利用等の便宜を考慮し大幅な改修も認めうるという弾力的な配慮のもとに、この決定はなされた」ものであった。

こうした開発優先の状況のもと、保存指定されていた歴史的建造物の破壊も1つではすまなかった。電気系教室旧本館は正面のごく一部を形ばかり残して解体され、また医学部生理学教室本館は、平成4(1992)年に全面的に解体されている。

2. 歴史的建築の保存・修復・再生

他方では、湯川記念館のように、歴史的建造物として未指定であるにもかかわらず、保存されることになった建物もあることは、特筆されてよい。基礎物理学研究所は、平成2(1990)年に広島大学理論物理学研究所を統合して新たに発足し、平成4年度概算要求において必要な施設の新築をあげていた。当初計画においては湯川記念館を取り壊すことに決定されていたのであるが、しかし学内外からの強い保存要望があったため、計画を変更し、北側敷地に新営することになったのである。平成7(1995)年に新しい基礎物理学研究所の建築が完成しており、保存の要望に応えた湯川記念館の再生・活用が期待される。

バブル経済が崩壊した後の経済不況を背景に、大型の公共投資が実行され、それは大学へも波及した。従来はほとんどみとめられなかった維持修理の予算がつき、特に歴史的建造物の修復・再生工事が実施されたことが注目される。

すでに昭和57(1982)年に旧京都織物会社本館、昭和61(1986)年に文学部陳列館、平成元(1989)年に尊攘堂など、歴史的建造物の修復・再生が行われている。埋蔵文化財研究センター資料室として利用されることになった尊攘堂は、外観や装飾をそのまま残し、破損したところの修理と構造補強を行っている。

平成6(1994)年には本部本館や土木工学教室本館、建築学教室本館その他

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

の建物が修復されている。本部本館では平成4年に北面の時刻鐘を復元修理しており、正午の打鐘が復活し、本部地区に懐かしさを帯びた鐘の音が響きわたるようになっていたが、平成6年には本館の改修工事にあわせてすべての時計機器を取り外して大改修を加えている。本部本館、時計台は、京都大学キャンパスのシンボルとして、また地域のランドマークとして再生した。

近年になって、保存指定の歴史的建造物以外でも、改修工事が実施されている。医学部地区では昭和5(1930)年の病理学教室の外装を改修し、赤煉瓦風のタイルを張っているし、本部地区でも文学部東館がブロンズアルミサッシュの窓に取り替え、外壁を見苦しくしていた空調機器のパイプを撤去しているなどは、ほんの一例である。地球環境保全の観点からは、膨大なエネルギー消費をとまなう既存建築の解体、新築を少なくし、既存の建築を1年でも長く使い続けることが望ましいといわれている。スクラップ・アンド・ビルドからレストレーション(修復・再生)へと、パラダイムシフトしている現代の状況が、京都大学キャンパスにも反映しているのである。

第3項 キャンパスの将来構想

「二十一世紀を展望した京都大学の在り方及びそれに即した施設の整備について調査審議する」ために、将来計画検討委員会が発足したのは、昭和59(1984)年10月のことである。ときの総長沢田敏男は、初会合において「四半世紀から半世紀を見通した長期的な観点から、本学の総合的・基本的な教育研究体制及びそれに即した施設の整備についての検討に着手する必要がある」と述べ、特に敷地問題が本学の発展にとって重大な隘路になっているため、現キャンパスの再開発とともにキャンパスの拡充の可能性について早く基本方向を示すことを要請している。本項では、以下において吉田キャンパスの将来構想に焦点を絞ってみていくことにする。

昭和60(1985)年4月の第1次答申では、現有キャンパスの現状について次のように記している。吉田キャンパス約74haと宇治キャンパス約22haが本

第8節 京都大学キャンパスの現在と未来

学を中心をなしているが、吉田キャンパスの容積率92%（敷地面積から運動場や植物園、農場などを除いて計算したもの）は、他の国立大学7大学の平均容積率62%よりかなり高くなっている。京都大学キャンパスはすでに高密度な状態であり、これによって生じる利便はあるものの、長期的な計画を検討するにはこれだけでは十分ではない。しかし、「吉田キャンパスは、約100年に及ぶ文化的伝統とそれにふさわしい雰囲気をもっている。これらの形成には長い歳月を要し、今後とも大切に育て上げることが必要である」とし、高密度の利点を積極的に取り入れ、キャンパスの活用のために建物の高層化なども含めて検討すべきであるという。

将来計画検討委員会の第2次答申（昭和60<1985>年10月）と第3次答申（昭和61<1986>年12月）においては、新キャンパスに重点が置かれ、吉田キャンパスについては言及されていない。

その後、数年を経た平成元（1989）年4月、将来計画検討委員会審議報告書が提出されている。それによると、吉田キャンパスの将来について、「吉田キャンパスの100年に及ぶ歴史によって培われた伝統と良好な都市環境に恵まれて周辺地域と共に発展してきた経緯」を考え、吉田キャンパスの再生に積極的に努力を続けながら、あわせて新キャンパスを取得する必要を述べている。そして、吉田キャンパスにおいては、都心型キャンパスの理想像を追求し、「都市との関連で深い蓄積を持つ分野、都市との積極的な交流を必要とする分野の教育研究の場」としての機能を分担するとしている。

吉田キャンパスの再生については、「大学は、都市にとって知識を集積した文化的空間であり、都市は、大学にとって生活的、文化的養分の母体」であって、吉田地区は理想に近い大学キャンパスの要件を備えている。しかし、施設の「建て詰まり現象」が生じ、環境悪化が進んでいるという。吉田キャンパスの土地利用にかかわる重要な問題は次のように示される。

(1) 拡張と再開発を繰り返して現在に至っている歴史的経過に拘束されている。

(2) 良好な住環境地帯であり、美観地区として都市計画的規制がかけら

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

れ、それに拘束されている。

(3) 社会的条件の変化、特に、高度経済成長時代の影響、ベビーブーム、大学進学率の上昇などによって引き起こされた急激な拡張は、高密度化によるさまざまな歪みを生じ、加えて、モータリゼーションの発達が土地利用上の混乱を引き起こしている。

吉田キャンパスの再生には、「周辺地区との調和を重んじながら、許される範囲内での空間容積の効率的利用を工夫し、できる限り平面空地を生み出して学園環境の整備を計画しなければならない」という。

キャンパスにおける歴史と文化の蓄積、また美観地区の規制を「拘束」条件とみているのは、大きな問題点であり、「周辺地区との調和」や、キャンパス再生の限界が自ずから知られよう。地域の良好な環境形成に京都大学がみずから積極的に範を示すことを、社会が期待していることを忘れてはならない。

平成4(1992)年度の部局長会議第5部会において、京都大学の将来構想が検討され、「京都大学の敷地は現在狭隘化しており、今後、大学院の充実などにより必要面積はさらに増大することが予想され、たとえ高層化が部分的にできても、現在地での改築は極めて困難である」とされている。

平成5(1993)年2月、京都大学将来構想検討委員会が設置されている。またこの年、本学では地区ごとに施設長期計画を策定するための検討が進められていた。

3月には、建築委員会が、高層化による本部構内の再開発計画を調査検討し、再開発計画案を作成している。報告書『吉田キャンパス施設長期計画に関するガイドライン』(平成5年3月)では、建ぺい率を30%以下、容積率を150%以下とし、また建物高さは、敷地境界線から20m未満では15m、20m以上では31mと、これまでよりはるかに高い、8階建ての高層建築が可能な数字を出しているが、これは、「東山の景観保持とキャンパスの環境確保の観点から見て、この計画規模が一つの上限を示しているものと考えられる」と判断されている。

第8節 京都大学キャンパスの現在と未来

同年11月、将来構想検討委員会の報告「21世紀における京都大学のあり方について——独立研究科及び第3キャンパス基本構想(1)〈試案〉」が出されている。第3キャンパス基本構想に関連して、吉田キャンパスの建ぺい率が本部で32.6%、北部で32.5%(全体としては約23%)、また容積率が本部で121.4%、北部で112.2%となっている「過密」な状況が述べられ、建築委員会のガイドラインが示す150%の容積率と31mの建物高さの高層化を図ったとしても、限界があり、第3キャンパスが必要であるとしている。

第4項 キャンパスの変容

吉田キャンパスの本部地区と北部地区は、第2種高度地区であり、建物の高さは20mに制限され、また第2種美観地区にも指定されている。恵まれた環境条件が、キャンパスの高層化を考えると、大きな「拘束」条件となっていた。こうした建築・都市的な規制の緩和に向けて大きな努力がなされ、高層化による再開発計画案、『吉田キャンパス施設長期計画に関するガイドライン』に基づいて、吉田キャンパスにかかる建築規制の緩和について関係機関との間で協議が続けられてきた。平成6(1994)年1月、市外への大学の流出を恐れる京都市は、大学敷地を対象に地区計画制度を導入し、特例として関連規制を緩和することによって大学施設整備に関する支援・誘導策を打ち出した。その結果、吉田地区の再開発計画は、新たな一步を踏み出すことになった。

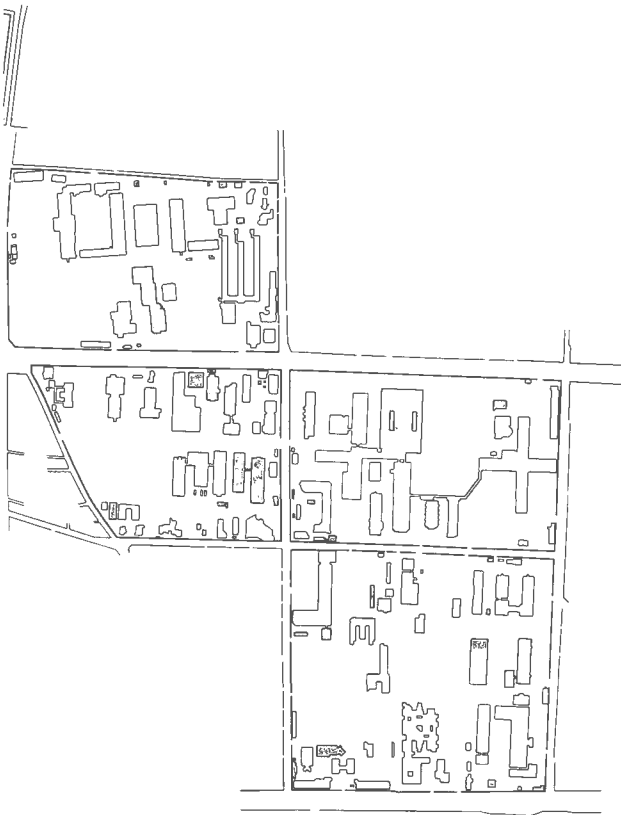
こうして高層化が本部地区や医学部・病院地区で動きはじめた。また、これまでのように単一の部局が単一の施設を使用するのではなく、複数の部局や専攻などが1つの建築を共用する動きもでてきている。工学研究科や医学研究科では、1研究棟に多数の専攻が入り、また文系ではいくつかの学部による共同利用が行われる。

〔本部地区〕

文学部では平成6(1994)年度から、昭和11(1936)年以来使い続けてきた本



図1-8-15 平成9(1997)年の京都大学キャンパス



(濃い色は平成元～9年に建てられたもの)

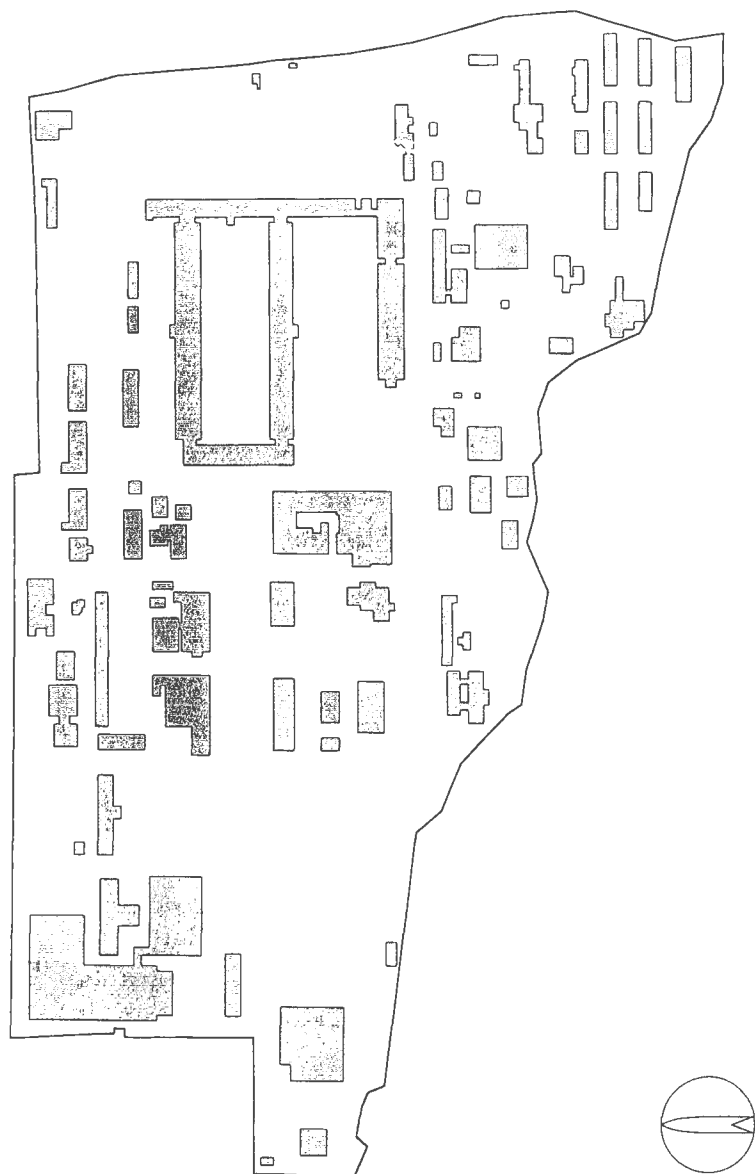


図1-8-16 宇治キャンパス

館などの建て替えが始まった。口の字型の建物の北西部が撤去され、特色あるデザインの東玄関を含め、本館の東南部分も失われようとしている。

法・文・経・教育学部の文系4学部長期計画による中層共同棟の建設も進み、平成9(1997)年には文学部の8階建ての建物が竣工する。外壁のタイルは本館や東館に調和するものを張っており、歴史と文化の継承を感じさせる。

平成元(1989)年竣工の工学部3号館(西館、電気系学科等研究棟)では、4専攻と2施設、さらに国際交流施設が共用している。このとき、電気工学教室創設以来の赤煉瓦建物が解体され、わずかに西側玄関部分のみが壁面保存のかたちで残された。

キャンパスの施設の劣悪さがマスコミを通じて社会的に知れ渡るにつれ、実験施設の改善も少しずつ行われるようになった。平成5(1993)年末に完成した機械系教室の実験棟もそうしたケースの1つであった。

平成9(1997)年には、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟(VBL棟)や、また8階建ての物理系3専攻が共同利用する研究棟も竣工した。

〔医学部・病院地区〕

長期計画に基づく再開発が進行している。昭和の初期までに建てられた施設は、各々の教室や附属病院診療科はそれぞれ独立した施設をもち、活動していたが、近年では、散在する各教室の施設は、しだいに新しい研究棟や診療棟に統合されている。

平成2(1990)年、病院西地区の分子生物科学共同研究棟が竣工し、分子医学系研究科3領域とウイルス研究所の一部、遺伝子実験施設が共同利用している。平成5年には分子生物実験研究棟の増築、医学部本館4号棟北棟が、平成6(1994)年には医学部本館4号棟南棟が完成した。

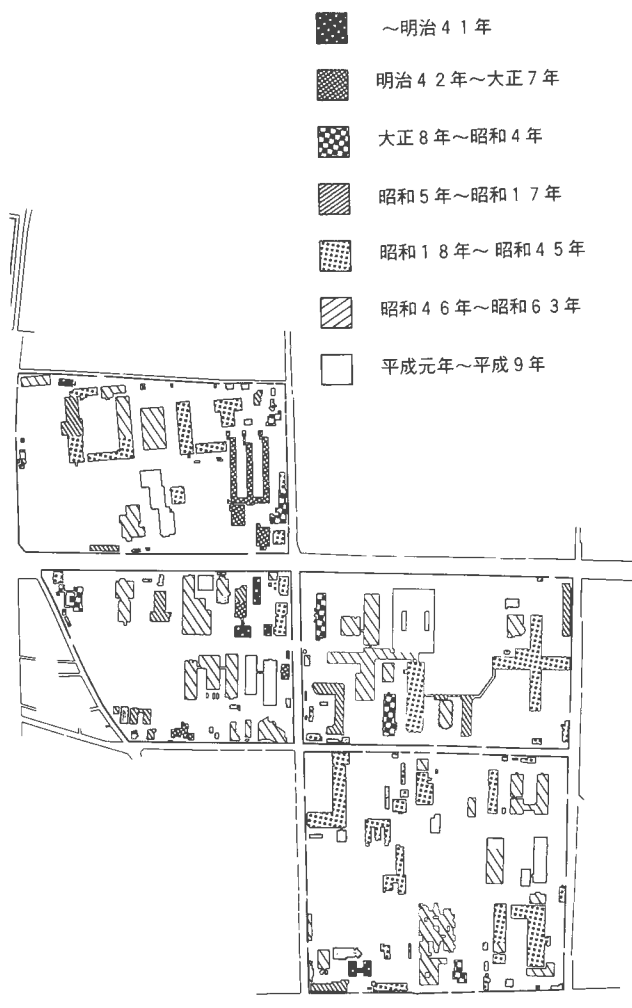
〔北部地区〕

平成6年、北門の脇、今出川通りに接して赤煉瓦風の理学研究科動物学教室および植物学教室が竣工した。また、学内外の保存の要望により破壊を免れた湯川記念館のかわりとして、平成7(1995)年、その北側にこれも赤煉瓦



図1-8-17 平成9(1997)年の京都大学キャンパス

第8節 京都大学キャンパスの現在と未来



——時期区分・歴史的建造物の所在

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

風の基礎物理学研究所新館が完成している。平成9年、農学研究科農芸化学科棟が、東隣の理学研究科実験棟と同じデザインでつくられている。

〔南部地区〕

大正7(1918)年以来の尚賢館が平成元(1989)年に不審火による火災で全焼している。

教養部は、平成5(1993)年3月31日で廃止され、前年10月に総合人間学部が設置された。また独立研究科として人間・環境学研究科が平成3(1991)年4月開設されている。これらの部局の新施設として、平成8(1996)年に地上5階・地下1階の建物がグラウンドの南に竣工している。

〔薬学部地区〕

薬学部別館が平成4(1992)年に、また平成6(1994)年には東南アジア研究センターとアフリカ地域研究センターの共同研究棟が完成している。

〔宇治地区〕

当地区では、近年も新営工事が続き、化学研究所の原子核科学研究施設やスーパーコンピュータラボラトリー、木質科学研究所の木質材料実験棟、防災研究所の地震予知研究センターなどが建てられている。

宇治キャンパスは、当初の形成期はおもに鉄骨造りが用いられたが、その後、鉄筋コンクリート造りや木造など、さまざまな構造・材料・デザインの建築が建てられるようになり、少数ながら使用されている宇治分校以前の煉瓦造りの建物も合わせ、豊かな景観をつくっている。

第5項 歴史と未来をはらむ現在——おわりに

地域社会の援助のもとに創立され、京都の自然と歴史と文化に育まれて、発展してきたのが京都大学である。

戦後の高度経済成長期を経て、学内には現代を良くも悪くも表現する現代建築が多数を占めている。鉄筋コンクリート構造の打ち放しの建築や、さまざまなタイルを張った建築など、特に高等教育の場としての大学にふさわし

第8節 京都大学キャンパスの現在と未来

い建築かどうか、歴史的な評価を加えるには、時期尚早といわねばならない。

しかし、「京都大学キャンパスの美しさは、樹木の緑と歴史の息吹を感じさせる建築群や重厚で格調の高い建築群によることは誰しも認めるところである」とか、「美しい京都大学キャンパスを創り出して地域社会に貢献してきた」とはとうてい記せない現況ではなかろうか。せめて『京都大学120年史』には、「京都大学キャンパスの美しさは、周囲の山並みとキャンパスの緑とともに、地域社会に育まれた100年の豊かな伝統がつくる多彩な建築群によることは誰しも認めるところであろう」と、誇りと自信をもって書きとどめたいものである。

第9節 京都大学キャンパスの歴史的建造物

1. 旧京都織物会社本館(東南アジア研究センター) 明治22(1889)年

明治7(1874)年、京都府は殖産興業政策の一環として、河原町二条下ルに織工場を設営し、京都は洋風織物技術の中心となった。明治12(1879)年、織工場は織殿と改称し、明治19(1886)年にはフランスから技師を招き、蒸気力を用いる機械を輸入するなど、その生産システムは京都の近代化を代表していたといえる。明治20(1887)年、その設備の払い下げを受けて、京都織物会社が設立された。現在、東南アジア研究センターとなっている建築は、同社の本館である。

京都織物会社は、もともと川東練兵場であった加茂川東の地に、日本土木会社によって建設された。工事は明治22年2月にはおおむね完成し、翌明治23(1890)年4月27日に開業式が行われた。

旧京都織物会社本館は、川端通りに西を正面にして建つ。煉瓦造り2階建て、棧瓦葺の建築である。平面は、正面中央に玄関入口を設け、その南北に東西棟のウイングを備えたH型をとる。南北のウイングは切妻を正面にみせるが、南棟の妻には「明治廿年創業」、同じく北棟の妻には「京都織物会社」と刻まれた額石を掲げている。

次に、その形式の特徴をみていくと、まずベースメント(基礎)は上下2本の石材のバンド



写真 1-8-6 旧京都織物会社本館

(蛇腹)によって形づくられ、1階と2階の間はストリング・コース(蛇腹)によって分けられている。窓はその上下に直線状のリンテルとシルを置いただけの、簡素な形式をとっている。さて、ここで注目すべきは、この建築の形式・プロポーシオンともに、第三高等中学校吉田学舎本校ときわめてよく似ているということである。本校建物は、京都織物会社本館と同じ明治22(1889)年に竣工しており、時代が同じであることも興味深い。また、後に取り上げる、同じく明治22年竣工の旧物理学実験場の建築も、1階建築であるが、ベースメント、窓の意匠ともに共通している。

正面妻部分では、煉瓦と違った材料、石材を用いて水平線を強調し、三角形の破風、すなわちペディメントをつくりだしている。3つのコーナーに同じく石材でつけられたアクセントは、円窓とともに、簡略化されたペディメントの単調さをうまく回避している。本建築では、正面中央の玄関部分より、左右のウイングのほうがボリュームがあるものの、玄関入口のアーチ、その上方、2階の窓に対応して、軒蛇腹の中央を弓状に立ち上げることでより正面中央を強調し、さらに両ウイングでは軽やかなペディメントでボリュームを落とすことによって、全体のバランスを整えている。

本館の設計者は不明であるが、簡素ながらも決して単調にならず、全体のバランスをとる適切な意匠からは、設計者の並みならぬ技量をみてとることができる。

2. 本部正門 明治26(1893)年

本部正門は、第三高等中学校創設からまもない、明治26年1月に竣工した。その設計は、明治22(1889)年にはすでに完成していたようであり、当時の図面も残されている。本校・寄宿舎などの建築からおくれて計画さ



写真1-8-7 本部正門

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

れたためか、山口半六・久留正道による明治20(1887)年の「第三高等中学校吉田学舎建物配置図」に本部正門は表れていないが、おそらく本校と同じく山口・久留によって設計されたと推測される。

扉とランタンが失われ、正面・背面ともに補強の足が添えられてはいたが、当初の姿をよく残していた正門は、昭和54(1979)年7月から9月にかけて、「本学の歴史と由緒を伝える貴重な遺構」として修復が行われた。門扉やその脇の通用口の扉は、創建時のものに倣って複製され、全体の姿は大正14(1925)年に本部本館が竣工した当時のものに復元されている。

3. 旧教養部表門および門衛所 明治30(1897)年

旧第三高等学校正門と門衛所は、明治30(1897)年、京都帝国大学が創立され、第三高等中学校が二本松の地に移転することになったときに建設された。設計は、同時期に建てられた本校・銃器室・生徒控所・事務所と同じく、真水英夫が中心になっていたと推測されている。



写真 1-8-8 旧教養部表門および門衛所

正門は木造建築で、大扉の上枠をアーチ状にデザインするなど、全体を洋風の意匠でまとめているが、和風の手法も門柱と礎石との結合部に認めることができる。また門衛所は、八角屋根のようにみえる受付部と切妻屋根の居室部の取り合わせがおもしろい。

4. 旧石油化学教室建物(学生部ほか) 明治30(1897)年

旧石油化学教室建物は、明治22(1889)年に新設された第三高等中学校の建築のうち、唯一現存する旧物理学実験場から始まり、数回にわたる増築を経て、現在の姿にいたっている。旧物理学実験場は、第三高等中学校創設時に

竣工した建築で、本学最古の遺構である。設計は、山口半六と久留正道の手によっている。

旧石油化学教室建物の造営沿革は、大きく4つの時期に分けることができる。まず明治22年、初めに山口・久留によるL字型平面をもつ物理学実験場(第1期)が建てられ、次にこの



写真 1-8-9 旧石油化学教室建物
(学生部ほか)

建築を取り囲むように、物理学教室が増築された。この増築は、明治31(1898)年、東北にL字型平面の1階建物(第2期-1)、明治42(1909)年、南西に同じくL字型平面の1階建築(第2期-2)の2つの部分からなる。続いて、大正3(1914)年には東面の2階部分(第3期-1)が増築、大正5(1916)年に旧物理学実験場の西に物理学教室放射学及び放射学研究室(第3期-2)が新築、大正11(1922)年に北面の2階部分(第3期-3)が増築された。最後に、物理学教室の北西に地球物理学教室(第4期)が増築され、現在にいたっている。

それぞれの増築時の設計者をみていくと、まず物理学実験場を取り囲む物理学教室の増築(第2期-1・2)、およびその東面の2階増築(第3期-1)は山本治兵衛が担当している。次に、放射学及び放射学研究室の新築(第3期-2)には山本と永瀬狂三が担当し、物理学教室の北面2階増築(第3期-3)、および地球物理学教室の増築(第4期)は永瀬が単独で設計している。

5. 解剖学教室本館標本室(医学部図書館書庫) 明治34(1901)年

解剖学教室本館は、明治32(1899)年に医科大学が創設されてから2年後の明治34年、最初に竣工した建築である。本館ははじめすべて煉瓦造りで計画されていたようだが、西端部に接続する標本室が煉瓦造りで建てられた以外は、木造となった。現在は、煉瓦造りの標本室のみが残り、医学部図書館書

庫となっている。

屋根は寄棟造り、棧瓦葺で、アーキトレーブを戴くが、このうちコーニスに相当する部分には煉瓦が用いられ、石のモジリオンはまばらに配されている。

1階と2階の間は、石のストリング・コースと黒煉瓦の帯で分けられ、ベースメントは、2本の石の帯から描き出される。

1階・2階とも、ペアのアーチ窓が設けられるが、2階ではアーチの枠の折り返し部分に石材を用い、1階に比べ、やや装飾的になっている。簡略化された様式建築ではあるが、前面に持ち出されたモジリオン、面取りのされた開口部など、細かな意匠がみられる。

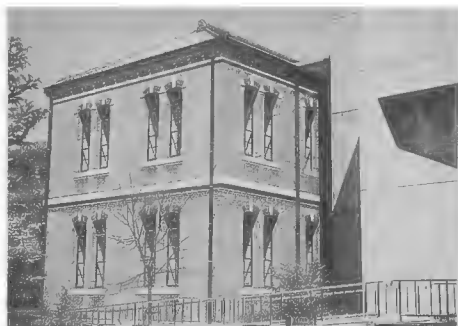


写真 1-8-10 解剖学教室本館標本室
(医学部図書館書庫)

6. 解剖学教室実習室(解剖学組織実習室) 明治34(1901)年

本館標本室の東寄り、少し北にあり、東西に長い棟をつくる木造平家建て、寄棟造り、棧瓦葺の建物である。西妻側に本館と結ぶ渡り廊下への接続部を備え、それに面して入口を設けている。外壁は下見板張で、内装は壁を漆喰塗大壁、床と天井は板張りとなっている。主に顕微鏡実習に使用されるため、南北2面の壁面に大きな窓を設け、上下2段の連続した引違いガラス障子を入れて、室内の採光に配慮している。なお、室内は中間の間仕切がなく、また中央部の床を1段高めた壇など、特別の設備を備えている。



写真 1-8-11 解剖学教室実習室
(解剖学組織実習室)

7. 解剖学教室講堂(解剖講義室) 明治35(1902)年

木造平家建て、寄棟造り、棧瓦葺の建物で、東に下屋の廊下がある。外壁は下見板張、ペンキ塗り仕上げ、北・西・南の3面に上下2段の窓をつくり、上を上げ下げ窓、下を片開き窓にしている。屋内は階段教室となっており、東側壁際に黒板、演壇、解剖台を設け、これらを取り囲む北・西・南を聴講席とし、机と椅子を並べている。階段教室の床下にある、北・西・南の壁よりのコの字型の空間は、研究室となっている。入口は西に設けられている。



写真 1-8-12 解剖学教室講堂
(解剖講義室)

法医学教室の講堂も同じような形式を備えていたが、本講堂は最大の規模をもっており、医学部創設以来、医学教育・研究の中心施設として大きな役割を果たしてきた。

8. 尊攘堂(埋蔵文化財研究センター資料室) 明治36(1903)年

安政6(1859)年10月、江戸の獄で死を予期した吉田松陰は、京都に学習院を興隆し、尊攘堂の設立を志する書簡を残した。この書簡は、門下の入江杉蔵にあてられたが、入江のもとへは届かず、明治維新ののち、子爵品川弥二郎の手に渡った。こうして、松陰の尊攘堂建立の遺志は、明治になってはじめて、品川の手によって実現されることになったのである。

明治20(1887)年、品川は高倉通錦小路の邸宅にこれを創設、維新における尊攘の志士の霊を祀るとともに、遺墨等を集めて公開した。明治29(1896)年には、尊攘堂保存のために、尊攘堂保存委員が設置され、その方策が議論された。品川の死後、明治33(1900)年に京都大学への寄贈が申し出られ、明治

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

35(1902)年に本学、現在の附属図書館の場所に新築された。明治36(1903)年4月に竣工し、尊攘堂は志士の遺墨とともに、本学附属図書館の管理の下におかれることになった。

竣工に当たって掲げられた扁額に、「大学を京都に興し、博く天下の学士を徴し、以って人材を教育し、且つ尊攘堂を建て、而して忠臣義士の霊を祭る是れ松陰吉田先師の志也」と記されたことから、吉田松陰が興隆を望んだ京都の学習院と京都大学を同一視しようとした、関係者の本学に対する認識がうかがえよう。

尊攘堂保存委員は、本学において、毎年、吉田松陰の忌日である10月27日と品川弥二郎の忌日である2月26日に例祭を執り行ってきたが、戦後は行われることはなくなった。

昭和14(1939)年には、附属図書館新設のために西へ移転し、現在にいたっている。

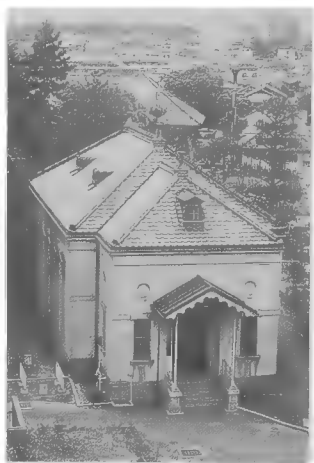


写真1-8-13 尊攘堂(埋蔵文化財研究センター資料室)

9. 文学部陳列館 大正3(1914)年

文学部陳列館も、他の多くの建築と同様に、何度かの増築を経て、コの字型平面をもつにいたった。まず大正3年、山本治兵衛と永瀬狂三の設計によって、コの字型の南部分が建てられた(第3期-1)。続いて大正12(1923)年(第4期-1)、大正14(1925)年(第4期-2)と、永瀬を



写真1-8-14 文学部陳列館

はじめ武田五一、松江秀季らによって、東面が北へと増築されていく。昭和4(1929)年、永瀬によって北面が増築され(第4期-3)、口の字型平面が完成した。現在では、文学部博物館の新設にともなって、北面と西面が失われている。

全体は、2階建て、棧瓦葺、寄棟造りの建築である。昭和4年の増築部分は鉄筋コンクリート造りであるが、それよりも前に建設された部分はすべて煉瓦造りである。外壁はモルタル目地切仕上げとし、煉瓦の地膚を一切みせない。

軒回りは、正統なエンタブラチュアを備えた様式建築である。南側正面の中央に玄関入口を開き、アールヌーボー風の意匠でまとめられた、鉄骨造りのポーチを設けている。玄関ポーチには、片寄棟造りの屋根が懸けられ、陳列館頂上の左右に置かれたランタンとともに、軽やかな印象をつくりだしている。玄関上部にはセグメンタルアーチのブロークンペディメントが置かれ、円窓を設けている。正面両端には、ブロークンペディメントが置かれ、楕円形の窓が設けられている。正面の玄関入口以外では、窓は1階・2階を一体として扱い、それらの頂上はセグメンタルアーチとして、キーストーンをはめ、モルタル目地切仕上げのブーソアールで装飾している。

文学部陳列館は、ブロークンペディメント・コンソール・楕円形の窓など、ネオバロックの意匠、アールヌーボー様式のポーチ、屋根に置かれたドーマ窓などによって、豊かに装飾されている。全体の均整も良くとれており、本学の中でも特に正統な様式建築として、高く評価できる。

10. 生理学教室旧研究室(医学部国際交流セミナー室)大正3(1914)年

生理学教室旧研究室は、現在、医学部国際交流セミナー室となっている。煉瓦造り、1階建ての小建築で、棧瓦葺・寄棟造りの屋根を戴く、小建築ではあるが、意匠のまとまった美しい建築である。山本治兵衛・永瀬狂三が設計にたずさわり、大正3年に竣工した。現在も、竣工当初の姿をよく残している。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

平面は左右対称の構成となり、近衛通りに面して建ち、正面に入口のポーチ、東西の側面に入口、背面に煉瓦造りの張り出しを付設して入口を開いている。四面に低く簡素な石の基礎をまわし、軽やかな印象を与える。屋根には、正面と背面に2つずつ、両側面に1つずつ、三角形のドーマ窓が置かれ印象的であるが、この意匠はかつての法医学教室本館でもみられる。法医学教室本館は、山本治兵衛の設計によって明治43(1910)年に竣工しており、この意匠を受け継いだようである。



写真 1-8-15 生理学教室旧研究室
(医学部国際交流セミナー室)

正面中央では、アーチ状の大きな開口を設け、ポーチ屋根で上部の窓と下部の玄関入口に二分している。開口の両脇には薄いピラスターが取り付けられ、玄関部分を左右から分節しているが、このピラスターはすでにペディメントを受けることはない。上部ではパネル状に壁が立ちあげられ、中央に円窓を開いている。上辺を縁取る蛇腹は中央でさらに三角形に立ちあげられ、ペディメントの名残と解される。ペディメント状に立ちあげられた蛇腹の頂上では、大きな要石を置く意匠がとられている。ペディメントでみられる意匠は、明らかに文学部陳列館でみられたような、正統な様式とは異なっていることは注目に値する。また、玄関部分左右の窓は上部をアーチ状にして頂上に要石をはめこみ、これまでの煉瓦造りの建築よりも大きくとられている点も特徴としてあげられよう。

本建築でみられる、玄関部分の彫りの薄いピラスターなどの平面的な処理、大きく開いた窓は、続く大正6(1917)年竣工の土木工学教室本館へとつながっていくものである。生理学教室旧研究室は、正統な様式からの分離を示す初期の作品であるとともに、後へと受け継がれる要素を備えた興味深い建築である。

11. 土木工学教室本館 大正6(1917)年

土木工学教室本館は、大正6年の土木工学教室の移転にともなって新築された。煉瓦造り、2階建て、瓦葺の建築で、設計は山本治兵衛と永瀬狂三である。大正13(1924)年、永瀬の設計によって本館の両脇に、東西棟が増築されている。



写真 1-8-16 土木工学教室本館

正面玄関部分では、各要素をパネル化し、それらを何重にも集積してファサードを構成し、明治期の建築に比べると彫りが浅くなっているものの、豊かな表情をつくりだしている。すなわち、2本ずつ組みになったピラスター(片蓋柱)が左右に配され、玄関部分の両脇をかためている。その上にブロークンペディメントが置かれ、ペディメントの背後にはアチック(軒上の屋階)が控えている。この手法は、すでに本館の3年前、永瀬が山本治兵衛とともに文学部陳列館を設計する際に用いられていた。土木工学教室本館では、1階玄関開口がエンタブラチュア・ペディメントを備えた独立パネルからなり、ピラスターから前、すなわちファサードの一番前面に張り出されている。

また、煉瓦の赤い地膚に、白い花崗岩で描き出されたりンテルコースは、2階窓の形に合わせてセグメンタルアーチ状になる。玄関部分の2本組みにされたピラスター上には、本来ならば直線状のアーキトレーブが置かれるべきところに、やはり花崗岩でセグメンタルアーチが描き出され、キーストーンがはめ込まれる。このように、永瀬の本館の設計では、文学部陳列館でみられたような正統な様式を構成の基本としながらも、そこから抜け出そうとする意図が多分に含まれていたのである。すなわち、文学部陳列館から土木工学教室本館への変遷において、古典様式の解体と自由な様式への展開を見

て取ることができる。

土木工学教室本館は、現在、工学部電気系教室や文学部東館などが並ぶ、南北の通りの北の突き当たり[▲]に正面玄関が位置する。本館は南北軸のアイ・ストップとして、本部地区の景観を構成する重要な要素の1つとなっている。

12. 建築学教室本館 大正11(1922)年

建築学教室本館は、大正11年、建築学科の開設に力を尽くし、自ら初代教授となった武田五一の設計によって竣工した。本建築は、最新の鉄筋コンクリート構造を採用した建築であり、またゼツェシオンの色彩の濃い斬新な意匠においても、以後の本学における新たな展開の画期となる作品であった。



写真 1-8-17 建築学教室本館

小豆色の外装タイル、正面入口上部の湾曲した壁面、頂冠帯の装飾、あるいはゆるやかな円を描く階段室などは、これまでの様式建築にはみられなかった表現である。また本来、エンタブラチュアを受けるはずのピラスターはパラペットまで延び、すでに支えるための柱としての意味を失っている。これらの意匠は、明らかにこれまでの古典主義的様式の枠から抜け出している。

正面玄関部分の上部では、壁面はゆるやかな曲面を描いて湾曲し、それにバルコニーも対応している。土木工学教室本館でみられたような彫りの浅い、平面的なファサードの造形に加え、平滑に張り詰められたタイル材は、ゼツェシオンの意匠と相まって、壁の重みを感じさせない独特の印象を与える。

13. 農学部表門および門衛所 大正13(1924)年

農学部表門および門衛所は大正13年に農学部本館(現存せず)と同時に竣工した。設計者は分離派建築会のメンバーで、大正12(1923)年に京都大学助教授に着任した森田慶一であり、当作品が処女作となった。



写真 1-8-18 農学部表門および門衛所

美しい反転曲線を描く尖頭アーチや、石張りの菱形断面の柱などにみられる大胆な表現派的意匠は、鉄筋コンクリート造りのフレームに日本瓦を載せるという簡潔な構成によって抑えられ、北部構内の性格に調和したものとなっている。すらりと水平方向に延びた屋根も、無装飾でマッシュな門衛所部分と対比されてきつそうとして印象深い。小品ではあるが本学における傑作の1つにあげられるだろう。

竣工当初は、農学部にはちょっと変わった門がある、と各所で語り草になり、遠方からわざわざ見学に来る人もいたという。なお、門から今出川通りに至る道の中央にあった並木は、残念ながら全部枯れてしまい、その後道の両側にヒマラヤシーダーが植えられた。現在では農学部の一景観をなすほどの立派な並木道となっている。

14. 事務局本館 大正14(1925)年

第三高等中学校の創設以来、20年以上その堂々たる威容を誇っていた本館は、大正元(1912)年に焼失する。その後、大正14年、マンサード屋根を戴いた煉瓦造りの初代本館に代わって、時計台を備えた鉄筋コンクリート造りの現本館が竣工した。設計は、新設された建築学科の教授武田五一が担当したが、このほか永瀬狂三、建築構造学の助教授坂静雄が参加していた。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

本館のデザインには、もともとウィーンで始まり、日本でも明治末期から大正期に流行した様式であるゼツェシオンの影響を見て取ることができる。設計者の武田五一は、好んでこの様式を用いていた。



写真 1-8-19 事務局本館

時計台部分は、土木工学教室本館の正面玄関でみられた、パネル化された要素を重ね合わせて立面を構成する手法を用いているが、ここでは個々の要素はより単純化されて、もはや古典様式の要素としての形態をみることはできない。また、マッシュヴかつ平面的な玄関ポーチ部分は、正面開口部を支える八角形の柱、開口部の縁取り、パラペットの装飾など、ゼツェシオンの表現で構成されている。ところが、中心となる背後の本体部分では、わずかにピラスターの柱頭装飾に相当する部分にゼツェシオンの装飾を用いているにすぎない。

すなわち、先行する土木工学教室本館でみられる古典的様式を構成の骨格として、ゼツェシオンの装飾で彩ったものというほうが適切であろう。このような手法は、表現主義的展開がより顕著ではあるものの、すでに大正11(1922)年竣工の工学建築学教室本館でも用いられている。本館の設計において、様式を基本とし、ゼツェシオンの表現を細部装飾に止めたのは、本館が大学の最も中心となる建築であるということに対する配慮からであろう。

本館は武田五一の代表作というだけでなく、日本におけるゼツェシオン最後の大規模建築として価値は高い。

15. 楽友会館 大正14(1925)年

工学創立25周年記念事業の1つとして大正14年に建設された楽友会館は、同窓会館建設費拠金者で組織された同窓会楽友会が寄贈し、当時の総長荒木

寅三郎が「楽友」と名付けた。

設計を担当したのは、建築学科助教授に就任したばかりの森田慶一である。森田は、大正9(1920)年、東京帝国大学工学部建築学科の最上級6名で習作展を開き、「分離派建築会」を結成して、それまでの様式から脱皮し、個性の強いデザインを前



写真1-8-20 楽友会館

面に押し出していった。このような中央の前衛建築運動が、京都の風土の中に移植されて、結晶化したのが楽友会館である。

鉄筋コンクリート造り2階建ての斬新な意匠をもつ楽友会館は、スパニッシュ・ミッション様式を基調とし、鋭利な玄関ポーチの柱などの意匠と、円みをもつポーチの屋根が、よく調和している。正面の7本の柱は、外観を眺めるとき、Y字形の支持体にすぎないが、ポーチ内に足を踏み入れると、あたかも尖塔アーチであるかのようにみえる。これは、玄関入口の尖塔アーチとの相互作用による、図像の転換の効果から起こるものである。

楽友会館は、農学部表門、湯川記念館(基礎物理学研究所)とともに、森田の代表的作品である。

16. 農学部附属演習林旧本部事務室 昭和6(1931)年

農学部附属演習林旧本部事務室は、農学部表門を入り、北に上がったところにある。さまざまな樹木に囲まれて芝に浮かぶ、バンガロー風の建物がそれである。周囲の農学部グラウンドや農学部附属農場、理学部附属植物園とともに独特の農村的景観がそこには形成されている。

農学部附属演習林が設けられたのは農学部設置以前の明治42(1909)年のことである。当初演習林に関する事務は本学本部事務室で処理されていたが、大正12(1923)年に農学部が設置されると、独立した演習林本部事務室が設け

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

られることになる。農学部本館での仮住まいから、大正15(1926)年、再び本部事務室に戻り、その後昭和6(1931)年に当地に新築された建物に移っている。

この建物は木造平家建てで、屋根にはスペイン瓦を葺き、部分的にベランダをめぐらしている



写真 1-8-21 農学部附属演習林旧本部事務室

る。深い懷をもったベランダ部分の庇は濃い陰をつくり出し、明るい色の瓦、芝とのコントラストが美しく、単純な構成のプランに奥行きをもたしている。また、北側が開けたコの字型配置により生まれる中庭は、外部から切り離された静的な空間をつくり出すが、適度に開けたその構成によって閉鎖的でなく明るい。

そのほか、控えめに装飾が施された庇を支える印象的な斜材、柱や、照明と南東の玄関部分天井にみられるアールデコ風の装飾など、設計者の細かな配慮がうかがえる瀟洒な作品である。

設計者である大倉三郎は昭和初期の主要な施設をほとんど手掛け、医学部では無装飾の近代建築群を生む一方、本部構内では既存の建築に合わせて様式的にまとめるなど、周辺環境に合わせて作風を使い分ける柔軟さをもっていた。当地の農村的景観も彼のそういう配慮の結果であり、現在も北部構内を特徴づける一景観として重要な位置を占めている。

17. 清風荘 国指定名勝

現在、京都大学の迎賓館として用いられる清風荘は、百万遍交差点西入ル北側に、およそ4,000坪の敷地を有している。邸内には京都大学が所有する施設で唯一つの国の名勝に指定されている庭園がある。

もともと清風荘は、享保17(1732)年頃に建てられた徳大寺家の別荘で、清

風館と呼ばれていた。近代になって、徳大寺公純の第6子としてこの地で生まれ育った春翠が、住友家の養子(15代住友吉左衛門)となり、徳大寺家より当邸を譲り受けると、実兄である政治家、西園寺公望の京都別荘にあて、清風荘と改称し、建物の増補改築を行った。庭園の造成もこの頃である。



写真 1-8-22 清風荘

この庭園は、近代造園の先覚者として名高い7代目小川治兵衛(植治)によるものであり、明治44(1911)年に着工され、大正2(1913)年に完成している。回遊式の庭園であり、建物の前面部分に池がうがたれ、芝生地に緩やかな起伏をもった広庭は、明るく開放的である。めずらしい朝鮮灯籠も配され、灯籠や伽藍石といった石造品への植治のこだわりがここからも感じられる。また一方で、玄関前庭は苔張りに細い黒竹を群植し、優雅な雰囲気醸し出している。これに続く茶庭も巧みですばらしい。

植治は、京都の古い作庭法に批判的で自由な造園観をもった山県有朋に出会い、新しい作風を確立していった。山県の南禅寺近くにある別荘、無隣庵での作庭は植治の原点であり、彼はここで、琵琶湖疏水の水と東山の自然景観を利用した、軽快な水の流れをモチーフとする自然風の明るい庭園を生み出す。その作風は、その後も数多くつくられた岡崎・南禅寺界隈の住宅庭園で発展させられ、当清風荘の庭園はその延長上にある。

建築についても、構造、材料ともに得がたい逸品を使用した、近代日本建築を代表する優れたものとして知られる。特に茶室はすばらしく、前庭に続く保真斎(四畳半台目)は創建当初のものという。

西園寺公望の死後、建物を管理していた住友家より京都大学が譲り受け、現在は、清風荘管理委員会が管理運営に当たっている。主に内外賓客の接

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

待、教官の会合に利用され、邸内の一部(付属の畑地)には本学女子学生寮が建設されている。

〔注〕

本章第1～9節の内容、記述は、京都大学キャンパスの歴史について今や古典となった基礎的労作、本学工学部建築学教室建築史研究室『京都大学建築八十年のあゆみ』に依拠したところがきわめて大きい。また勝田知親『大倉三郎に関する建築史的研究』(修士論文、平成7年工学研究科建築学専攻修士課程修了)、真木利江『京都大学構内における空間構成の変遷についての研究』(修士論文、平成8年工学研究科建築学専攻修士課程修了)を参照し、有益な成果を多数利用している。一々引用の注記はしなかったが、ここに感謝の意を表する次第である。

本章第1～9節の執筆に当たっては、高橋康夫が全体を取りまとめ、ほとんどを執筆したが、一部、富島義幸(建築学専攻博士課程3回生第1節第1、2、3項)、星秀樹(生活空間学専攻修士課程1回生第9節第13、16、17項)が執筆した。また図面は星が作成した。

〔補注〕

京都大学キャンパスにおける登録文化財

本文(896頁)でも述べているように、文化財保護法が平成8(1996)年に改正され、「文化財登録制度」が発足した。平成10(1998)年になって本学キャンパスの歴史的建造物のいくつか、本制度によりあいついで登録されるにいたった。歴史の長さ比べ、国指定の重要文化財建造物のない本学にとって、大変喜ばしいことであり、以下にその名称をあげて、将来の活用と保全を期待したい。

楽友会館 大正14(1925)年

農学部表門及び門衛所 大正13(1924)年

尊攘堂(埋蔵文化財研究センター資料室) 明治36(1903)年

文学部陳列館 大正3(1914)年

農学部附属演習林旧本部事務室 昭和6(1931)年

第9節 京都大学キャンパスの歴史的建造物

なお、本文では取り上げることができなかったが、大分県別府市にある理学部附属地球物理学研究施設は、平成9(1997)年に登録文化財となっている。永瀬狂三の作品で、大正13(1924)年竣工。古典的な外観の煉瓦造り建築として、地域の人々に親しまれている。

第10節 キャンパスの緑地と樹木景観

緑の環境が求められている昨今、京都大学キャンパスの緑地や樹木景観の変遷を知り、今後のキャンパス緑地の方向を考えることは有意義であると思われる。

京都大学のキャンパスの変遷に関しては、これまでいくつかの調査報告⁽¹⁾が行われているが、そのいずれもは主として建築物の変遷に視点が置かれ、それにともなって、土地面積、建築面積、および建ぺい率の変遷が示されていて、ここで取り上げているキャンパスの緑地や緑被率の変遷についての調査は見当たらない。したがって、このような資料から過去のキャンパスの緑地の状態を知ることは困難である。そこでまず、次のような方法によってキャンパスの緑地の変遷をさぐることにした。

第1項 キャンパス緑地の変遷

昭和22(1947)年、昭和42(1967)年、昭和57(1982)年および平成2(1990)年の、京都大学キャンパスが撮影されている空中写真を用意した。ここでこのような年の空中写真を用意したのは、写真入手可能な戦争直後、経済成長期、高度成長期、および最近の4段階を想定したためである。これらの写真を約5,000分の1の縮尺に拡大、統一し、各年の写真から樹木に覆われていると判別しうるところをキャンパスの緑地と定め、その面積を測定した。そしてこの面積をもってキャンパスの緑地面積とした。同時に、写真よりキャンパスの土地面積、建造物面積、建造物で覆われていないオープンスペース面積(緑地面積を含む)を測定した。ここでいうキャンパスとは、北部、本部、

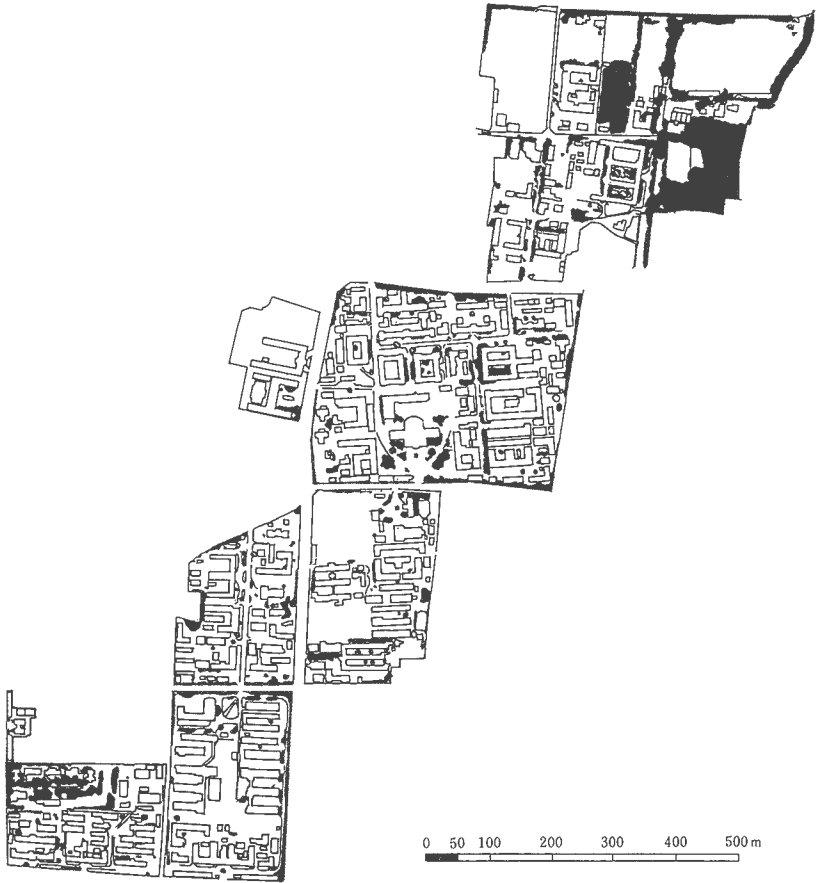


図1-8-18 昭和22年の北部、本部、西部、医学部、教養、病院および南部の各キャンパスの緑地(縮尺:約1/7,000)

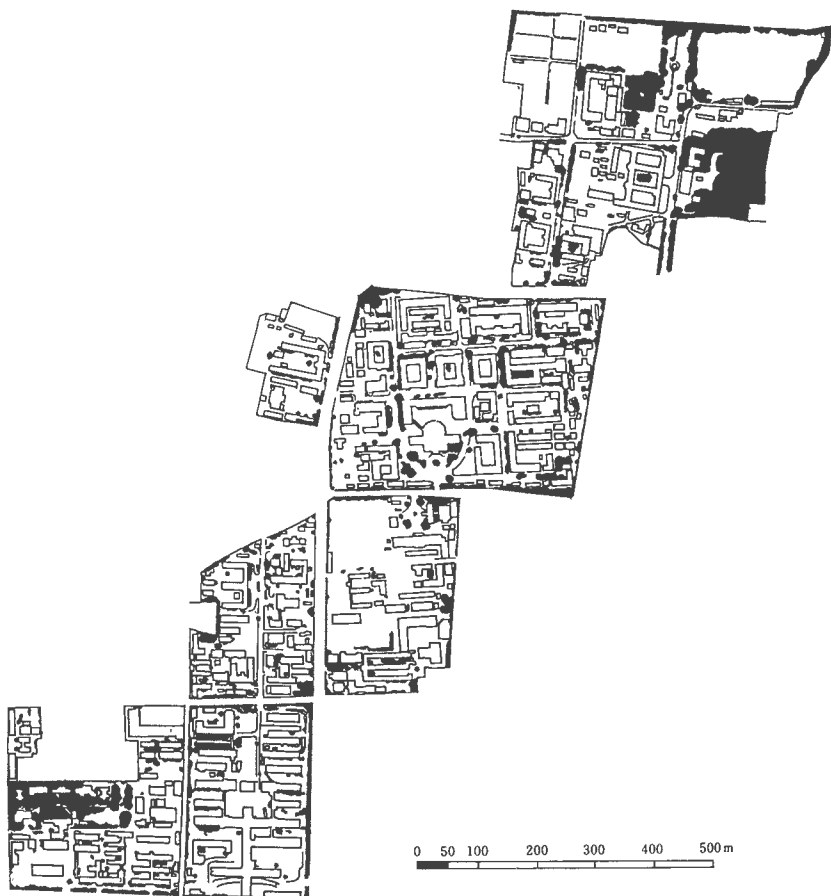


図1-8-19 昭和42年の北部、本部、西部、医学部、教養、病院および南部の各キャンパスの緑地(縮尺：約1/7,000)



図 1-8-20 昭和57年の北部、本部、西部、医学部、教養、病院および南部の各キャンパスの緑地(縮尺：約 1/7,000)

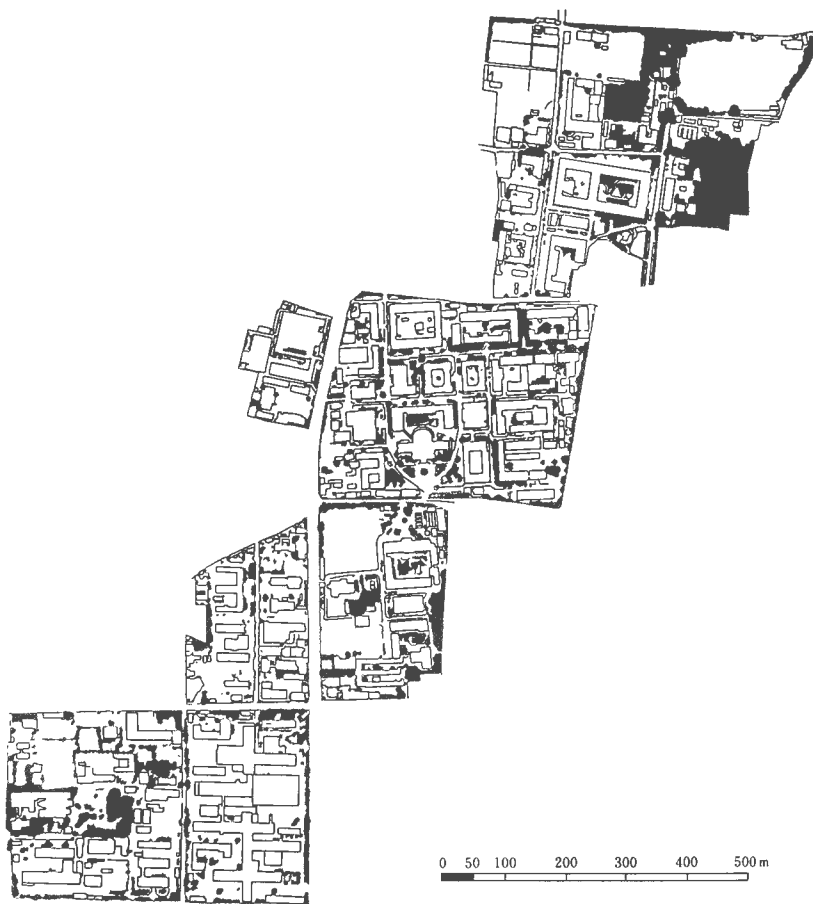


図1-8-21 平成2年の北部、本部、西部、医学部、教養、病院および南部の各キャンパスの緑地(縮尺:約1/7,000)

第10節 キャンパスの緑地と樹木景観

表 1-8-9 緑地面積、オープンスペース面積、建造物率、緑被率、
オープンスペース率などの推移

昭和22年							
場 所	土地面積	建造物面積	緑地面積	OS 面積	建造物率	緑被率	OS 率
	㎡	㎡	㎡	㎡	%	%	%
北 部	157476.29	19129.936	43648.349	138346.354	12.15	27.72	87.85
本 部	124709.95	40168.294	13861.373	84541.656	32.21	11.11	67.79
西 部	20747.712	4896.6137	653.60747	15851.0983	23.60	3.15	76.40
医 学 部	45241.036	11734.783	3700.4813	33506.253	25.94	8.18	74.06
総合人間	62584.59	16141.276	4017.2086	46443.314	25.79	6.42	74.21
京大病院	60381.826	17591.947	4946.6102	42789.879	29.13	8.19	70.87
南 部	48969.496	13063.456	7131.5771	35906.04	26.68	14.56	73.32
総 計	520110.9	122726.3057	77959.20667	397384.5943	23.60	14.99	76.40
昭和42年							
場 所	土地面積	建造物面積	緑地面積	OS 面積	建造物率	緑被率	OS 率
	㎡	㎡	㎡	㎡	%	%	%
北 部	157476.29	20599.068	30492.244	136877.222	13.08	19.36	86.92
本 部	124709.95	38496.792	16282.554	86213.158	30.87	13.06	69.13
西 部	19888.283	4318.18	1459.141	15570.103	21.71	7.34	78.29
医 学 部	45241.036	12524.225	4363.088	32716.811	27.68	9.64	72.32
総合人間	62584.59	14920.519	5556.328	47664.071	23.84	8.88	76.16
京大病院	60381.826	18348.877	6702.2864	42032.949	30.39	11.10	69.61
南 部	61909.563	17190.553	11698.778	44719.01	27.77	18.90	72.23
総 計	532191.538	126398.214	76554.4194	405793.324	23.75	14.38	76.25
昭和57年							
場 所	土地面積	建造物面積	緑地面積	OS 面積	建造物率	緑被率	OS 率
	㎡	㎡	㎡	㎡	%	%	%
北 部	157476.29	25473.795	35457.462	132002.495	16.18	22.52	83.82
本 部	124709.95	39895.01	20407.668	84814.94	31.99	16.36	68.01
西 部	19581.695	9113.4645	1813.9255	10468.2305	46.54	9.26	53.46
医 学 部	45241.036	12627.085	5050.1005	32613.951	27.91	11.16	72.09
総合人間	62584.59	13931.255	12116.91	48653.335	22.26	19.36	77.74
京大病院	60381.826	18611.577	5277.9115	41770.249	30.82	8.74	69.18
南 部	81481.523	17133.799	15751.073	64347.724	21.03	19.33	78.97
総 計	551456.91	136785.9855	95875.0505	414670.9245	24.80	17.39	75.20
平成 2 年							
場 所	土地面積	建造物面積	緑地面積	OS 面積	建造物率	緑被率	OS 率
	㎡	㎡	㎡	㎡	%	%	%
北 部	157476.29	29091.695	42139.18	128384.595	18.47	26.76	81.53
本 部	124709.95	45992.606	21364.411	78717.344	36.88	17.13	63.12
西 部	19581.695	9143.4546	1864.0069	10438.2404	46.69	9.52	53.31
医 学 部	45241.036	13206.518	5069.8779	32034.518	29.19	11.21	70.81
総合人間	62584.59	15402.475	12264.514	47182.115	24.61	19.60	75.39
京大病院	60381.826	25191.074	7197.7564	35190.752	41.72	11.92	58.28
南 部	81481.523	18803.858	15508.07	62677.665	23.08	19.03	76.92
総 計	551456.91	156831.6806	105407.8162	394625.2294	28.44	19.11	71.56

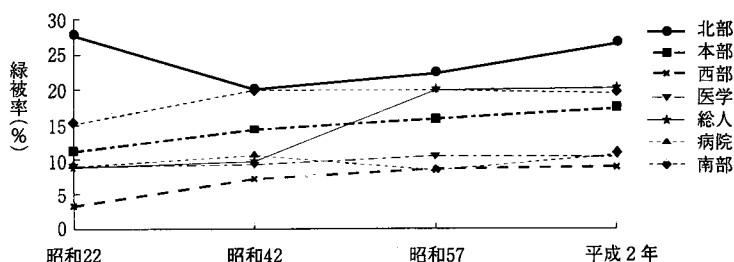


図 1-8-22 緑被率の変化

西部、医学部、総合人間(旧教養、吉田)、京大病院(病院東部)、南部(薬学、病院西部)の7地区を指している。したがって、熊野寮、女子寮、清風荘は含まれていない。なお、写真より透明紙に写し取り、縮小して示したものが図1-8-18、1-8-19、1-8-20、1-8-21である。上記の方法により、各年の土地面積、建造物面積、緑地面積、オープンスペース面積、および建造物率(建造物で覆われている面積の土地面積に対する百分率)、緑被率(緑地面積の土地面積に対する百分率)、オープンスペース率(オープンスペース面積の土地面積に対する百分率)を示したものが表1-8-9である。この表から、緑被率の変化を図示すると図1-8-22のようになる。

1. オープンスペース率と建造物率の変化

まず、オープンスペース率(以下OS率という)をみると、OS率が高いのは北部、南部、総合人間学部、医学部であり、70%を超えている。その率が低いのは西部、病院、本部であり、西部と病院は60%を割っている。OS率はおおむね減少の傾向がみられるが、漸次減少しているキャンパスと急激に減少しているキャンパスの2つに分けられる。前者は北部、南部、総合人間学部、医学部、本部であり、ある時期急激に減少しているのは西部と病院である。特に西部では昭和57年時期に、病院では平成2年時期にその率の減少が激しい。

OS率に対して建造物率は当然、逆の傾向をみせている。西部では昭和57

年時期で急増しており、病院では平成2年時期に大きく増加している。また、本部では平成2年時期に建造物率の増加がみられる。それぞれこのような時期に建築が進行したのは、西部では体育館やプール、病院では新病棟の、また本部では図書館等の建造によるものであろう。

2. 緑被率の変化

一方、緑被率をみると、緑被率は30%を超えるキャンパスはなく、そのほとんどは20%以下である。平成2年時期で緑被率の高いキャンパスは、北部、総合人間学部、南部で、北部は20%を超え、他は20%に近い。同時期で緑被率の低いのは西部、医学部および病院であり、本部は全体の平均よりも少し低い値である。

緑被率の年次的変化をみると、北部では昭和42年時期に緑被率が減少している。これは農場果樹園や理学部植物園樹林地の減少によるものとみられる。北部では昭和57年時期にOS率が減少しているのは主として農学部本館等の建造によるものであるが、緑被率の方は昭和42年時期以降で増加を続け、平成2年時期では昭和22年時期の緑被率に近付いてきている。特に近年の増加は樹木の成長によるもののほかに、農学部本館周辺の緑化に負うところが大きい。

緑被率の推移で注目すべきなのは総合人間学部キャンパスである。ここでは昭和42年から昭和57年時期にかけて緑被率が9%弱から19%強と大きく増加している。これも教養部校舎の建造にともない緑化が進められた成果と考えられる。

これ以外のキャンパスではおおむね微増の傾向にある。全体的には病院のように若干の増減が繰り返されているのは建物の建造とその後の緑化の結果とみなされる。

第2項 樹木景観——キャンパスにおける大径木の消長

キャンパス緑地に生育する高木や大径木群は、キャンパスの景観の骨格ともなり、建造物をやわらげ人工と自然との調和的景観を提供するとともに、その土地の時間的経過を物語り、歴史を感じさせてくれる重要な景観要素である。それだけでなく、高木や大径木群は、昆虫類や鳥類などの生物の生息ないし移動のための環境を形成するとともに、微気象の緩和などの環境形成作用にとっても重要な役割を果たしている。ここではここ5年間における大径木の消長について述べる。

平成2年に京都大学農学部附属演習林によって大径木の形状と管理状況が調査されている。これに基づいて平成7年に造園学研究室でその追跡調査を行った。調査したキャンパスは、北部、本部、総合人間(教養)、西部、医学部、南部(薬学等の南部と東西の病院地区を含む)および宇治である。調査の方法は、平成2年に記録されている直径30cm以上の樹木を同定し、その有無

表1-8-10 平成2年と平成7年における大径木の生育状況

場 所	生育本数(本)		平均 BH 断面積 (cm ² /本)		BH 断面積合計 (m ² /ha)	
	平成2年	平成7年	平成2年	平成7年	平成2年	平成7年
北 部	340	307	1107	2173	1.97	3.50
本 部	438	431	1706	1995	3.80	4.39
西 部	54	59	1491	1624	2.67	3.18
医 学 部	122	126	1831	1694	3.72	3.56
総 合 人 間	228	194	1824	2305	5.13	5.51
病院+南部	266	244	1516	1855	1.86	2.08
宇 治	340	273	1351	1238	2.12	1.56
合計 or 平均	1788	1634	1546.6	1840.6	3.038	3.397

注1 BHは胸高(地表より1.3mの高さ)を表す。

2 理学部植物園を除く。

と、生残の場合は胸高直径を測定し記録した。これ以外に、この5年間に成長し、胸高直径が30cm以上に達した樹木をも胸高直径を測定して記録した。

このほか、平成2年の調査では、いくつかのキャンパスでの記念樹の樹種と胸高直径が測定されている。これについても平成7年にその消長を知るために追跡調査を行い、生残のものについては胸高直径を測定した。

1. 大径木の消長

表1-8-10は、平成2年と平成7年の時点で各キャンパスに生残する大径木の本数、平均胸高断面積および胸高断面積合計(ha当たり)を示したものである。この平成2年と平成7年の本数の差は大径木の消滅によるものと、5年後に大径木に達したものとを差し引きした後の差である。

平成2年と平成7年における各キャンパスの大径木の主要樹種別本数を表1-8-11に示した。表1-8-10はこれ以外の樹種を含んでいるので表1-8-11の数値とは一致しない。

表1-8-10より、キャンパス全体での大径木の本数は、5年間で約150本少なくなっている。5年間での本数の差が多いのは、宇治、総合人間、北部、病院・南部であり、そのほかのキャンパスは微増か微減である。このように本数は減少しているが、全体としては1本当たりの平均胸高断面積やha当たりの胸高断面積合計は少し増加している(3.03m²から3.39m²に)。これは、5年間に成長して大径木としてカウントされた樹木によって補われているためと考えられる。5年間で差し引き150本の減少は少ない数ではなく、大径木の減少がこれよりも少なければ、胸高断面積合計の増加はさらに大きくなっていただと思われる。なお、ここで胸高断面積合計(基底面積 basal area の合計)というのは、単位面積(ha)当たりの胸高断面積(地上より1.3mの高さの幹の断面積)を合計した値で、単位面積に成立している樹木の量を表すのに便利である。ちなみに、成熟した森林の一例として、近くの京都下鴨糺の森の胸高断面積合計(ha当たり)は50～60m²である。

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

表1-8-11 大径木の本数—広葉樹および針葉樹

常緑広葉樹	クスノキ			タイサンボク			アラカシ		
	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減
北 部*	10	9	-1	1	1	0	0	0	0
本 部	100	83	-17	1	2	+1	2	3	+1
西 部	6	6	0	0	0	0	1	1	0
医 学 部	9	15	+6	0	0	0	0	0	0
総 合 人 間	22	22	0	2	2	0	0	0	0
病 院 + 南 部	43	27	-16	20	16	-4	1	4	+3
宇 治	3	3	0	0	0	0	18	15	-3
合 計	193	165	-28	24	21	-3	22	23	+1
落葉広葉樹	エノキ			サクラ			アオギリ		
	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減
北 部*	18	10	-8	12	9	-3	14	13	-1
本 部	26	20	-6	11	8	-3	11	12	+1
西 部	1	1	0	0	0	0	0	0	0
医 学 部	12	5	-7	0	2	+2	10	8	-2
総 合 人 間	36	26	-10	19	4	-15	10	10	0
病 院 + 南 部	33	32	-1	19	11	-8	4	3	-1
宇 治	30	26	-4	5	4	-1	1	0	-1
合 計	156	120	-36	66	38	-28	50	46	-4
常緑針葉樹	クロマツ			ヒマラヤシーダー			外国産マツ**		
	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減
北 部*	14	11	-3	21	35	+14	10	10	0
本 部	114	113	-1	47	48	+1	5	5	0
西 部	0	0	0	0	0	0	0	0	0
医 学 部	13	9	-4	8	7	-1	2	4	+2
総 合 人 間	15	7	-8	3	2	-1	0	0	0
病 院 + 南 部	14	14	0	32	23	-9	1	1	0
宇 治	110	72	-38	3	3	0	38	37	-1
合 計	280	226	-54	114	118	+4	56	57	+1
落葉針葉樹	イチヨウ			メタセコイア			ラクウショウ		
	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減	平成2年	平成7年	増減
北 部*	61	61	0	13	13	0	1	1	0
本 部	46	32	-14	20	20	0	0	0	0
西 部	30	31	+1	13	15	+2	0	0	0
医 学 部	32	31	-1	6	6	0	0	0	0
総 合 人 間	44	41	-3	14	11	-3	0	0	0
病 院 + 南 部	15	15	0	2	0	-2	0	0	0
宇 治	1	1	0	6	6	0	8	8	0
合 計	229	212	-17	74	71	-3	9	9	0

* 理学部植物園を除く。

** テーダ、アイグロ、ストローブ、ワシントニア。

表1-8-11での主要樹種別の大径木をみると、平成7年現在の宇治キャンパスを除く京都大学で大径木として多いのはクロマツ、イチョウ、クスノキ、エノキ、ヒマラヤシダー、外国産マツがあげられる。このうちクロマツは宇治キャンパスにその約半数近くがあり、総合人間、北部、病院等の一帯の地区で多いのは、イチョウ(211本)、クスノキ(162本)、クロマツ(154本)、ヒマラヤシダー(115本)、エノキ(94本)の順となる。イチョウ、クスノキ、クロマツの3種が京都大学の代表的な樹種であり、これに加えて上記の樹種がキャンパスの樹木景観の骨格をなしているといえよう。なお、宇治のキャンパスを除けば表1-8-11に示される大径木の種類のほとんどは戦前から植栽されていた樹種とみなされる。アオギリなどは京都市の街路樹でもほとんど見られなくなった樹種である。その中でメタセコイアは昭和20(1945)年に揚子江の奥地で発見された後、昭和25年木原均農学部教授によるメタセコイア保存会のもとでアメリカより送られてきた苗木100本のうち3本が理学部植物園、1本が教養部構内、3本が演習林上賀茂試験地で生育している。その後植物園や演習林で繁殖されたものがキャンパスに植栽されていたという由緒ある樹種である。

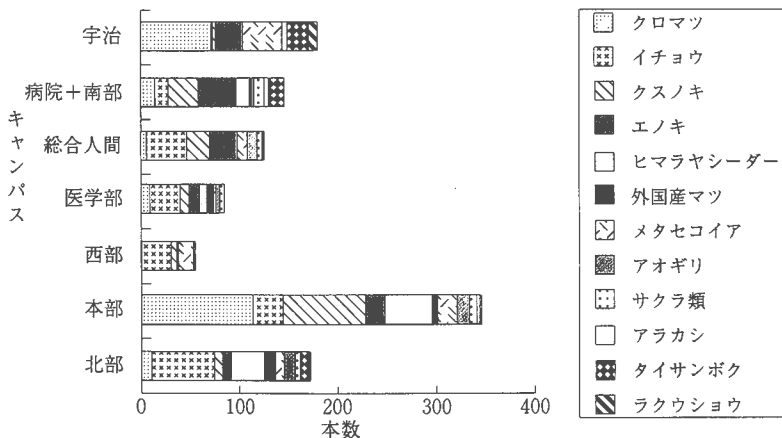


図1-8-23 平成7年における大径木の主要樹種と本数

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

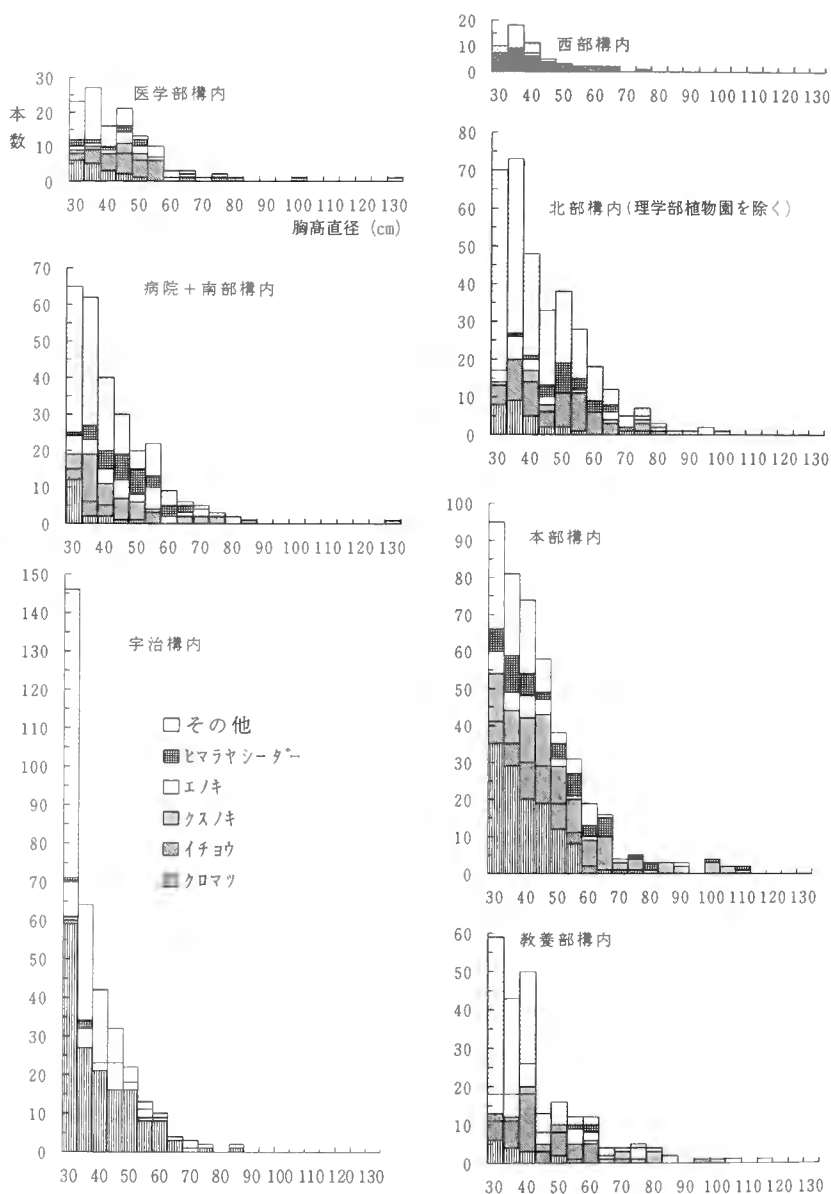


図 1-8-24 大径木の直径階別本数分布(平成 2 年)

第10節 キャンパスの緑地と樹木景観

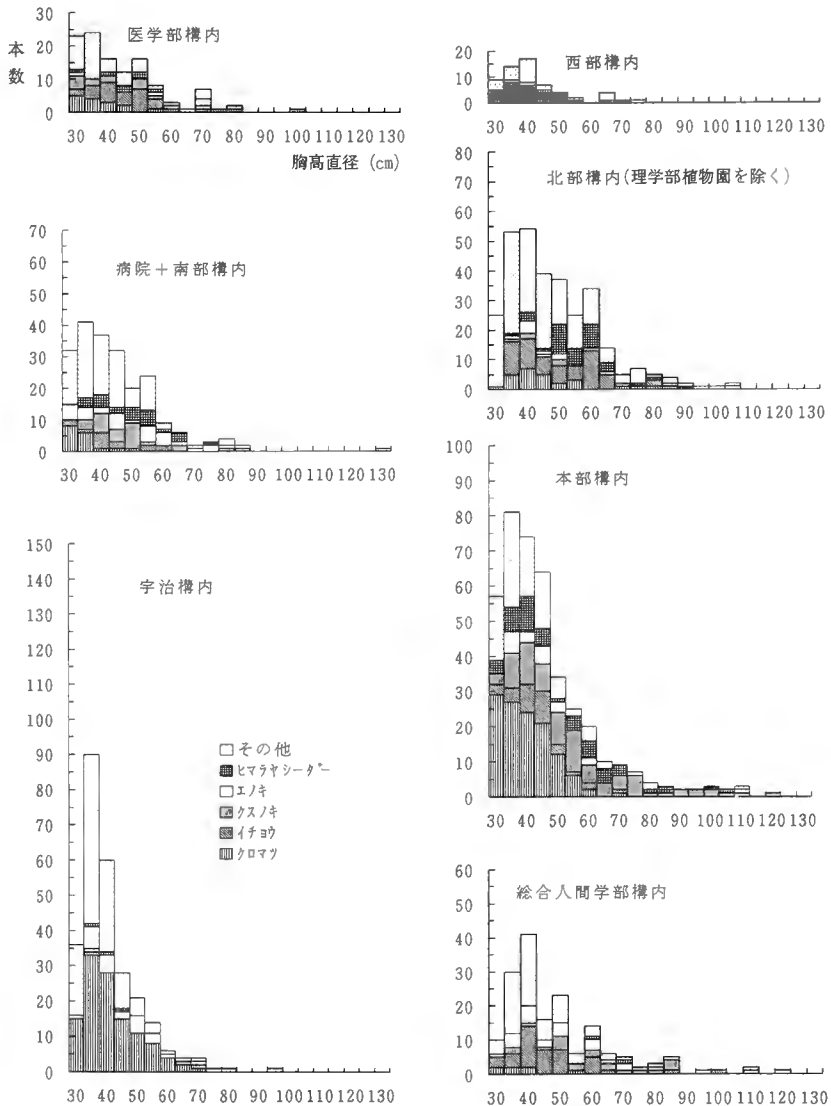


図 1-8-25 大径木の直径階別本数分布(平成 7 年)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

平成7年での大径木の樹種構成を各キャンパスごとに示したのが図1-8-23である。さらに図1-8-24、1-8-25は、平成2年と平成7年における大径木の樹種別、キャンパス別の直径階における本数分布を示したものである。図1-8-23によって各キャンパスの大径木の生残状況と樹種構成からみた特色がわかる。大径木主要樹種の本数が多いのは本部、北部、病院・南部であるが、緑地面積のha当たり本数では西部、本部、医学部が多い。本部に大径木が多いのは構内敷地としての歴史が最も古いためであろう。樹種別では、クロマツは本部と宇治に多く、イチヨウは北部に多いが他のキャンパスにもほぼ満遍なく植栽されており、クスノキは本部に多い。エノキはほとどのキャンパスにも分布している。この樹種は植栽されたものもあると思われるが、実生で生育してきたものが少なくないと考えられる。図1-8-24、1-8-25では、全体的には直径70cmを超える大径木は少なく、直径50cm以下のものが多い。そのうち、直径30cm程度のものが平成2年から平成7年までに減少していることがわかる。これに対して直径70cmを超える大径木の減少は顕著でない。このことは超大径木に対する保護の考え方が働いているものといえようか。

次に樹種別の変化をみるとキャンパス全体で減少が最も多いのはクロマツの54本である。これに次ぐ樹種としてエノキの36本、サクラ類28本、クスノキ28本などである。クロマツが減少しているのは猛威をふるっているマツノザイセンチュウによる被害といわれるマツ枯れによるところが大きいと考えられる。ソメイヨシノに代表されるサクラ類の減少は寿命によるところであろうが、施設の建設などの際に枝が切られるなど幹枝に損傷を受けたことにより腐食が進み、枯損を早めたという事例も少なくはないであろう。

2. 記念樹の消長

平成2年に記念樹として判別できたものとして36本が記録されているが平成7年には24本が記録され12本が欠損となっている。

生残率の高いのは医学部キャンパスの記念樹であり、平成2年に記録され

たものは平成7年にはすべて生残している。そのうちクスノキの成長(胸高直径)が他の樹種よりも顕著である。全般的にもクスノキの成長が良好であるのに対し、ハナミズキ、モクセイ、サクラ、タイサンボクなどの花木類に欠損が多い。これは植栽後の環境の変化や維持管理のむずかしさにその原因があるのではないかと考えられる。

第3項 今後のキャンパス緑地について——調査を終えて

これまでみてきたように大学のキャンパス緑地の緑被率(樹木の被覆している緑地率)は20%前後で決して高くない。それぞれのキャンパスで緑化の努力がされつつあるが、近年、建造物の増加している中であって、キャンパスの過密化傾向は顕著である。大学院重点化にともなう建築計画に並行して適切な緑地計画をたてるべきときに来ているといえるだろう。

その緑被の内容は、キャンパスの歴史が古く大径木が残存しているが、施設建設でその生育空間が狭められ、根や枝が切られて樹勢が衰えていくというケースがみられ、大径木の減少がみられる。

キャンパスの緑地計画の中での、大径木をはじめ主要な既存樹木の保護、保存施策が講じられねばならない。それには大径木の個体登録と樹名板による表示を行うとともに、キャンパスの歴史を語る大径木の保存樹指定をする必要があろう。

保存樹として候補にあげられるのは次のようなものである。

北部：ヒマラヤシーダー並木

チャンチン

チャンチンモドキ(旧基礎物理学研究所前)

ユリノキ(明治43年京都大学に導入され、演習林で苗木養生、構内に植栽)

ヤマザクラ(数理解析研究所前、大正13年嵯峨広沢池畔から導入、枯損著しい)

第8章 京都大学キャンパスと建築の百年

ヨーロッパナラ(ドイツカシワ、オリンピックオーク、昭和11年ベルリン
オリンピックで三段跳び優勝の本学田島直人選手が持ち帰った苗
木、理学部植物園から終戦後農学部グラウンドへ移植)

メタセコイア(前出)

イチョウ並木(理学部)

カンボウフウ(物理学教室)

ケヤキ(農学部グラウンド入口)

エノキ(演習林東入口)など

本部：クスノキ(時計台前)

クロマツ、テーダマツ

メタセコイア列植(法経教室東側)

プラタナス(建築学教室北側)

クスノキ、ヒマラヤシーダー(今出川)、エノキ(各地)

総合人間学部：クスノキ列植(吉田グラウンド)

イチョウ並木(吉田寮)

カンボウフウ、ユリノキ、メタセコイア、サクラ類、エノキ

西部：イチョウ並木(東大路)

メタセコイア(北側の列植、東側の群植)

医学部：イチョウ並木

マツ属群植、エノキ

南部：ヒマラヤシーダー並木

タイサンボク、クスノキ、サクラ類

常緑広葉樹群(東大路、外周)

宇治：マツ属、エノキ、ムクノキ、ユリノキ、シマトネリコなど

このようにみえてくると今後のキャンパスの計画では、過密の中での大径木
保存をはじめとした景観保全の工夫が求められ、施設計画と同時に緑地計画
および景観保全計画の樹立が必要であると考えられる。

〔注〕

- (1) 1. 京都大学広報委員会編『京都大学建築八十年のあゆみ』1977年
2. 京都大学工学部建築系教室ほか『京都大学吉田キャンパスの90年と現状』1985年
3. 真鍋逸平・安藤信・川那辺三郎「京都大学構内植生調査1——大径木の樹種構成と管理状況の構内ブロック間の比較」『京都大学農学部附属演習林集報』21号、65-77頁、1991年
4. 安藤信・真鍋逸平・川那辺三郎「京都大学構内植生調査2——主要大径木の形状と管理状況」『京都大学農学部附属演習林集報』21号、79-101頁、1991年

上記の調査に対して演習林川那辺三郎教授と安藤信助教授からご助言を得た。ここに記して感謝の意を表したい。また現地調査では農学研究科森林科学専攻環境デザイン学分野の大学院生、学生の協力を得た。図1-8-18、1-8-19、1-8-20、1-8-21および表1-8-9は辻野恒一(環境デザイン学分野修士課程2回生、現：建設省)、表1-8-10、表1-8-11および図1-8-24、1-8-25は森本淳子(環境デザイン学分野修士課程2回生、現：博士課程)が作成した。なお、とりまとめは吉田博宣が行った。